

二〇二〇年二月

『河東記』訳注稿（七）

赤井益久 岡田充博 澤崎久和

第十八話 鄭馴（卷三百四十一・鬼二十六）

【全文】

鄭馴。貞元中進士擢第。調補門下典儀。第三十五。莊居在華陰縣南五六里。爲一縣之勝。馴兄弟四人。曰駟。曰驥。曰駒。駒與馴。有科名時譽。縣大夫洎邑客無不傾嚮之。馴與渭橋給納（納原作給。據明鈔本改。）判官高叔讓中外相厚。時往求丐。高爲設鱸食。其夜。暴病霍亂而卒。時方暑。不及候其家人。卽爲具棺槨衾襚歛之。冥器奴馬。無不精備。題冥器董背。一曰鷹兒。一曰鶻子。馬有青色者。題云撒豆驄。十數日。柩歸華陰別墅。時邑客李道古遊虢川半月矣。未知馴之死也。回至潼關西永豐倉

路。忽逢馴自北來。車僕甚盛。李曰。別來旬日。行李何盛耶。色氣忻然。謂李曰。多荷渭橋老高所致。卽呼二童。鷹兒、鶻子參李大郎。戲謂曰。明時文士。乃蓄鷹鶻耶。馴又指所乘馬曰。兼請看僕撒豆驄。李曰。僕頗有羨色如何。馴曰。但勤修令德。致之何難。乃相與並轡。至野狐泉。李欲留食。馴以馬策過。曰。去家咫尺。何必食爲。有頃。到華陰岳廟東。馴揖李曰。自此逕路歸矣。李曰。且相隨至縣。幸不廻路。馴曰。僕離家半月。還要早歸。固不肯過岳廟。須臾。李至縣。問吏曰。令與諸官何在。曰。適往縣南慰鄭三十四郎矣。李曰。慰何事。吏曰。鄭三十五郎。今月初向渭橋亡。神柩昨夜歸莊耳。李輒然曰。我適與鄭偕自潼關來。一縣人吏皆曰不虛。李愕然。猶未之信。卽策馬疾馳。往鄭莊。中路逢縣吏崔頻、縣丞裴懸、主簿盧士瓊、縣尉莊儒。

及其弟莊古、邑客韋納、郭存中。並自鄭莊回。立馬叙言。李乃大驚。良久方能言。且憂身之及禍。後往來者。往往於京城中鬧處即逢。行李僕馬。不異李之所見。而不復有言。出河東記

【原文】 1

鄭馴、貞元中進士擢第、調補門下典儀。第三十五。莊居在華陰縣南五六里、爲一縣之勝。馴兄弟四人、曰駟①、曰驥、曰駒②。駒與馴、有科名時譽、縣大夫洎邑客、無不傾嚮之③。馴與渭橋給納④判官高叔讓中外相厚。時往求丐⑤、高爲設鱠食。其夜⑥、暴病霍亂而卒。時方暑、不及候其家人、即爲具棺槨衾襚斂〔斂〕⑦之、冥器奴馬、無不精備。題冥器童⑧背、一曰鷹兒、一曰鶻子。馬有青色者、題云撒豆驄。十數日、柩歸華陰別墅。

【訓読】 1

鄭馴、貞元中進士に擢第し、門下典儀に調補せらる。第は三十五なり。莊居は華陰縣の南五六里に在りて、一縣の勝爲り。馴の兄弟は四人にして、駟と曰ひ、驥と曰ひ、駒と曰ふ。駒と馴とは科名時譽有りて、県大夫洎び邑客、之を傾嚮せざる無し。馴渭橋の給納判官高叔讓と中外にして相厚し。時に往きて求丐するに、高為に鱠食を設く。其の夜、暴かに霍亂を病みて卒す。時に方に暑ければ、其の家人を候つに及ばず、即ち為に棺槨・衾襚を具して之を斂め、冥器・奴馬、精備せざる無し。冥器の

童の背に題して、一は鷹兒と曰ひ、一は鶻子と曰ふ。馬に青色なる者有りて、題して撒豆驄と云ふ。十数日にして、柩は華陰の別墅に帰す。

【訳】 1

鄭馴は貞元年間に進士に及第し、門下典儀に選任された。排行は三十五である。別荘が華陰縣の南五六里のところにあつたが、そこは県で一番の景勝地であつた。馴の兄弟は四人いて、駟、驥、駒といった。駒と馴とは科挙に及第し、当時大いに名声があり、県の長官から住民まで、敬慕しないものはなかつた。馴は渭橋の給納判官である高叔讓といとこ同士で、たいへん仲が良かった。あるとき、馴が高を訪ねて頼みごとをしたところ、高はナマスの料理を出してくれた。その晩、馴はにわかに嘔吐して下痢をおこし、死んでしまった。暑いときだったので、馴の家族の到着を待たずに、棺桶と死に装束を用意して納棺したが、いっしょに埋葬する冥器の類の奴僕や馬は、すべてそろつて不足がなかつた。冥器の童僕の背中に、一体は「鷹兒」と記し、いま一体は「鶻子」と記した。黒い毛並みの馬もあつて、「撒豆驄」と書き付けた。十数日して、柩は華陰縣の別荘に帰された。

【校記】 1

①「駟」、会校本は「駒」に作り、校記に「原作「駒」」。現

據孫本・沈本改」という。

- ②「駒」、会校本は「駒」に作り、校記に「原作「駒」」。沈本作「□」。現據孫本改」という。

- ③「之」、会校本校記に「孫本・沈本無此字」とある。

- ④「給納」、談愷本「給給」に作る。底本、「給納」に作り、注記に「納原作給。據明鈔本改」という。許本「納」字を欠く。四庫本・黄本「之給」に作る。会校本校記に「納 原作「給」。現據沈本改」とある。官職名となる「給納」が妥当である。【注】1「渭橋給納判官」参照。

- ⑤「時往求丐」、会校本は「時時往來」に作り、校記に「時往來 原作「往求丐」。現據孫本・沈本改」という。

- ⑥「夜」、会校本は「夕」に作り、校記に「原作「夜」。現據孫本・沈本改」という。

- ⑦「斂斂」、底本及び談愷本、許本・黄本・四庫本共に「斂」に作り、筆記本「斂」に作る。「斂」は音「カン」、のぞむ、あたえる意。「斂」は音「レン」、おさめる意。「斂」と「斂」とは時に混用されるが、ここでは柩におさめる意であるから、本来の「斂」に改めることとする。会校本は「殮」に作り、校記に「殮 原作「斂」。現據孫本・沈本改」という。「殮」は音「レン」、柩におさめる意。

- ⑧「冥」、会校本校記に「孫本・沈本作「盟」。下同」とある。

- ⑨「童」、会校本校記に「孫本・沈本作「僮」とある。

【注】1

○鄭馴 鄭馴の名は『太平広記』に本話以外には見えず、史書等にも見えない。

○貞元 唐・徳宗の年号。七八五〜八〇五年。『河東記』では他に02「蕭洞玄」等八話に登場する。なお、『河東記』所収作品については、以後は上記のように作品名の前に作品番号を記入する。各作品の作品番号と所在の巻数・門名については、『河東記』訳注稿(二)（『名古屋大学中国語学文学論集』第二七輯、二〇一四年）の「はじめに」参照。

○進士擢第 進士に及第する。『太平広記』巻五四・神仙五四「費冠卿」に「費冠卿、池州人也。進士擢第、將歸故鄉（費冠卿、池州の人なり。進士擢第して、將に故郷に帰らんとす）」（出典は前蜀・杜光庭『神仙感遇伝』）とあるなど、「進士擢第」は『太平広記』に散見する。史書ではとくに『旧唐書』に頻出する。

○調補 選任する。受ける側から言えば、任官ないし転任すること。『太平広記』には十例近くが見える。巻五二・神仙五二「閻丘子」に「又玄以明經上策、其後調補參軍於唐安郡（又玄明經を以て上第し、其の後參軍に唐安郡に調補せらる）」、巻二八一・夢六・鬼神下「侯生」に「上谷侯生者、家于荊門。以

明經入仕、調補宋州虞城縣（上谷の侯生なる者、荊門に家す。明経を以て入仕し、宋州虞城縣に調補せらるる）（共に出典は唐・張誼『宣室志』）。『河東記』では31「申屠澄」に「申屠澄者、貞元九年、自布衣調補漢州什邡尉（申屠澄なる者、貞元九年、布衣より漢州什邡の尉に調補せらるる）」。史書では『旧唐書』に散見する。

○門下典儀 典礼儀式を司る官。『旧唐書』卷四二・職官志によれば品階は従九品下。『太平広記』卷三二・相一「袁天綱」に「自門下典儀、超拜監察御史（門下典儀より、超えて監察御史を拝す）」（出典は唐・呂道生『定命録』）とあり、監察御史は正八品上であるから、この場合は品階を七つ超えて、名譽ある官職に就いたことになる。

○第三十五 「第」は排行。後文に「鄭三十五郎」とある。『河東記』では11「盧佩」に「盧佩第九也（盧佩第九なり）」。

○莊居 別荘。下文に「樞歸華陰別墅（樞は華陰の別墅に歸す）」とある「別墅」も同じ。別荘ではあるが、ここでは実質的には自宅に当たるのであろう。「莊居」は『太平広記』には卷三〇三・神一三「鄭仁鈞」に「素知仁鈞莊居在路傍、乃詣之（素より仁鈞の莊居の路傍に在るを知れば、乃ち之に詣る）」（出典は唐・韋絢『戎幕閑談』）とあるなど、散見する。唐詩にも白居易に「攜酒往朗之莊居同飲（酒を携へて朗之の莊居に往き同に飲む）」

（『全唐詩』卷四五九、『白氏文集』卷三六）と題する詩があるなど、数例が見られる。

○華陰縣 現在の陝西省華陰市。南に五岳の一つ、華山がある。

唐代では華州華陰郡に属する。『新唐書』卷三七・地理志一に、垂拱元年（六八五）、名を仙掌に改めたが、神龍元年（七〇五）、旧に復し、上元二年（七六一）、華陰を太陰と、華山を太山と改め、宝応元年（七六二）、旧名に復したとある。これによれば、貞元年間には華陰県。『元和郡県図志』卷二・関内道・華州に、太華山（華山のこと）は華陰県の南八里にあるとする。

本話の冒頭に、鄭順の別荘は華陰県の南五六里にあるとあるから、別荘は華山の麓に位置することになる。『河東記』に「華陰」が登場するのは本話のみであるが、10「板橋三娘子」には

「華岳廟」が、14「王錡」には「華山」が、17「韋浦」には

「華嶽神君」が見える。

○一縣之勝 県の中で最も景勝の地。「二縣」は県中。類似の表現に、『太平広記』では卷四三三・虎八「王瑤」に「漢州西四十五里、有富雙王瑤。所居水竹園林、占一川之勝境（漢州の西四十五里に、富雙王瑤なるもの有り。居る所の水竹園林、一川の勝境を占めたり）」（出典は唐・薛用弱『集異記』）。

○駟・驥・駒 会校本は孫本・沈本により、「駟」と「駒」とを入れ替える。「駟」と「駟・驥・駒」は共に良馬の意。いず

れの名も『太平広記』では本話以外には見えないが、『新唐書』卷七五上・宰相世系表五上の鄭氏の項に「驥・駒」の名と、「駒」と字形の類似する「駒」の名が見える。表の記載によれば、復州刺史であった鄭庭玉に膺夢、周（一名膺繇）、膺石（一名漢）という三人の兄弟がおり、それぞれ、膺夢の子には駉と駒が、周の子には驥と驥が、膺石の子に駒と駉がいる。つまり、本話に見える鄭氏四兄弟のうち驥・駒は従弟関係にあることになる。駒の名は見えないが、駒については膺石の子・駒の訛であるとも考えられる。ところで、会校本の校記に孫本・沈本では駒と駒とが入れ替わっているとする。これに従えば、兄弟の順は駒以外の三人については「駒・驥・駒」となり、これは「駒」を「駒」と仮定した場合、宰相世系表に見える父親世代の兄弟順に一致することになる。もとより世系表に見える「駒・驥・駒」が排行の順に一致するとは限らないが、もし本話が実在の人物に依拠したとするならば、孫本・沈本に見える異同は本来のそれであった可能性が高いであろう。ちなみに、世系表に名前が記される鄭氏兄弟六人のうち官職が記されるのは駉の「太原府參軍」のみであるが、親世代のうち膺夢は「司農主簿」、膺石は「少府丞」で、周には記載がない。

鄭駒に関してはいま一つの資料がある。『太平広記』卷一五九・定数一四・婚姻「盧生」に、盧生の賓客で「鄭某」とのみ

記される人物が登場する。この「鄭某」は不思議な運命によって、本来は弘農令李某の娘と結婚するはずであった盧生の代わりに、婚礼当夜に急遽その娘と結婚することになるのであるが、この話の出处とされる唐・李復言『続玄怪録』ではその題名を「鄭虢州駒夫人」とし、その本文も『太平広記』が「時鄭某官某」とする箇所を「時有鄭駒」とする（程毅中点校『玄怪録 続玄怪録』中華書局、二〇〇六年、一六五頁）。もとより、「盧生」に言う「鄭某」が「鄭駒」であったとしても、本話に登場する鄭駒の兄弟鄭駒がこの人物に依拠した名であるか否かは不明とする他はない。ただ、本話の後文に「時邑客李道古遊虢川半月矣」とあり、華陰の住人李道古なる人物が虢川に遊んだ帰りに、急死した鄭駒の幽鬼（李は鄭駒の急死を知らない）と一緒に潼関の西（虢州から華陰に至る道筋に当たる）付近から連れだつて華陰にもどるという話が展開する。この「虢川」は「虢州」付近の地名であると思われる（【注】2「虢川」の語釈参照）。いま推測を逞しくすれば、李道古は「盧生」に言う弘農令李某と関わりのある一族の一人であり、その一族の娘が鄭駒と結婚した関係で鄭兄弟とも知り合い、華陰県に住むようになったのではないだろうか。「鄭駒」には「駒與駒、有科名時譽」ともあり、鄭駒もまた何らかの官職を得ていると考えられるが、『続玄怪録』による題名が「鄭虢州駒夫人」であるのはまさに

そのことを示している、といった繋がりが推測される（『鄭號州駒夫人』については、李劍国『唐五代志怪傳奇叙録（増訂本）』九三〇頁参照）。ちなみに、方積六・呉冬秀編撰『唐五代五十二種筆記小説人名索引』（中華書局、一九九二年）四八一頁に「鄭駒（鄭三十四、鄭某）」として『太平広記』の「盧生」および本話、『続玄怪録』を挙げ、後文の「鄭三十四郎」も併せて同一人物と見做している。駒を馴より年上と見たのは、本話に「駒與馴、有科名時譽」とあるその順序を考慮したものか。

なお、鄭氏兄弟の名前にはいずれも「馬」字が含まれる。このように同世代の兄弟、従兄弟間で偏旁を共有する習慣については、清・顧炎武『日知録』卷二三・排行に、単名で偏旁を以て排行とする例は劉琦・劉琮（劉琦は後漢の劉表の長子、劉琮はその異母弟）に始まり、その後、応璩・応瑒、衛瓘・衛玠らの類が踵を接して出た、とある。本項の冒頭に挙げたように、『新唐書』卷七五上・宰相世系表五上によれば、鄭駒等六人の兄弟、従兄弟はいずれも名前に「馬」字を含んでおり、またその親の世代は二字名の上の一字に「膺」字を含んでいる。さらに、鄭駒の近縁の同世代には「糸」を共通の偏とする鄭纘・鄭綸・鄭絢といった名も見えている。

○科名時譽 「科名」は科挙及第による名聲。『河東記』では24「韋齊休」に「僕生前忝有科名、粗亦爲人所知（僕生前科名有

るを忝うし、粗ぼ亦た人の知る所と爲る）」。『時譽』はその時代における名譽・名聲。『太平広記』ではいま一例、卷一五五・定数一〇「郭八郎」に「時譽轉洽（時譽転た洽し）」（出典は『野史』。会校本の注に「唐闕史」のことかとする。『唐闕史』は唐・呉兢撰）。

○縣大夫 県の長官。県令。『太平広記』にはこの用例のみ。唐・元結の「漫歌八曲并序」に「作漫歌八曲與縣大夫孟士源、欲士源唱而和之（漫歌八曲を作り県大夫孟士源に与へ、士源の唱して之に和せんことを欲す）」とあり、その「故城東」に「説向縣大夫、大夫勸我耕（県大夫に説く、大夫我に耕さんことを勸む）」（『全唐詩』卷二四〇、『唐元次山文集』卷三）。柳宗元「封建論」に「是故有里胥而後有縣大夫。有縣大夫而後有諸侯。有諸侯而後有方伯連帥。有方伯連帥而後有天子（是の故に里胥有りて後に県大夫有り。県大夫有りて後に諸侯有り。諸侯有りて後に方伯連帥有り。方伯連帥有りて後に天子有り）」（『全唐文』卷五八二、『柳宗元集』卷三）。

○邑客 その村落・城里の住人。『太平広記』卷三九四・雷二「周洪」に「唐處士周洪云、寶曆中、邑客十餘人、逃暑會飲（唐處士周洪云ふ、「宝曆中、邑客十餘人、暑を逃れて会飲す」と）」（出典は唐・段成式『酉陽雜俎』）。白居易「醉後狂言酬贈蕭殷二協律」に「餘杭邑客多羈貧、其間甚者蕭與殷（余杭の邑客羈

貧多し、其の間甚だしき者は蕭と殷となり」(『全唐詩』卷四三五、『白氏文集』卷一二)。

○傾嚮 慕う。信賴する。『太平広記』卷九七・異僧一一「義福」に見える「傾向」も同義。「唐開元中、有僧義福者、上黨人也。梵行精修、相好端潔。縉紳士庶、翕然歸依。嘗從駕往東都、所歷郡縣、人皆傾向(唐開元中、僧義福なる者有り、上党の人なり。梵行精修にして、相好端潔なり。縉紳士庶、翕然として歸依す。嘗て從駕して東都に往くに、歴る所の郡県、人皆傾向す)」(出典は唐・鄭処誨『明皇雜錄』)。

○渭橋給納判官 東渭橋給納使の属官。「渭橋」は長安城の北を流れる渭水にかかる橋。東から東渭橋、中渭橋、西渭橋(便橋・咸陽橋)の三橋がある。ここに言う「渭橋」は灊水と渭水の合流点付近に位置する東渭橋。この地に官の倉庫が設けられており、河南・河北・河東・江淮等の東から運送された食糧はここに集められた後、長安に転送された。「給納」は府庫の物品出納を掌る職、給納使。唐・沈亞之に「東渭橋給納使新廳記」(『全唐文』卷七三六)と題する一文があり、また杜牧の「白從道除東渭橋巡官陶祥除福建支使劉蛻除壽州巡官等制」(『全唐文』卷七四九)等に「度支東渭橋給納使……」という肩書が見える。『太平広記』では、卷一八七・職官「使職」に「今在朝太清宮……。外任則節度、觀察……營田、給納、監牧」とあ

り、出典を「国史補」とするが、その唐・李肇『国史補』卷下に「今在朝有太清宮……。外任則節度使、觀察使……營田使、給納使、監牧使」(『唐国史補 因話録』上海古籍出版社、一九五七年、五三頁)とある。「渭橋」については、『太平広記』卷三七三・精怪六・火「楊禎」に「進士楊禎、家于渭橋。以居處繁雜、頗妨肄業。乃詣昭應縣(進士楊禎、渭橋に家す。居處の繁雜にして、頗る業を肆^{なら}ふを妨ぐるを以て、乃ち昭應県に詣る)」(出典は唐・李玫『纂異記』)とあり、この「渭橋」も東渭橋であろう。楊禎が居を移したという昭應県(現在の西安市臨潼)は東渭橋の南東に位置しており、長安から東へ華陰に向かう街道筋に当る。なお、東渭橋については、辛德勇『古代交通与地理文献研究』「唐《東渭橋記》碑読後」(中華書局、一九九六年)に詳しい。また、王文楚『古代交通地理叢考』「唐代太原至長安駁路考」(中華書局、一九九六年)の一九三頁以下参照。

○高叔讓 高叔讓の名は『太平広記』に本話以外には見えないが、『新唐書』卷七一下・宰相世系一下の高氏の条に「叔讓、殿中侍御史」とある。殿中侍御史は從七品下。高叔讓についてはこれ以外の手がかりはないが、その四代前に「敬言、吏部侍郎」とある。高敬言については『新唐書』卷五八・芸文二の刑法類に「留本司行格十八卷」とあり、その注に選者として「司

空李勣」等と並んで「吏部侍郎高敬言」と見え、さらにこの書について、「永徽三年上。至龍朔二年……復刪定」とある。李勣は五九四年生、六六九年没。永徽三年は六五二年。龍朔二年は六六二年。高叔讓が、七世紀半ばに吏部侍郎であつた高敬言の四代後であれば、おおそ八世紀後半頃の人ということになる。したがって、本話冒頭に見える年号「貞元」（七八五〜八〇五）と大きく齟齬することはない。本話の高叔讓は『新唐書』に記される高叔讓と見てよいであろう。

○中外 父の姉妹の子、及び母の兄弟姉妹の子の関係。いとこ関係。牛志平・姚兆女編著『唐人称谓』（三秦出版社、一九八七年）一四四頁参照。『太平広記』卷三三・鬼一七「蕭正人」に「琅邪太守許誠言、嘗言、幼時與中外兄弟、夜中言及鬼神（琅邪の太守許誠言、嘗て言ふ、幼時に中外の兄弟と、夜中に言ひて鬼神に及ぶ）」（出典は唐・牛肅『紀聞』）。

○求丐 乞い求める。頼みごとをする。「乞丐」、「丐求」も同様の意。『太平広記』卷一五四・定数九「吳少誠」に「吳少誠、貧賤時爲官健。逃去、至上蔡、凍餒、求丐於儕輩（吳少誠、貧賤たりし時官健爲り。逃去して、上蔡に至り、凍餒して、儕輩に求丐す）」（出典は唐・温畬『統定命録』）、同卷二六五・輕薄一「李群玉」に「李群玉字文山、性輕率、多侮戲人。常假江陵幕客書求丐於澧州刺史艾乙（李群玉、字は文山、性輕率に

して、多く人を侮戲す。常て江陵の幕客の書を仮りて澧州刺史の艾乙に求丐す）」（出典は五代十国・荆南・孫光憲『北夢瑣言』）。本話の主人公鄭馴は、科挙に及第して門下典儀の官を授かつているわけであるが、時折は高叔讓に援助を仰ぐこともあつたのであろう。後文で、李道古がすでに死者となつていた鄭馴にそうとは知らずに出会い、「十日余り会わないうちに、供揃いがなんとも豪勢だね」と驚くのは、日頃の鄭馴の生活を知っていたからと解される。

○鱠食 肉や魚を生で食べる料理。「鱠」は「膾」に同じであるが、『説文』には見えない。古くから「膾」を食したことは、『礼記』曲礼上、『詩経』小雅「六月」等に見える。『太平広記』には多数の例が登場する。卷一三三・報応三二・殺生「張縦」に「唐泉州晉江縣尉張縦者、好啖鱠、忽被病死（唐の泉州晉江県の尉張縦なる者、好みて鱠を啖らひ、忽ち病を被りて死す）」（出典は唐・戴孚『広異記』）とあるのは「食膾」を巡つて話が展開する『統玄怪録』所収の「薛偉」（『太平広記』卷四七一・水族八・人化水族）に似た話。『太平広記』卷二二〇・医三・異疾「劉録事」に「和州劉録事者……食兼數人、尤能食鱠（和州の劉録事なる者……食は數人を兼ね、尤も能く鱠を食す）」（出典は唐・段成式『酉陽雜俎』）、卷四七三・昆虫一「蟾蜍」に「晉孝武太元八年、義興人周客有一女年十八九、端麗潔

白、尤辨惠、性嗜膾（晋孝武の太元八年、義興の人周客に一女の年十八九なる有り、端麗潔白、尤も弁恵にして、性膾を嗜む）（出典は唐・寶維鑑『広古今五行記』）。「膾」については、中村喬『宋代の料理と食品』「膾」料理と「生」料理（朋友書店、二〇〇〇年）、王賽時『唐代飲食』「魚膾」（齐鲁書社、二〇〇三年）、閻艷『唐詩食品詞語語言与文化之研究』「膾」（巴蜀書社、二〇〇四年）等参照。

○霍亂 激しい嘔吐や下痢をもよおす病気。『論衡』卷三・四諱篇に「且凡人所惡、莫若腐臭。腐臭之氣、敗傷人心、故鼻聞臭、口食腐、心損口惡、霍亂嘔吐（且つ凡そ人の惡む所は、腐臭に若くは莫し。腐臭の氣は、人心を敗傷す。故に鼻臭を聞き、口腐を食すれば、心損ひ口惡しく、霍亂嘔吐す）。『太平広記』では卷一四七・定数二「張文瓘」に「張文瓘少時、曾有人相云、當爲相。然不得堂飯食喫。及在此位、每昇堂欲食、即腹脹痛霍亂、毎日唯喫一椀漿水粥（張文瓘少き時、曾て人の相る有りて云ふ、「当に相と爲るべし。然れども堂飯食喫するを得ず」と。此の位に在るに及び、堂に昇りて食はんと欲する毎に、即ち腹脹痛し霍亂して、日毎に唯だ一椀の漿水粥を喫するのみ）」（出典は唐・呂道生『定命録』）。膾を食べたことよって病死に至る例は、前項の注にあげた『太平広記』所収の「張縱」などに見える。

○棺槨 かんおけ。「槨」は棺を収める外側のかんおけ。「槨」に同じ。『太平広記』卷三二四・神二四「郭厚」に「翌日親至井上、使發之、果得骸骨。即爲具衣衾棺槨、設祭而葬之（翌日親ら井上に至り、之を發かしむるに、果して骸骨を得たり。即ち爲に衣衾棺槨を具し、祭を設けて之を葬る）」（出典は南唐・徐鉉『稽神錄』）。

○衾綖 死者を覆う衣服。「衾」は死者に着せる単衣の衣、「綖」は死者に贈る衣。潘岳「陽荊州誄」（『文選』卷五六）に「聖王嗟悼、寵贈衾綖（聖王嗟悼し、衾綖を寵贈す）」とあり、呂向注に「衾、單被。綖、衣服也（衾とは、單被なり。綖とは、衣服なり）」。「爲具棺槨衾綖斂之」は鄭駟のなきがらが手厚く納棺されたことを言う。

○冥器 死者のなきがらと共に埋葬する副葬品。死者の生前の生活に使用した器物や建物、動物、人物等を竹・木・陶器などで象つて作られる。「明器」、「盟器」、「鬼器」とも称される。『礼記』檀弓上に「夫明器鬼器也。祭器人器也（夫れ明器は鬼器なり。祭器は人器なり）」、『釈名』釈喪制第二十七に「送死之器、曰明器（死を送るの器を、明器と曰ふ）。『唐会要』卷三八「葬」に葬礼に関して品階に応じた規定が記される。門下典儀であつた鄭駟の品階は従九品下であるが、元和六年（八一二）の条に「九品已上、明器四十事（九品已上、明器

は四十事」(「事」は助数詞。「冥器」については、【参照】の「冥器と名前」参照。

○奴馬 下僕と馬。『河東記』では06「呂群」に、金を手にした呂群が行旅の品を買う場面に、「行至劔南界、計州郡所獲百千、遂於成都買奴馬服用、行李復泰矣(行きて劔南の界に至る、州郡の獲る所を計りて百千なれば、遂に成都に於いて奴馬服用を買ひ、行李復た泰し)」。また、生前使用していた「奴馬」を死後に殉死せしめるという話が、『太平広記』卷三八二・再生八「梁甲」に「北齊時、有仕人姓梁、甚豪富。將死、謂其妻子曰、吾平生所愛奴馬、使用日久、稱人意。吾死、可以爲殉(北齊の時、仕人に姓梁なるもの有り、甚だ豪富なり。將に死せんとするに、其の妻子に謂ひて曰く、「吾れ平生愛する所の奴馬、使用日に久しく、人の意に称ふ。吾死すれば、以て殉を為すべし」と)」(出典は唐・釈道世『法苑珠林』)。寒山詩に「国の大臣」の暮らしぶりを描いて、「奴馬満宅舎、金銀盈帑屋(奴馬宅舎に満ち、金銀帑屋に盈つ)」(『全唐詩』卷八〇六)と詠うのも贅沢を尽くす様。

○無不精備 すべてそろって不足がない。『太平広記』卷二九・神仙三九「劉晏」に「數日遂斃。劉公嗟嘆涕泣、送終之禮、無不精備、乃葬於路隅(數日にして遂に斃る。劉公、嗟嘆涕泣し、送終の礼、精備せざるは無く、乃ち路隅に葬る)」(出典は唐・

盧肇『逸史』)。「無不精備」は、高叔讓が自分が設けた宴席の鱸によつて鄭駟が死んだことに責任を感じ、せいっぱいの葬儀を執り行つたことを示そう。なお、唐代の各階層における葬礼については、李斌城他『隋唐五代社会生活史』(中国社会科学出版社、一九九八年)第三章、第三節「喪葬」参照。

○鷹兒・鶻子 タカとハヤブサ。『新唐書』卷三七・地理志一・華州華陰郡の土貢に「鶻、鳥鶻」が含まれる。「鶻」は小型のタカ。カタやハヤブサは華陰ではなじみの鳥であり、鷹匠に飼われて狩猟に用いられることから、従者の名としたのであろう。『新唐書』卷三・高宗紀の永徽二年(六五二)の条に「禁進犬馬鷹鶻(犬馬鷹鶻を進むを禁ず)」とあり、白居易の「代鶻答」に「鷹爪攫雞雞肋折、鶻拳蹴雁雁頭垂(鷹爪鶏を攫めば鶏肋折れ、鶻拳雁を蹴れば雁頭垂る)」(『全唐詩』卷四五五、『白氏文集』卷三二)とあるように、鷹と鶻とはしばしば併称される。

「兒」「子」は小動物につく名詞接尾辞とも解されるが、前文に「二童」とあるところから、子供の鷹と鶻の意であろう。『太平広記』には鷹・鶻共に登場するが「兒」「子」を伴う例は本話以外には見当たらない。接尾辞「兒」「子」については、志村良治『中国中世語法史研究』(三冬社、一九八四年)三七頁参照。

○撒豆驄 黒い毛並みに豆のように円く白い斑点模様の入った

馬。「撒」はまきちらす、「驄」は黒と白の毛が交じった馬。前の句に「馬有青色者」とあるのは、地の毛色が青(黒)のいわゆる「青驄」のことで、「撒豆驄」はより具体的な命名ということになる。「撒豆」については、徐成「寶金篇」に馬の相を描いて、「白縷貫睛行五百、斑如撒豆勿同看(白縷睛を貫く行は五百、斑は豆を撒くが如く同に看ること勿れ)」(陳尚君編『全唐詩統拾』卷六〇・先宋詩下、『全唐詩補編』一七四五頁)。また、良馬の名が「某某驄」と三字名で称されるのは由来が古い。『太平広記』所引の例から挙げれば、卷四三五・畜獸二・馬「漢文帝九逸」に、漢文帝の時の良馬九匹の第六に「綠螭驄」という名が見える(出典は晋・葛洪編『西京雜記』)。同様の命名は『旧唐書』卷一九九下・北狄列伝に、貞觀中、骨利幹が太宗に献じた良馬の名に「皎雪驄・凝露驄・懸光驄」と見える。いずれも馬の毛並みの特徴を捉えた命名。馬の明器については、『旧唐書』卷六七・李勣列伝に「明器惟作馬五六匹(明器は惟だ馬五六匹を作るのみ)」。

○**柩歸華陰別墅** 柩を華陰の別荘に帰して埋葬する。「別墅」は別荘。「別業」に同じ。本話の冒頭には「莊居」とある。華陰の別墅は鄭駟の実質的な故郷であったためにこの地に帰葬したか、あるいは本葬の前の^{かりもがり}殯であらう。『太平広記』卷三八七・悟前生一「劉三復」に「上表雪德裕、以朱崖靈柩、歸葬洛

中、報先恩也(上表して德裕を雪ぎ、朱崖の靈柩を以て、洛中に帰葬し、先恩に報ゆ)」とある(五代十国・荆南・孫光憲『北夢瑣言』)。なお、唐代の士人がしばしば別墅を持っていたことについては唐詩にも多くの例がある。『河東記』では24「韋齊休」に「僕數日前、因至少陵別墅、偶題一首詩(僕數日前に、少陵の別墅に至るに因りて、偶たま一首の詩を題す)」、同じく32「盧從事」に「丈人不省貞元十二年、使通兒往海陵賣一別墅、得錢一百貫(丈人省みざるや、貞元十二年、通兒をして海陵に往きて一別墅を売らしめ、錢一百貫を得たるを)」。

【原文】2

時邑客李道古、遊號^①川半月矣。未知駟之死也。回至潼關西永豐倉路、忽逢駟自北來。車僕甚盛。李曰、別來旬日、行李何盛耶。色氣忻^②然、謂李曰、多荷渭橋^③老高所致^④。即呼二童^⑤鷹兒・鶻子參李大郎。戲謂曰、明時文士、乃蓄^⑥鷹鶻耶。駟又指所乘馬曰、兼請看僕撒豆驄。李曰、僕頗有羨色如何^⑦。駟曰^⑧、但勤修令德、致之何難。乃相與並轡、至野狐泉。李欲留食。駟以馬策過曰、去家咫尺、何必食爲^⑨。有頃、到華陰岳廟^⑩。東。駟揖李曰、自此逕路歸矣。李曰、且相隨至縣。幸不廻路。駟曰、僕離家半月。還要早歸。固不肯過岳廟。

【訓読】2

時に邑客李道古、號川に遊ぶこと半月。未だ馴の死せるを知らず。回りに潼関の西の永豊倉の路に至り、忽ち馴の北より来るに逢ふ。車僕甚だ盛んなり。李曰く、「別来旬日なるに、行李何ぞ盛んなるや」と。色氣忻然として、李に謂ひて曰く、「多く渭橋の老高の致す所を荷ふ」と。即ち二童、鷹児・鶻子を呼びて李大郎に参ぜしむ。戯れに謂ひて曰く、「明時の文士、乃ち鷹鶻を蓄ふるか」と。馴又た乗る所の馬を指して曰く、「兼ねて僕の撒豆驄を看んことを請ふ」と。李曰く、「僕頗る羨む色有り、如何せん」と。馴曰く、「但だ勤めて令徳を修むれば、之を致すこと何か難からん」と。乃ち相与に轡を並べ、野狐泉に至る。李留まり食せんと欲す。馴馬策を以て過ぎて曰く、「家を去ること咫尺、何ぞ必ずしも食せんや」と。頃く有りて、華陰の岳廟の東に到る。馴李に揖して曰く、「此より逕路にて帰らん」と。李曰く、「且く相隨ひて県に至れ。幸ひに路を廻らさざらんことを」と。馴曰く、「僕家を離るること半月。還た早く帰らんことを要す」と。固く岳廟を過ぎるを肯ぜず。

【訳】 2

その頃、李道古という住人がおり、半月ほど號川に遊んでいて、馴が死んだことを知らずにいた。潼関の西の永豊倉の道にまで帰ってくると、思いがけないことに馴が北からやってくるのに出会った。お供の車馬も僕夫も非常に豪勢であった。李が、

「十日余り会わないうちに、供揃いがなんとも豪勢だね」と言うのと、馴はうれしそうな顔つきをして李に「渭橋の高叔讓殿のおかげだよ」と答えた。すぐに鷹児と鶻子という二人の童子を呼んで李道古に挨拶させた。李は冗談に「太平の世の文士は、なんとタカとハヤブサを飼うのかい」と言った。馴はまた自分の乗った馬を指差して、「ぼくのあし毛も見えてくれないか」と言った。李は、「うらやましいなあ。どうしたら手に入れることができるんだい」と言った。馴は、「善行を積むだけでいいんだよ。そうすれば難しいことなんかないよ」と答えた。そこで共に轡を並べて行くと、野狐泉に着いた。李はここに留まって食事をとろうとした。馴は馬のムチを振り上げて通り過ぎるとうこう言った。「家は目と鼻の先なのに、どうして食事する必要があるんだい。」しばらくして、華陰県の華岳廟の東に着いた。馴は李にお辞儀をすると、「ここからは近道して帰るよ」と言った。李は、「ともかく一緒に県城まで行こう。そっちの道はとらないでほしいなあ」と言った。馴は、「ぼくは半月も家を空けていたので、早く帰りたいんだよ」と言い、どうしても岳廟に立ち寄ることを承知しなかった。

【校記】 2

①「號」、談愷本は「號」字の左を「彡」に作る。談愷本のこの字、『漢語大詞典』には「號」に同じとも、「號」に同じ

ともいう(第一〇冊、一三四一頁)。会校本は談愷本に同じだが、校記はない。ちなみに、「號川」という地名は諸書に見出し難い。

②「忻」、会校本は「慚」に作り、校記に「原作「忻」」。現據孫本・沈本改」という。

③「渭橋」、会校本校記に「渭橋 沈本無此二字」とある。

④「致」、会校本は「致耳」に作り、校記に「耳 原無此字。現據孫本・沈本改」という。

⑤「童」、会校本校記に「童 孫本・沈本作「僮」とある。

⑥「蓄」、会校本は「畜」に作り、校記に「原作「蓄」」。現據孫本・沈本改」という。伝奇輯校本は会校本が「畜」に改めることについて、「蓄、蓄養、不誤」という。

⑦「僕頗有羨色如何」、会校本は「僕從頗過于美矣」に作り、校記に「原作「僕頗有羨色如何」」。現據孫本・沈本改」という。

⑧「馴曰」、会校本は「馴笑曰」に作り、校記に「笑 原作無此字。現據孫本・沈本補」という。伝奇輯校本も本文に「笑」字を補う。

⑨「爲」、会校本は「焉」に作り、校記に「原作「爲」」。現據孫本・沈本改」という。

⑩「岳廟」、会校本は「岳廟去」に作り、校記に「去 原無此

字。現據孫本・沈本補」という。

【注】2

○邑客 村里に寓居している者。ここでは華陰県の住人。『太平広記』では卷三九四・雷一「周洪」に「寶曆中、邑客十餘人、逃暑會飲(宝曆中、邑客十餘人、暑を逃れて会飲す)」(出典は唐・段成式『酉陽雜俎』)。唐詩では白居易「醉後狂言酬贈蕭殷二協律」に「餘杭邑客多羈貧、其間甚者蕭與殷(余杭の邑客羈貧多し、其の間甚だしき者は蕭と殷となり)」(『全唐詩』卷四三五、『白氏文集』卷一二)。

○李道古 李道古の名は『太平広記』では本話以外には見えないが、韓愈の「昭武校尉守左金吾衛將軍李公墓誌銘」(『全唐文』卷五六三)に「公諱道古、字某、曹成王子(公諱は道古、字は某、曹成王の子なり)」云々と同名の人物が見える。生卒年は七六八年生、八二〇年没(周祖譔主編『中国文学大辞典 唐五代卷』三三八頁)。しかし、ここに登場する李道古は唐の宗室に連なる人物であり、進士登第後に校書郎、集賢院学士に任ぜられ、刺史、觀察史等を歴任、淮西の平定に功を挙げ、左金吾衛將軍を拝するといった経歴の持ち主であり、本話の邑客李道古とは懸隔がある。ちなみに、道古の伝は『旧唐書』卷一三一、『新唐書』卷八〇に父、皐の伝に付載される。それによれば、李道古は最後は丹藥を服し吐血して死んでおり、また父の皐が

高潔な人柄であつたのに対して、「道古便佞、姦以事君、何父子之不相類也（道古便佞にして、姦以て君に事ふ、何ぞ父子の相類せざるや）」と評され、その評判は芳しいものではなかった。

○**虢川** 虢州（現在の河南省靈宝）付近を流れる川の名か地名と思われる。「虢川」という地名は『新唐書』卷一三八・李抱玉伝に「分兵守諸谷、使牙將李崇客精騎四百、自桃林虢川襲之（兵を分ちて諸谷を守らしめ、牙將李崇客の精騎四百をして、桃林・虢川より之を襲はしむ）」と見える。しかし、嚴耕望『唐代交通図考』第拾玖「漢唐褒斜驛道」（七二六頁）によれば、この「桃林虢川」は鳳翔府に属しており、現在の宝鶏の東南に位置する。本話の虢川とは別であろう。

○**潼關** 関所の名。現在の陝西省潼関県の北に位置する。黄河が南下して東に流れを変える位置に当り、洛陽から長安に入る街道上の要衝である。杜甫の「潼関吏」に「丈人視要處、窄狹容單車。艱難奮長戟、萬古用一夫（丈人要處を視よ、窄狹にして單車を容る。艱難長戟を奮えば、萬古一夫を用ふるのみ）」とあるように、狹隘な地形で知られる。『河東記』では17「韋浦」に、吏部の銓衡に赴くために上京する旅路での出来事を描いて、「韋浦者、自壽州士曹赴選、至閬郷逆旅。……乃行十數里。……次於潼關（韋浦なる者、壽州士曹より選に赴かんとして、閬郷の逆旅に至る。……乃ち行くこと十數里。……潼関に次

る）」とあり、本話と同じく東から長安を目指す順路に従つて物語が進行する。

○**永豊倉** 潼関のさらに西に当たる。『元和郡県図志』卷二・関内道・華州「永豊倉」によれば、華陰県の東北三十五里に在り、渭水が黄河に流れ込む河口に位置する。唐代、ここから長安に水路・陸路によつて米が運送された。また、天宝（七四二～七五六）中には毎年水陸で運ばれる米二五〇万石が入関したが、毎夏の大雨により、舟による運送に支障が出たため、大曆（七六六～七七九）以後は四〇万石に減じたとある。『太平広記』では卷二五九・嗤鄙二「姜師度」に「又爲陝州刺史、以永豊倉米運將、別徵三錢、計以爲費（又た陝州刺史と爲り、永豊倉の米を以て運將し、別に三錢を徴し、計りて以て費と爲す）」（出典は唐・張鷟『朝野僉載』）。

○**忽逢馴自北來** 李道古は「北」から来た鄭馴と出会うわけだが、鄭馴が東渭橋の高叔讓宅で亡くなり、その魂が華陰の南にある別荘にもどつていったとするならば、李道古と出会う時は「西」から来たことになるであろう。また、そもそも鄭馴の魂が東渭橋から華陰の別荘にもどるのに、華陰からも岳廟からも東に当たる永豊倉まで行く必要はないとも言える。「自北來」の意味するところがよく分からない。死後に何らかの理由で冥界の北方に移動した鄭馴の靈魂が、わざわざ李道古に会いに来

たということであろうか。ちなみに、「自北來」は『太平広記』

にいま一例、卷三七七・再生三「邨惠連」に見える。孝子であった惠連は、父の死後、夢の中で「上帝の命」により「司命主」

に任命されることになる。惠連は観念して、一旦現世で身辺を始末する。その夜の事、「縣吏數輩、皆聞空中有聲若風雨、

自北來、直入惠連之室。食頃、惠連卒、又聞其聲北向而去（県吏數輩、皆空中に声の風雨の若き有りて、北自り来りて、直ちに惠連の室に入るを聞く。食頃にして、惠連卒し、又た其の声の北に向きて去るを聞く）」とある（出典は唐・張讀『宣室志』）。

○車僕甚盛 供回りの豪勢な様子。「車僕」は『太平広記』卷

三〇一・神一一「仇嘉福」に「唐仇嘉福者……應舉入洛、出京、

遇一少年、狀若王者、裘馬僕從甚盛（唐の仇嘉福なる者……挙に応じて洛に入り、京に出んとするに、一少年の状は王者の若

く、裘馬僕從の甚だ盛んなるに遇ふ）」（出典は唐・戴孚『广異記』）とあるように、車馬、僕從の意。『太平広記』卷二四・

神二四「袁州父老」に、仰山の神が從者と共に訪ねてきた様子を描いて、「一日有紫衣少年、車僕甚盛、詣其家求食（一日紫衣の少年有り、車僕甚だ盛んにして、其の家に詣りて食を求む）」と同一表現が見える（出典は南唐・徐鉉『稽神録』）。

○行李 行旅の随員。「行李」については、『河東記』11「盧佩」の注参照（「『河東記』訳注稿（五）」所収、『名古屋大学

中国語学文学論集』第三二輯、五一頁）。

○色氣忻然 気持ちが顔色に表れて喜ぶ様子。「色氣」は、『芸文類聚』卷八一・藁香草部上・朮に「神仙伝に曰く」として、

「朮」を服用した結果、「顔色氣力、如二十時（顔色氣力、二十の時の如し）」とある、「顔色・氣力」に相当するであろう。

李道古に羨ましいと言われて鄭駟が顔を輝かせたのは、生前、門下典儀の職に在って儀礼を司っていたこととも関連するか。

「忻然」は心によるこぶ。『太平広記』では卷一九四・豪俠二「崑崙奴」に「一品忻然愛慕、命坐與語（一品忻然として愛慕し、坐を命じて与に語る）」（出典は唐・裴鉞『傳奇』）。

○荷 恩恵を蒙ること。『河東記』では28「崔紹」に「何以當之。但荷恩於重泉、恨無力報（何を以て之に当らん。但だ恩を重泉に荷ふのみにして、恨むらくは力の報ゆる無し）」。

○老高 「老」は一字姓の前につける尊称。ここでは高叔讓を指す。白居易「江樓夜吟元九律詩成三十韻」（『全唐詩』卷四

四〇、「白氏文集」卷一七）に「老張知定伏、短李愛應顛（老張知りて定めて伏せん、短李愛して応に顛すべし）」とある「老張」は張籍を指し、同じく「編集拙詩成一十五卷因題卷末戲贈元九李二十」（『全唐詩』卷四三九、「白氏文集」卷一六）に

「每被老元・格律、苦教短李伏歌行（毎に老元に格律を・まれ、^{ねんろう}苦に短李をして歌行に伏せしむ）」とある「老元」は元稹を

指す。白居易にとつて張籍・元稹は親しい間柄であり、「老十姓」が一般にそのような間柄の場合に使用できるとすれば、鄭馴にとつての高叔讓も同様の間柄であつたことを示そう。

○李大郎 李道古を指す。「大郎」は成人男子の呼称。『太平広記』では卷三六・神仙三六「拓跋大郎」に「拓跋大郎」と名乗る人物（実は神）が登場する（出典は唐・皇甫氏『原化記』）。

○戲謂曰、明時文士、乃蓄鷹鵠耶 鷹や鵠は武將や貴人が狩猟用に飼う猛禽類であるのに、この良き御時世では君のような文人も飼うのかい、と冗談を口にしたもの。「蓄鷹鵠」は元稹「楊

元卿涇原節度使制」（『全唐文』卷六四八）に「蓄鷹鵠之心、卑飛待擊（鷹鵠を蓄ふる心は、卑く飛びて撃たんことを待つなり）」。

○羨色 羨ましげな顔つき。『太平広記』卷一七五・幼敏「劉神童」に、六歳の劉神童が帝の御前で經書を朗唱して褒美を賜るや、「左右侍臣俱有羨色（左右の侍臣俱に羨色有り）」（出典

は唐・鄭谷『鄭谷詩集』）。唐詩にも白居易の「新樂府 蠻子朝」に、天子が蛮人に長時間熱心に対面する様子に「移時對、不可得、大臣相看有羨色（時を移して對すること、得べからず、大臣相見て羨色有り）」（『全唐詩』卷四二六、『白氏文集』卷三）。

○勤修令德 善行に勤める。「勤修」は漢訳仏典に頻出する語。後秦の仏陀耶舍・竺仏念訳『長阿含經』卷七に「佛告諸比丘、汝等當勤修善行。以修善行、則壽命延長顏色增益安隱快樂、財

寶豐饒威力具足（仏諸の比丘に告ぐ、汝等當に勤めて善行を修めよ。以て善行を修むれば、則ち壽命延長し顏色增益し安隱快樂、財寶豐饒にして威力具足すべし）」（『大正新脩大藏經』第一卷・阿含部上・四二頁上段）。『太平広記』では卷一一七・報応一六・陰德「劉弘敬」に「但二三年之期、勤修令德、冀或延之（但だ二三年の期、勤みて令德を修むれば、冀はくは或は之を延ばさん）」（出典は唐・闕名『陰德伝』）と、「令德」を修めることによつて命を延ばすことが出来ると語られている。

○野狐泉 陝西省潼關県の西にある地名。長安から洛陽に通じる街道に当たり、旅店があつた。宋・錢易『南部新書』戊に「野狐泉店在潼關之西、泉在道南店後坡下。舊傳云、野狐捨而泉涌。店人改爲冷淘。過者行旅止焉（野狐泉店は潼關の西に在り、泉は道南の店後の坡下に在り。旧伝に云ふ、「野狐捨^かきて泉涌く」と。店人改めて冷淘と為す。過者行旅焉に止まる）」。『太平広記』卷三三六・鬼二一「鄭望」に「乾元中、有鄭望者、自都入京、夜投野狐泉店宿。未至五六里而昏黑、忽於道側見人家（乾元中、鄭望なる者有り、都目り京に入り、夜野狐泉店に投じて宿せんとす。未だ五六里に至らずして昏黒なるに、忽ち道側に人家を見る）」（出典は唐・牛僧孺『玄怪録』）。

○留食 食事をする。仏教関係の文献にしばしば出る語。『大唐西域記』卷一に「龍王因請留食。龍王以天甘露飯阿羅漢、以

人間味而饌沙彌（龍王因りて食を留めんことを請ふ。龍王天の甘露を以て阿羅漢に飯し、人間の味を以て沙彌に饌す）。『太平広記』では卷一二・報応二・冤報「陳義郎」に「塗次三郷、有饗飯媼留食、再三瞻矚。食訖、將酬其直（塗に三郷に次るに、飯を饗ぐ媼有りて食を留め、再三瞻矚す。食訖り、將に其の直に酬いんとす）」（出典は唐・溫庭筠『乾驤子』）。

○以馬策過 馬に鞭をあてて通り過ぎる。「策」は馬の鞭。白居易「題盧祕書夏日新栽竹二十韻」に「愛從抽馬策、惜未截魚竿（愛しては馬策を抽くに從せ、惜しみては未だ魚竿を截らず）」（『全唐詩』卷四三八、『白氏文集』卷一五）とあるのは、竹で鞭を作ることを詠う。

○何必食爲 「爲」字、校記⑨に記したように、会校本は孫本・沈本によつて「焉」に改める。これに対して、伝奇輯校本（一三〇六頁）は「爲」を句末の助辞とし、「何」「奚」「惡」等と結びついて疑問ないし反語を表すものと解する。ここでは伝奇輯校本に従う。『太平広記』から例を挙げれば、卷一四・神仙一四「郭文」に「人無害獸之心、獸無傷人之意、何必術爲（人に獸を害するの心無く、獸に人を傷つくるの意無ければ、何ぞ必ずしも術せんや）」（出典は前蜀・杜光庭『神仙拾遺』）。句末の「為」については、太田辰夫『中国語史通考』第一部、3「中古漢語の特殊な疑問形式」参照（白帝社、一九八八年）。

○到華陰岳廟東 「岳廟」は華岳（嶽）廟。華岳祠、西岳廟とも称される。華陰県の東に位置する。華岳すなわち華山を祭る道教の聖地。『河東記』では10「板橋三娘子」に「後四年、乘入關、至華岳廟東五六里（後四年、乗りて関に入り、華岳廟の東五六里に至る）」と類似の場面が登場する。唐詩にも王建に「華嶽廟二首」（『全唐詩』卷三〇一）があるなど、散見する。なお、本話に登場する潼関、永豊倉、野狐泉店、岳廟、華陰等の地名の記述は史書等に記される地理によく合致する。嚴耕望『唐代交通図考』（上海古籍出版社、二〇〇七年）三四頁に本話を引用して、「思うに小説家の言ではあるが、しかし潼関の大道は人々の知悉するところであり、それゆえ地名の記述には間違いない」という。長安から洛陽に至る駟路については、王文楚「唐代兩京駟路考」（王氏『古代交通地理叢考』中華書局、一九九六年）に華陰県・野狐泉・永豊倉・潼関等について個別に記載があり、永豊倉の説明には本話も引用される。

○逕路 近道。『太平広記』には散見し、卷二八二・夢七・夢遊下「張生」に「晚出鄭州門、到板橋、已昏黑矣。乃下道、取陂中逕路而歸（晩に鄭州の門を出て、板橋に到るに、已に昏黒なり。乃ち道を下り、陂中の逕路を取りて歸る）」（出典は唐・李玫『纂異記』）。鄭駟が華山の麓にある別荘に帰るのに、もし岳廟を経て華陰県に立ち寄るならば長安に通ずる街道を通るこ

とはなるが、その分遠回りとなる。

○幸不廻路 「幸」は、してほしい、ねがう。「不廻路」は解しにくいが、別荘へと道をとることはしない意であろう。既刊の『太平広記』口語訳では、「正好不繞遠路」（北京燕山出版社、八三七頁）、「正好不繞道」（天津古籍出版社、第四冊六二九頁）、「還是一起走大路吧」（河北教育出版社、第四冊三三五七頁）等とある。

○固不肯過岳廟 鄭駟が頑に帰宅を急いで岳廟を通ろうとはしなかったのは、後文に記されるように、遺体を納めた柩が前夜の内に別荘に帰され、当日は県令以下の役人たちの弔問を受ける手はずになっていたためと解される。すなわち、鄭駟の魂魄のうち魄がまず別荘にもどり、翌日弔問客が訪れるのに間に合うようにと、魂の身の鄭駟は近道して家路を急いだものと解される。別にまた、すでに死者の身となった鄭駟が生人と連れ立っているところを岳廟の神に見咎められるのを恐れたため、とも解される。ちなみに、『河東記』の17「韋浦」には華嶽神君に咎められる「客鬼」が登場する（「『河東記』訳注稿（六）」所収、『名古屋大学中国語学文学論集』第三輯、二〇一九年）。

【原文】 3

須臾、李至縣。問吏曰、令與諸官何在。曰、適往縣南慰鄭三

十四郎矣。李曰、慰何事。吏曰、鄭三十五郎、今月初向渭橋亡。神柩昨夜歸莊耳。李驟然^①曰、我適與鄭偕自潼關來。一縣人吏皆曰不虛。李愕然、猶未之信。即策馬疾馳、往鄭莊。中路逢縣令〔吏〕^②崔頻、縣丞裴懸、主簿盧士瓊、縣尉莊儒、及其弟莊古、邑客韋納、郭存中、並自鄭莊回。立馬敘言、李乃大驚、良久方能言、且憂身之及禍。後往來者、往往於京城中鬧處即逢。行李僕馬、不異李之所見、而不復有言。出河東記。

【訓読】 3

須臾にして、李県に至る。吏に問ひて曰く、「令と諸官と何くに在るや」と。曰く、「適に県南に往きて鄭三十四郎を慰む」と。李曰く、「何事をか慰む」と。吏曰く、「鄭三十五郎、今月初に渭橋に向いて亡ず。神柩昨夜莊に帰るのみ」と。李驟然として曰く、「我適に鄭と偕に潼関より来れり」と。一県の人吏皆曰く「虚ならず」と。李愕然として、猶ほ未だ之を信ぜず。即ち馬に策ちて疾馳し、鄭の莊に往く。中路にて県令の崔頻、県丞の裴懸、主簿の盧士瓊、県尉の莊儒、及び其の弟の莊古、邑客の韋納・郭存中の、並びに鄭の莊より回るに逢ふ。馬を立て叙して言ふに、李乃ち大いに驚き、良久しくして方めて能く言ひ、且つ身の禍に及ばんことを憂ふ。後に往来せし者、往往にして京城中の鬧處に於いて即ち逢ふ。行李僕馬、李の見し所と異ならず、而して復た言有らず。河東記に出づ。

【訳】 3

ほどなく李は県城に着き、役人に「県令殿とお役人の方々はどちらでしょうか」と聞いた。すると、「たつたいま、県南の鄭三十四郎殿のお宅に弔問に行かれたところですよ」とのこと。李が「どなたを弔問されたのですか」と言うと、役人は「鄭三十四郎殿が、今月はじめに渭橋で亡くなれました。棺が昨夜別荘に戻ったところなのです」と言う。李は大笑いして、「私はさきほど鄭さんと一緒に潼関からやってきたばかりです」と言った。県城の役人はみな「嘘ではありません」と言う。李は愕然として、それでもまだ信じる事ができなかった。すぐに馬に鞭打って鄭駟の別荘に急いだ。途中で、県令の崔頻、県丞の裴懸、主簿の盧士瓊、県尉の莊儒、それにその弟の莊古、県の住人、韋納と郭存中とが連れだって鄭駟の別荘から戻ってくるのに出会った。馬を止めて事の次第を話すと、李はたいそう驚き、しばらくしてようやく口をきくことが出来たが、今度は禍が自分に降りかかりはしないかと心配した。こののち、往来するものはしばしば都の繁華な通りで鄭駟に出合った。荷物や僕夫や馬は李が目にしたのと同じであったが、二度と言葉を交わすことはなかった。『河東記』に出る。

【校記】 3

①「輓然」、黄本・四庫本「輓然」に作る。「輓」は音テン、

「輓」は音シン。意味は共に笑うさま。

②「縣令〔吏〕」、底本は「縣吏」であるが、許本・会校本は「縣令」に作る。会校本校記に「令 原作『吏』。現據沈本改」という。伝奇輯校本も「縣令」に作る。「縣令」が優る。「令」に改める。【注】 3 「縣令〔吏〕崔頻」参照。

【注】 3

○慰 死者を弔って遺族を慰める。弔意を表す。『河東記』では、24「韋齊休」に「又數日、亭午間、呼曰、裴二十一郎來慰。可具食。我自迎去（又た數日にして、亭午の間に、呼びて曰く、「裴二十一郎來慰せん。食を具ふべし。我は自ら迎去せん」と。）

○鄭三十四郎 鄭駟（三十五郎）より排行が一つ上の兄ないし従兄弟。『唐五代五十二種筆記小説人名索引』は鄭駟と見做す。

【注】 1「駟・驥・駒」参照。李斌城他『隋唐五代社会生活史』五五一頁によれば、排行の後に「郎」を加えるのは、排行を同じくする同輩の親族ないし同僚や目下の者に対する呼称。

○神柩 ひつぎを鄭重に言う語。唐・道宣『続高僧伝』卷一九・釈智周伝に「弟子法度等、奉迎神柩歸于本山（弟子法度等、神柩を奉迎して本山に歸す）」（『大正新脩大藏經』卷五〇・史伝部二、五八〇頁中段。『太平広記』では、卷二八〇・夢五・鬼神上「楊昭成」に「段氏舉家悲泣、遂令人往取神柩、葬之（段氏家を挙げて悲泣し、遂に人をして往きて神柩を取り、之を葬

らしむ」(出典は唐・裴約言『靈異記(靈異志)』。明鈔本は「靈怪集」とする。『靈怪集』であれば、唐・張薦撰)。

○輾然 大笑いするさま。西晋・左思「吳都賦」(『文選』卷五)の冒頭に「東吳王孫、輾然而哈(東吳の王孫、輾然として哈^わふ)」、六臣注李周翰の注に「輾、大笑也(輾とは、大いに笑ふなり)」。

『太平広記』では卷二九七・神七「兗州人」に「開棺、妻忽起即坐、輾然笑曰……(棺を開くに、妻忽ち起ち即ち坐し、輾然として笑ひて曰く……)」(出典は唐・唐臨『冥報記(冥報録)』)。

○人吏 人々と下級の役人。人々。『太平広記』卷三二・神仙二二「僕僕先生」に「先生乘雲而度、人吏數萬皆觀之(先生雲に乗りて度り、人吏數萬皆之を睹る)」(出典は唐・陳翰『異聞集』及び唐・戴孚『広異記』)、『太平広記』卷三〇五・神一五「李伯禽」に「人吏驚愕、莫知其由(人吏驚愕して、其の由を知る莫し)」(出典は唐・陳邵『通幽記』)。前者は現世の者が仙人の姿を目の当たりにする場合、後者は現世の者には冥界からの使者が見えなかったという場面で、「人吏」は凡俗の人々を代表する。

○縣令「吏」崔頻 【校記】3—②に記したように「縣令」は底本「縣吏」であるが、許本等により「縣令」に改める。「縣吏」であれば県の役人の意であるが、崔頻以下の人物の肩書きに「縣丞・主簿・縣尉」とあるのは、この順に県令に次ぐ第二、

第三、第四位の官職であるから、最初に置かれる崔頻は「縣令」であるのがふさわしい。この前文に、李道古が県の役人に「令」と諸官と何くに在るや」と尋ねているのはそのことを裏付ける。なお、「崔頻」の名は『太平広記』や史書等に見えない。

○縣丞裴懸 「縣丞」は県令に次ぐ官。裴懸の名は、『太平広記』や史書等に見えない。

○主簿盧士瓊 「主簿」は県丞に次ぐ官。盧士瓊については、『新唐書』卷七三上・宰相世系三上の盧氏の項に「士瓊、字德卿、河南府司錄參軍」とあるのを見出すことができるが、「主簿」についてはもとより記すところがない。ところが、唐・李翱(七七四〜八三六)の「故河南府司錄參軍盧君墓誌銘」に「君諱士瓊、字德卿、范陽人。家世爲甲姓。祠部郎中融之長子。明經及第、歷寧陵華陰二縣主簿、知泗州(君諱は士瓊、字は德卿、范陽の人。家は世々甲姓爲り。祠部郎中融の長子なり。明經に及第し、寧陵・華陰二県の主簿を歴て、泗州に知たり)」(『全唐文』卷六三九、『李文公集』卷一五)とあり、ここに盧士瓊が若い頃、明經及第後の官として寧陵・華陰二県の主簿を歴任したことが記される(「寧陵」は現在の河南省商丘市寧陵県)。「墓誌銘」の標題に「南府司錄參軍」とある官職についても、本文に「府罷歲餘、除河南府戸曹、以疾免。河南尹重其能、奏爲司錄參軍(府罷むること歳余、河南府戸曹に除せらるるも、

疾を以て免^{ゆる}さる。河南尹其の能を重んじ、奏して司録參軍と為す」とある。盧士瓊の没年については「八月癸酉、發疾而卒。年六十九（八月癸酉、疾を發して卒す。年六十九）」とあるのみであるが、これに続いて「君少好著文、精曉吏事。少遊故丞相楊炎張延賞之門。楊美其文詞、張每嘆其吏材過人（君少くして文を著すを好み、吏事に精曉す。少くして故丞相楊炎・張延賞の門に遊ぶ。楊は其の文詞を美し、張は毎に其の吏材の人に過ぐるを嘆ず）」とあり、若い頃に楊炎・張延賞の知遇を得たことが記される。楊炎は七二七年生、七八一年没、張延賞は七二六年生、七八七年没。かりに盧が楊炎の晩年に十代の終わり頃であったとすれば、六十九で亡くなったのは八三〇年前後となり、李翱の没年とも矛盾しない。さらに言えば、同じく宰相世系表に士瓊の弟として「士玫、太子賓客」とある（「士玫」は「士玫」の誤り。周祖譚主編『中国文学大辞典 唐五代卷』一一一頁参照）。盧士玫は『旧唐書』卷一六二、『新唐書』卷一四七に伝があり、また白居易に「京兆尹盧士玫除檢校左散騎常侍兼中丞瀛漠二州觀察等使制」（『全唐文』六五七、『白氏文集』卷五二）、「除盧士玫劉從周等官制」（『全唐文』六六一、『白氏文集』卷五五）がある。これらによれば、士玫は中央、地方官を歴任して、晩年は太子賓客、虢州刺史に任じられ、宝曆元年（八二五）に没した人物である。盧氏兄弟は当時の官

界に知られた人物であったと言えよう。以上のように本話の「主簿盧士瓊」は実在の人物によることが確認できる。そうであれば、「縣吏崔頻」「縣丞裴懸」や後文の「縣尉莊儒」「莊古・韋納・郭存中」などについても同様に実在の人物によった可能性がある。ちなみに、『河東記』所収の作中人物で、その官職が史書には記されず、李翱の文中の記載によって確認される例には、16「韓弁」がある。その本文中に「掌書記韓弁」とある「掌書記」は、李翱「故朔方節度掌書記、殿中侍御史、昌黎韓君夫人、京兆韋氏墓誌銘」（『全唐文』卷六三九、『李文公集』卷一五）に「進士及第、朔方節度請掌書記……（進士及第するや、朔方節度掌書記に請ひ……）」とあり、この場合も科擧及第後に「掌書記」の任に就いていたことが知られる（『河東記』訳注稿（五））所収「韓弁」参照。『名古屋大学中国語学文学論集』第三二輯、二〇一八年、五九頁）。

○縣尉莊儒 「縣尉」は主簿に次ぐ官。「莊儒」の名は、『太平広記』や史書に見えない。

○莊古・韋納・郭存中 この三人の名は、『太平広記』や史書に見えない。

○立馬 馬をとどめる。「駐馬」に同じ。白居易の詩「新豐路逢故人（新豐の路にて故人に逢ふ）」（『全唐詩』卷四三三、『白氏文集』卷九）に「相逢立馬語、盡日此橋頭（相逢ひて馬を立

てて語る、尽日此の橋の頭はしら」。

○良久方能言　しばらくして、やっと口がきけるようになった。生き返ったり驚愕したりした後の様子。『太平広記』では卷一五二・定数七「鄭德璘」に「良久、女蘇息、及曉、方能言（良や久しうして、女蘇りて息し、曉に及びて、方めて能く言ふ）」（出典は唐・裴鉞『伝奇』）。

○京城　国都。『河東記』では11「盧佩」に「長須在京城中作生人妻、無自居也（長に須らく京城中に在りて生人の妻と作るべくして、自らの居無し）」。

○鬧處　人の密集しているところ。繁華街。「鬧」の意味については、王鐔『唐宋筆記語辭淮釈（修訂本）』（中華書局、一九九〇年）一二九頁に「鬧は攢聚・密集の意で、動詞あるいは形容詞になることができる。『喧鬧』（さわがしい）の意味ではない」とある。同氏『詩詞曲語辭例釈（増訂本）』（中華書局、一九八六年）一六九頁「鬧」も同様。白居易「詠懷寄皇甫朗之」に「學調氣後衰中健、不用心來鬧處間（氣を調するを学びて後衰中に健あり、心を用ひざる　来鬧處も閒なり）」（『全唐詩』卷四三七、『白氏文集』卷三四）。

【参考】

○明器と名前

本話には、鄭馴の葬儀に用意された副葬品として鷹・鶻及び馬の明器（冥器・盟器も同じ。以下、引用文以外では「明器」と表記する）が登場する。それぞれの明器の背中には「鷹兒」、鶻子、撒豆驄」という名前が記されており、この明器が物語の中ほどにおいて、「鷹兒」と「鶻子」は二人の童僕となつて初対面の李道古とあいさつを交わし、「撒豆驄」は鄭馴自慢の名馬となつて誇らしげに紹介されるという展開に繋がっている。『太平広記』には様々な明器が登場するが、それが人物の明器である場合は時に具体的な名前が記されて生人と関係を持ち、物語の展開に重要な役割を果たす。明器の背中に名前が書き記される例は本話以外にも見出すことができる。今そのうちの幾つかを挙げよう。

卷三六六・妖怪八「張氏子」（出典は五代十国・荆南・孫光憲『北夢瑣言』）は百字に満たぬ短編である。唐の文徳（八八八）中、張という役人が蘇台に住んでいたが、ある美人が何度も家を尋ねてくるようになった。たまたま開元觀の道士・吳守元に出会ふと、道士は張に不祥の気があると言って符を一枚授けてくれた。それを持ち帰ると、はたして空き部屋の柱のくぼみから、背中に「紅英」と書き記した婢の明器（「一盟器婢子、背書紅英字」）が見つかった。これを燃やすと、妖異は消え去った。明器の背に記された「紅英」を、既刊の『太平広記』の

主要な訳注（陸昕等訳『白話太平広記』九一四頁、北京燕山出版社、高光等訳『文白対照全訳太平広記』一〇三三頁、天津古籍出版社、丁玉琤等訳『白話太平広記』三六三三頁、河北教育出版社）は共に「赤い色で書かれた『英』の字」と訳しているが、婢の名としては「紅英」二字が記されていたと解釈すべきであろう。以下に挙げる例でも、明器の背に記される婢の名前は「春條」「金釭」「輕素」「輕紅」「穠華」などの二字であり、しかも婢にふさわしく二字中に「金・素・紅・華」などの華やかな色彩に関わる一字が含まれる。「紅」は婢の名にふさわしい。

卷三七二・精怪五・凶器下「張不疑」（底本は「出処を闕く」とし、明鈔本に次の「又一説」と共に「出博異記」とする。『博異記』はすなわち唐・鄭還古撰『博異志』）は以下のような話である。南陽の張不疑は開成四年（八三九）、宏詞科に合格して秘書監を授かるが、知り合いもない寂しさに、周旋屋を通じて浙西の胡司馬という人物から「青衣」を買いもとめることにした。胡の家に行くと、「春條」という名の青衣を紹介され、気に入って六万錢で買い入れた。美しい春条は音旨清婉、よく人の意を酌み、学を好んで詩に優れていた。二カ月余りして、不疑が信奉する道教の師と面会したところ、師に「君には邪氣が溢れているぞ」と指摘され、「近頃婢を二人いれました」と

言う、「それが禍している」とのこと。翌日、師は不疑のもとを訪れると春条を呼び出したが、春条は出てこようとしなかった。そこで師が香を焚き、術を施して口に含んだ水を吹きかけると春条は身が縮み、再度吹きかけると一尺ばかりになって体が硬直し、どさりと倒れてしまった。見ればそれは朽ちた明器で、背中に「春條」と記してあった（「一朽盟器、背上題曰春條」）。師はなおも春条の腰のあたりに妖氣を感じ、不疑に刀で斬らせるとそこから血が流れ出た。そこでこれを燃やしたが、不疑は師から「もしも春条の血が体中に巡っていたら君の一家は皆死んでいたところだ」と言われてすっかり気が塞ぎ、「明器と同じ居していながら気が付かなかったとは」と心も虚ろとなって故郷に帰った。明年、江西に辟されたが、翌年八月に亡くなり、その翌日に母親も亡くなった。

「張不疑」では、明器の妖異がこれに関わった当人のみならず家族にも禍を及ぼしている。『太平広記』ではこの話に続いて「又一説」があり、右とは人物名を異にしつつほぼ同様の筋書きを持つ話を収録する。すなわち、張不疑は道士の戒めにもかかわらず、周旋屋が連れてきた「金釭」という名の、賢くて気のきく婢を十五万で買い入れ、寵愛する。道士にこれを見咎められ、金釭は杖で叩かれるや木を撃つような音がして倒れてしまった。見ればなんと女の明器で、背中には名前が書き記し

てあつた（「乃一盟器女子也。背書其名」）。不疑がほどなくして病没するや、母親の盧氏も十日余りして亡くなった。「又一説」においても、明器の背に名前が書き記されていることが明記される。

「張不疑」と同じく「精怪・凶器」に分類される「曹恵」（卷三七一・精怪四・凶器上、出典は唐・牛僧孺『玄怪録』）は次のような話。武徳（六一八～六二六）の始め、曹恵は江州の参軍となつた。官舎の仏堂に一尺ばかりの木偶人が二体あつた。色は剥げていたが彫りは精巧だったので、曹恵は持ち帰つて子供に与えた。子供が餅を食べていると、木偶が手を出して欲しがつたので、びつくりして父親に知らせた。恵が笑つて、「木偶を取つてきなさい」と言うと、木偶がすぐに「輕紅と輕素には名前がありますのに、どうして木偶などと呼ぶのですか」（「輕紅輕素自有名、何呼木偶。」底本は「輕紅」二字を欠くが、会校本に従つて補う。）と言つて近づいてくる様子は人と変わりがなかつた。恵が素性を尋ねると、自分たちはもと宣城太守であつた謝家の俑（人形）で、沈隱侯（沈約）が太守様が亡くなられたのを悲しんで贈られたのです。墓の中で暮らしている時、賊が墓を荒らして私たちを見つけると、「これはいい。子供のおもちゃにしよう」（「二明器不惡。可與小兒爲戲具」）と言つて持ち出したのです、と言う。二人はさらに、これまでの長い

年月、冥界において持ち主を転々として今に至つたという数奇な運命について語る。結局曹恵は、いま廬山の山神が輕素を舞姫に欲しいと言っているという二人の言葉を受け入れ、工人に二体の明器の色を塗り直させ、錦の刺繍を施したうえで手放したので、二人は廬山の山神の妾となつた。最後はいささか明器本来の役割を逸脱しているとも思えるが、生人に禍をもたらすことのない明器と言えよう。

「曹恵」に登場する輕素と輕紅には背中に名前が書いてあるという直接の記載はないけれども、固有名ではない「木偶」という呼び方に異議を唱えて「自ら名有り」と述べているのであるから、埋葬時には名前が記されていたものと想像される。卷三三五・鬼二〇「浚儀王氏」（出典は唐・戴孚『広異記』）では「穠華」という名の婢（「有一婢名穠華」）が登場し、母の葬儀の際に酔つて墓穴に落下し、間違つて閉じ込められてしまった王氏の鼻先で紙燭を焼いて火傷をおわせる。王氏は数日後に墓穴から出されて息を吹き返すのであるが、見れば召使いはみな明器であつた（「奴婢皆是明器」）。ここでも、背中に名前が書かれているとはされてはいないが、「穠華」という名前が記されることで、あたかもその明器が命を吹き込まれ、動き出す力を得たかのようなのである。

明器が婢ではない場合、名前が額に記される例もある。卷三

七二・精怪五・凶器下「蔡四」（出典は唐・戴孚『廣異記』）は次のような話である。潁陽の蔡四は天宝の始めに陳留の浚儀に家を持った。榻に坐して詩を吟じていると鬼がやってきて腰かけ、自分は王といい、あなたの才徳を慕ってやってきたのだという。蔡は初めは驚いたが徐々に親しくなつて、互いに「王大」、「蔡四」（「四」は底本「氏」に作るが、会校本に従つて改める）と呼び合う仲となつた。その後、蔡は「人神道殊」（人と神とは道が異なる）ことを理由に王大のために別に住まいを用意したり、王大が娘を嫁がせるのに便宜をはかったりするのであるが、ある時、夜に王大が設けた齋場を翌日の昼に訪ねると墓場であることが分かる。墓場には明器が数十もあり、そのうち最大のものの額に「王」の字が記されていた（「中有盟器數十、當壙者最大、額上作王字」）。蔡がこれを燃やしたところ、鬼は二度とやってこなかった。額に「王」字が記される例を挙げれば、『太平広記』卷三〇・器玩二「王度」に「有一大蛇……額上有王字（一大蛇有り……額上に王字有り）」とある（出典は唐・陳翰『異聞集』）。後世、閻羅王の額に「王」字が記される絵画や彫像があるのも連想される。いずれにせよ、婢には似つかわしくないようである。

名前を記される明器については以上のようにであるが、右に挙げた話のうち、紅英や春条・金釭らは生人に禍をなすものであ

つた。この点で、「鄭馴」において、鬼と同道したことを知つた李道古が「身の禍に及ばんことを憂」いたのはもつともなことであつた。ところが、実際には後日の李道古の身に禍がふりかかることはなく、高叔讓が用意してくれた葬儀一式に満足した鄭馴はその後変わらぬ姿で往来を行き来している。そもそも、死者となつた鄭馴とそれを知らない李道古が出会う場面では、鷹児と鶻子は生人である李道古と礼儀正しく初対面の挨拶を交わしており、鄭馴も李に自分の乗るあし毛を指さして、「ぼくの撒豆驄を見てくれないか」と上機嫌である。しかも、李が鄭の供揃えを羨んで、李のような境遇を得るための方法を尋ねると、「令徳を修めるだけでいいんだよ」ときわめて満足気である。このように明器が必ずしも人に災禍をもたらすものではないことについては、右に挙げた例について言えば「曹惠」の輕紅と輕素がこれに近いであろう。輕紅と輕素は、墓泥棒が明器だと知つてなお「子供のおもちゃにちようどよい」と見做すほどに邪気がなく、しかも何代にもわたつてあの世で愛玩された。本来、死者がああの世においてもこの世同様に安樂に暮らせることを願つて陪葬されるのが明器であるならば、「鄭馴」の中の明器はこの本来の性質がよく反映されたものと言えよう。

（澤崎 久和）

第二十四話 韋齊休(卷三百四十八·鬼三十三)

【全文】

韋齊休。擢進士第。累官至員外郎。爲王璠浙西團練副使。太和八年。卒于潤州之官舍。三更後。將小斂。忽於西壁下大聲曰。傳語娘子。且止哭。當有處分。其妻大驚。仆地不蘇。齊休于衾下厲聲曰。娘子今爲鬼妻。聞鬼語。忽驚悸耶。妻卽起曰。非爲畏悸。但不合與君遽隔幽明。孤惶無所依怙。不意神識有知。忽通言語。不覺惛絕。誠俟明教。豈敢有違。齊休曰。死生之期。涉於眞宰。夫婦之道。重在人倫。某與娘子。情義至深。他生亦未相捨。今某屍骸且在。足寬襟抱。家事大小。且須商量。不可空爲兒女悲泣。使某幽冥間更憂妻孥也。夜來諸事。並自勞心。總無失脫。可助僕喜。妻曰。何也。齊休曰。昨日湖州庾七寄買口錢。蒼遑之際。不免專心部署。今則一文不欠。亦足爲慰。良久語絕。卽各營喪事。纔曙。復聞呼。適到張清家。近造得三間草堂。前屋舍自足。不煩勞他人。更借下處矣。其夕。張清似夢中。忽見齊休曰。我昨日已死。先令買塋三畝地。可速支關布置。一一分明。張清悉依其命。及將歸。自擇發日。呼喚一如常時。婢僕將有私竊。無不發摘。隨事捶撻。及至京。便之塋所。張清準擬皆畢。十數日。向三更。忽呼其下曰。速起。報堂前。蕭三

郎來相看。可隨事具食。款待如法。妨他忙也。二人語。歷歷可聽。蕭三郎者。卽職方郎中蕭徹。是日卒於興化里。其夕遂來。俄聞蕭呼嘆曰。死生之理。僕不敢恨。但可異者。僕數日前。因至少陵別墅。偶題一首詩。今思之。乃是生作鬼詩。因吟曰。新構茅齋野澗東。松楸交影足悲風。人間歲月如流水。何事頻行此路中。齊休亦悲咤曰。足下此詩。蓋是自識。僕生前忝有科名。粗亦爲人所知。死未數日。便有一無名小鬼贈一篇。殊爲著鈍。然雖細思之。已是落他蕪境。乃詠曰。澗水濺濺流不絕。芳草綿綿野花發。自去自來人不知。黃昏惟有青山月。蕭亦歎羨之曰。韋四公死已多時。猶不甘此事。僕乃適來人也。遽爲遊岱之魂。何以堪處。卽聞相別而去。又數日。亭午間。呼曰。裴二十一郎來慰。可具食。我自迎去。其日。裴氏昆季果來。至啓夏門外。瘁然神聳。又素聞其事。遂不敢行弔而回。裴卽長安縣令。名觀。齊休之妻兄也。其部曲子弟。動卽罪責。不堪其懼。及今未已。不知竟如之何。 出河東記

【原文】1

韋齊休、擢進士^①第、累官至員外郎、爲王璠浙西團練副使。太和^②八年、卒于潤州之官舍。三更後、將小斂、忽於西壁下大聲曰、傳語娘子、且止哭。當有處分。其妻大驚、仆地不蘇。齊休于衾下厲聲曰、娘子今爲鬼妻、聞鬼語、忽^③驚悸耶。妻卽起

曰、非爲畏悸。但不合④與君遽隔幽明⑤、孤惶⑥無所依怙。不意神識有知、忽通言語、不覺惛絕。誠俟明教、豈敢有違。齊休曰、死生之期、涉於眞宰、夫婦之道、重在人倫。某與娘子、情義至深、他生亦未相捨。今某屍骸且在、足寬襟抱。家事大小、且須商量、不可空爲兒女悲泣、使某幽冥間更憂妻孥也。夜來諸事、並自勞心。總無失脫、可助僕喜。妻曰、何也。齊休曰、昨日湖州庾七寄買口錢、蒼⑦遑之際、不免專心部署。今則一文不欠、亦足爲慰。良久語絕、卽各營喪事。

【訓読】 1

韋齊休は進士の第に擢^ぬんでられ、官を累^{かさ}ねて員外郎に至り、王璠^{はん}の浙西団練副使と爲る。太和八年、潤州の官舎に卒す。三更の後、將に小斂^{せうれん}せんとするに、忽ち西壁の下に於いて大声ありて曰く、「娘子に伝語す、且く哭するを止めよ。当に処分有るべし」と。其の妻大いに驚き、地に仆れて蘇へらず。齊休は衾下に于いて声を厲^{はげ}しくして曰く、「娘子今は鬼妻と爲るに、鬼語を聞きて忽ち驚悸するや」と。妻卽ち起ちて曰く、「畏悸するを爲すに非ず。但だ合に君と遽かに幽明を隔つべからざれば、孤惶にして依怙する所無し。意はざりき、神識に知有りて忽ち言語を通ぜんとは、覺えず惛絶す。誠に明教を俟^まちて、豈に敢へて違ふこと有らんや」と。齊休曰く、「死生の期は眞宰に涉り、夫婦の道は人倫に在るを重んず。某は娘子と情義至つて深けれ

ば、他生も亦た未だ相捨てず。今、某が屍骸は且く在れば、襟抱を寛^{くつろ}ぐるに足る。家事の大小は、且に須らく商量すべく、空しく兒女のごとく悲泣するを爲して、某をして幽冥の間に更に妻孥を憂へしむるべからざるなり。夜來の諸事は、並びに自ら心を勞さん。総て失脱無くんば、僕の喜びを助^ますべし」と。妻曰く、「何ぞや」と。齊休曰く、「昨日、湖州の庾七買口の錢を寄す。蒼遑の際、部署に専心するを免れず。今則し一文も欠けざれば、亦た慰めと爲すに足れり」と。良や久しうして語絶ゆ。卽ち各おの喪事を営む。

【訳】 1

韋齊休は進士科に及第し、幾つもの官職を歴任して員外郎に昇った。王璠の下で浙西団練副使となり、太和八年に潤州の官舎で亡くなった。真夜中を過ぎて、小斂（死者の衣服を着替えさせる儀式）に取りかかろうとしたとき、不意に西の壁の下に大声が響いて言った、「我が奥方に伝える。ひとまず哭泣するのを止めよ。申しつけておくべきことがある」と。妻は大いに驚き、地に倒れて人事不省となった。齊休は帷子の下で厳しい口調で言った、「奥よ、今は幽鬼の妻となったのに、幽鬼の言葉を聞いて驚きおののくのか」と。妻はすぐに立ち上がって言った、「恐れおののいている訳ではありません。貴方とはこんなに急に幽明二つの世界にお別れする筈ではなかったのに、独り不安

で頼るところもない身となつてしまいました。靈魂にも知覚が
 おありで、言葉をかけられようとは考えもせず、思わず氣を失
 つてしまいました。お指図を承りましたなら、どうして違える
 ことがございましたか」と。すると齊休は言つた、「人の死生の
 定めは、天の主宰に関わることからであり、夫婦の道は、道徳
 を守ることを重んじる。私はそなたと情愛至つて深いものがあ
 ったゆえ、来世においても見捨てるようなことはせぬ。今、私
 の遺骸はしばらくここに在るゆえ、胸襟を開いて語るに足りよ
 う。家の大小諸事については、何につけ相談するがよい。徒ら
 に女子供のように泣き悲しんで、私に冥土で妻子の心配をさせ
 るでないぞ。昨夜からの諸事については、すべて私自ら心を砕
 くことにしよう。万事に遺漏が無ければ、我が喜びも一入じや」と。
 妻が「何のことでございましょうか」と尋ねると、齊休は
 「昨日、湖州の庾七が奴隷売買の代金を届けてくれたのだが、
 慌たしいなかで処理に専念せざるを得なかった。今もし一文
 も欠けるところが無ければ、安心できるのだが」と言い、時間
 が経つと静かになった。そこで各々葬儀をとりおこなつた。

【校記】 1

- ① 「擢進士」、会校本校記に「沈本作「進士擢」とある。
- ② 「太和」、黄本・四庫本は、「大和」に作る。会校本・伝奇輯校本には言及なし。

- ③ 「忽」、会校本は「有何」に作り、校記に「原作「忽」。現據沈本改」という。伝奇輯校本は「忽」に作り、校記なし。
- ④ 「合」、会校本校記に「沈本作「忿」とある。伝奇輯校本は「不分」に作り、校記に「原作「不合」、據南宋盧憲『嘉定鎮江志』卷二引『河東記』改。不分、不料。明鈔本作「忿」。不忿、心中不平」という。判断に迷うところであるが、一先ず底本に従つておく。

- ⑤ 「明」、会校本校記に「沈本作「冥」とある。
- ⑥ 「惶」、会校本校記に「孫本作「懷」とある。
- ⑦ 「蒼」、会校本は「倉」に作り、校記に「原作「蒼」。現據孫本・沈本改」という。伝奇輯校本は「蒼遑」に作り、校記の按語に「按、蒼惶、倉惶義同。杜甫『破船』「蒼惶避亂兵、緬邈懷舊丘」という。（なお伝奇輯校本は、当該箇所の原文は「蒼遑」に作りながら、校記「六」では「蒼惶」の見出しとなつており、按語もこれに準ずる。）

【注】 1

○韋齊休 『唐五代人物伝記資料総合索引』は、『登科記考』『嘉定鎮江志』の二資料を挙げるが、『登科記考』は卷二七・附考・進士科に、本話に基づいて進士科合格者として名を記すのみ。『嘉定鎮江志』卷一五・参佐および卷二二・紀異の記事は、本話の節録。『唐五代五十二種筆記小説人名索引』も、『太平広

記』の本話を挙げるのみ。ただ、宋・晁公武『郡齋讀書志』巻七・偽史類に「雲南行紀二巻」の書名を載せ、「右唐韋齊休撰。齊休長慶三年從韋審規使雲南、紀其往來道里及其見聞（右は唐の韋齊休の撰。齊休は長慶三年に韋審規に従ひて雲南に使い、其の往來の道里及び其の見聞を紀す）」として序文の一節を引く。これによれば韋齊休は長慶三年（八二三）に雲南に赴き、その見聞を二巻の書に纏めたようである。『雲南行紀』は散佚して伝わらず、『太平御覽』巻九一九・羽族部・鷺および巻九七四・果部一一・甘蔗に、僅かながら節録が残る。

韋審規については独立した伝はないが、『新唐書』卷二二二・中・南蠻中・南詔下に「長慶三年……穆宗使京兆少尹韋審規持節臨冊（長慶三年……穆宗京兆の少尹韋審規をして節を持して冊に臨ましむ）」とあり、『郡齋讀書志』の記事と重なる。また同卷七四・宰相世系四に「審規、壽州刺史」と名が載る。他に元稹に「贈韋審規等父制」（『全唐文』卷六四七、『元氏長慶集』卷五〇）、「授韋審規等左司戸部郎中等制」（『全唐文』卷六四八、『元氏長慶集』補遺卷四）、白居易に「韋審規可西川節度副使御史中丞李虞仲崔戎姚向溫會等並西川判官皆賜緋紫各檢校省官兼御史制（韋審規に西川節度副使・御史中丞たるを可とし、李虞仲・崔戎・姚向・溫会等を並に西川判官とし、皆緋紫を賜ひ、各おの省官に檢校し、御史を兼ねしむる制）」（『全唐文』卷六

六一、『白氏文集』卷四八）がある。韋齊休とは、同姓による何らかの繋がりがあったのであろうか。

○擢進士第 「擢第」は科挙の試験に合格する。「進士」は科挙の科目名。詩文が課せられ、合格者は出世が早かったため、最難関であつた。「進士」の語は『河東記』の作品中にも頻見され、18「鄭駟」には「鄭駟、貞元中進士擢第、調補門下典儀（鄭駟、貞元中進士に擢第し、門下の典儀に調補せらる）」とある。

○累官 幾つもの官職をかさねる。功績を積んで次第に昇進する。常用の語で、『河東記』では27「許琛」にも、「潜與武相素善、累官皆武相所拔用（潜は武相と素と善く、官を累ぬること皆な武相の拔用する所なり）」。

○員外郎 尚書省の各部局の次官。官位は従六品上。尚書省は六部（中央行政官庁）を統括し、政務を執行する。本来は定員外の役職からの命名で、後に定員化した。

○王璠 『旧唐書』卷二六九、『新唐書』卷二七九に伝が見える。『旧唐書』王璠伝には「（大和）六年八月、檢校禮部尚書、潤州刺史、浙西觀察使。八年、李訓得幸、累薦於上。召還、復拜右丞（大和六年八月、檢校礼部尚書、潤州刺史、浙西觀察使たり。八年、李訓幸を得て、上に累薦す。召還され、復た右丞を拝す）」とあり、大和の六年（八三二）に浙西觀察使、八年には召還されて尚書右丞となっている。しかし翌九年、宰相李訓の下で宦

官勢力の打倒を謀り、挙兵前に露見して（いわゆる甘露の変）

族滅に遭った。なお王璠の名は、『太平広記』中の計六話に見える。うち卷一二・報応二「宋申錫」では、王璠の刑死の運

命が宋申錫を陥れた報いとされ（出典は唐・盧肇『逸史』、卷三九二・銘記二「王璠」では、城溝工事で掘り出された石の銘文が、老吏の解説通り璠一族の誅滅を予言していたという）。

○**浙西** 浙江省の浙江以北と江蘇省の長江以南の地。浙西觀察使が管轄した。

○**團練副使** 唐の中期、肅宗の時に初めて設置された官職。天子が直接任命する所謂「使職」である。唐代、枢要の地には節度使が置かれたが、重要度のやや劣る地区には觀察使、防御使、團練使、團練副使などが置かれ、軍事を掌った。團練使は朝廷に直属し、多くは觀察使、防御使を兼任した。元来は武官であるが、後に刺史の職を兼ねるに至って、その権勢が増大した。中央としばしば衝突したが、逆に貴族を掣肘したときには天子に利用されることもあった。韋齊休は、大和六年に王璠が浙西觀察使となつて團練使を兼任した際、その副官（團練副使）となり、二年後、璠が召還される前に死去したことになる。

○**太和八年** 唐の文宗の年号（八二七〜八三五）、八年は西暦八三四年。正しくは「大和」である（清・錢大昕『二十二史考異』卷四二・唐書二の「文宗紀」を参照）が、文献上「太和」の表

記も多く見られる。『河東記』には本話以外に、03「慈恩塔院女仙」、07「李敏求」、14「王錡」、15「馬朝」、25「段何」、27「許琛」、28「崔紹」、29「辛察」の八話に大和（太和）の年号が見える。なお、『河東記』三十四話のうち、紀年の記載があるものでは大和八年が最も多い。

○**潤州** 治所は現在の江蘇省鎮江市。『旧唐書』卷四〇・地理志三・江南東道の「潤州」に「永泰後、常爲浙江西道觀察使理所（永泰の後、常に浙江西道觀察使の理所と爲る）」。『永泰』は唐の代宗の年号（七六五〜七六六）。

○**三更** 日没から日の出までの一夜を五つに分けた時刻、「五更」の三番目。午前零時頃。また、午後十一時から午前一時頃までの真夜中の時間帯。本話ではこの後、都に遺体を運んで埋葬を終えたところ、再び韋齊休が現れる展開になるが、その時刻も「十數日、向三更、忽呼其下曰、……（十數日にして、三更に向なんなんとするに、忽ち其の下を呼びて曰く、……）」と同じである。異変、怪異が起こるには適した時刻であろう。なお『河東記』では、この他06「呂群」に「至三更、群大醉、昇歸館中（三更に至り、群大いに酔ひ、昇かがれて館中に帰る）」と、三更の時刻が見える。

○**小斂** 死去の翌日、堂に移して死者を沐浴させ、衣服を改める儀式。「小殮」にも作る。『儀礼』既夕礼に「小斂、辟奠不出

室（小斂には、辟奠して室を出でず）、『礼記』喪大記に「小斂、君・大夫・士、皆用複衣複衾（小斂には、君・大夫・士、皆な複衣複衾を用ふ）。『太平広記』では「小斂」は本話のみ。「小殮」が二例、卷三六・神仙三六「魏方進弟」（出典は唐・盧肇『逸史』、および卷二〇〇・神一〇「杜鵬舉」（出典は唐・蕭時和作の伝）に見える。

○西壁下 西方の壁のもと。ここは本葬前の殯かりもがりの際、遺体を納めた棺を安置する場所であつた。『旧唐書』卷二二八・顏真卿伝に「眞卿度必死、乃作遺表、自爲墓誌・祭文、常指寢室西壁下云、吾殯所也（眞卿 必ず死せんことを度り、乃ち遺表を作り、自ら墓誌・祭文を爲し、常に寢室の西壁の下を指して云ふ、「吾が殯所なり」と）とある。また『太平広記』卷三五八・神魂一「鄭齊嬰」では、五臓の神に死期を伝えられた鄭齊嬰が、沐浴して新しい衣服に着替え、「臥西壁下、至時而卒（西壁の下に臥し、時に至りて卒す）」と記されている（出典は唐・戴孚『广異記』。これは遡つて、『礼記』喪大記に「大夫殯以幃、櫛あ置于西序（大夫の殯は幃を以てし、櫛あめて西序に置く）」とあるのに係するものであろうか。また吉川忠夫『中国人の宗教意識』（創文社、一九九八年）によれば、中国においては古来、西ないし西南の方角は聖なる場所と見做されていたという（「I 静室」三三三四頁）。この方位観も無視できないであろう。

西壁の下は、従つて死者の霊が現れる場所でもあつた。『太平広記』卷二九・鬼四「夏侯愷」には、病没した夏侯愷の霊が現れ、「語訖、閤門忽有光明如晝、見愷著平上幘・單衣、入坐如生平、坐西壁大牀、悲笑如生時（語訖をに、閤門に忽ち光明の昼の如き有りて、愷の平上幘・單衣を著し、入坐すること生平の如く、西壁の大牀に坐し、悲笑すること生時の如きを見る）」と、西壁の牀に腰を落ち着けている（出典は晋・王隱『晋書』。他に卷二八三・巫「許至雍」では、男巫の趙十四が、許至雍の依頼を受けて彼の亡妻の魂を招く場面に「遂擇良日、於其内、洒掃焚香、施牀几於西壁下（遂に良日を択び、其の内に於いては、洒掃焚香し、牀几を西壁の下に施す）」とあり（出典は唐・裴約『靈異記』、西壁の下に招魂用の牀几が設置されている。（ただし、亡妻の霊が現れるのは庭際。）

なお、『河東記』訳注稿（五）（『名古屋大学中国語学文学論集』第三輯、二〇一八年）の「韓弇」執筆時には、西（あるいは西南）の方位が持つこうした意味について知識が無く、調査も不十分であつた。この注記を「宅西南」「黒風自西來」の注（六五頁下・六六頁上、六六頁下）の補訂にも当てたい。

○娘子 女性に対する呼称。身分の尊卑あるいは既婚・未婚にかかわらず用いられ、主婦に対する尊称ともなつた。牛志平・姚兆女編著『唐人稱謂』（隋唐歴史文化叢書・三秦出版社、一九

八七年)一〇〇〜一〇一頁。常見の語で、『河東記』では他に08「獨孤遐叔」、10「板橋三娘子」、11「盧佩」、19「成叔弁」、26「蘊都師」、31「申屠澄」に見え、意味内容にそれぞれ小異がある。『河東記』訳注稿(三)所収「獨孤遐叔」(『名古屋大学中国語学文学論集』第二九輯、二〇一五年)の「娘子」注(二二八頁下〜二二九頁上)、および同「訳注稿(五)」所収「盧佩」の「娘子」注を参照(同論集第三二輯、二〇一八年、五一頁下〜五二頁上)。

○處分 言いつける、命じる。『漢語大詞典』によれば、処理する、処置する、指揮する、処罰するなど、様々な用法が他にもあつて(第八卷八三七〜八三八頁) 特定が難しいが、ここはこの意味であろう。『太平広記』中にも頻見され、『河東記』では他に13「柳渢」、28「崔紹」の二話に見える。「柳渢」には「但毎至夜泊之處、則必箕踞而坐、指揮處分、皆非生者所爲(但だ夜泊の処に至る毎に、則ち必ず箕踞して坐し、指揮処分すること、皆な生者の爲す所に非ず)」とあり、「崔紹」には「大王曰、有冤家上訴。手雖不殺、口中處分、令殺於江中(大王曰く、「冤家の上訴せるあり。手ずからは殺さずと雖も、口中に処分し、江中に殺さしむ」と)」、「大王處分、與紹馬騎、盡諸城門(大王処分して、紹と馬騎し、諸城門を尽くす)」の二例が見える。

○仆地 地面にうつ伏せに倒れる。『河東記』では30「龔播」

に「忽遇風雨之夕、天地陰黑、見江南有炬火。復聞人呼船求濟急、……播即獨棹小艇、涉風而濟之。至則執炬者仆地、視之即金人也。長四尺餘、播即載之以歸、於是遂富(忽ち風雨の夕に遇ふに、天地は陰黒にして、江の南に炬火有るを見る。復た人の船を呼びて濟ひを求むること急なるを聞き、……播即ち独り小艇に棹さし、風を涉りて之を濟はんとす。至れば則ち炬を執る者は地に仆し、之を視れば即ち金人なり。長さは四尺余り、播即ち之を載せて以て歸り、是に於いて遂に富めり)」。

○衾 掛け布団をいうが、ここは死者を納棺するときに着せる衣のこと。かたびら。『河東記』では、18「鄭馴」に「其夜、暴病霍亂而卒。時方暑、不及候其家人、即爲具棺槨衾綖斂(斂之(其の夜、暴かに霍亂を病みて卒す。時に方に暑ければ、其の家人を候つに及ばず、即ち為に棺槨・衾綖を具して之を斂め)。

○厲聲 声を厳しくする。厳しい口調でいう。『河東記』では02「蕭洞玄」に「須臾至一府署、云是平等王、南面憑几、威儀甚嚴。厲聲謂無爲曰、爾未合至此。若能一言自辨、即放爾廻(須臾にして一府署に至るに、是れ平等王なりと云ひ、南面して几に憑り、威儀甚だ嚴なり。声を厲しくして無爲に謂ひて曰く、「爾は未だ合に此に至るべからず。若し能く一言して自ら弁ずれば、即ち爾を放ちて廻さん」と)。

○鬼妻 死者の妻。寡婦。『墨子』卷六・節葬下に「昔者越之東

有軼沐之國者。……其大父死、負其大母而棄之、曰鬼妻、不可與居處（昔者越の東に軼沐の国なる者有り。……其の大父死すれば、其の大母を負ひて之を棄て、鬼妻と曰ひて、居処を与にするべからず）。『太平広記』には他に一例、卷四八〇・蛮夷一「軼沐國」に晋・張華『博物志』を出典として引かれる記事があるが、内容は『墨子』と同じ（ただ、若干の字句の異同が見られる）。

○鬼語 幽鬼が語る。幽鬼の言葉。『太平広記』にも散見され、卷七一・道術一「葛玄」に「精人故作鬼語乞命（精人 故ら鬼語を作して命を乞ふ）」（出典は晋・葛洪『神仙伝』、卷一二七・報応二六「諸葛元崇」に「驗其父子亡日、悉如鬼語（其の父子の亡日を驗するに、悉く鬼の語るが如し）」（出典は北齊・顔之推『還冤記』など）とある。漢訳仏典にもしばしば見え、「聞鬼語」は三国呉・康僧会訳『旧雜譬喻經』卷下・四六に「其不敢破者、夜聞鬼語起呼伴去（其の敢へて破らざる者、夜に鬼の語りて伴を起呼して去るを聞く）」とある（『大正新脩大藏經』第四卷・本緣部下、五一八頁中段、同文は唐・釈道世『法苑珠林』卷三一・妖怪篇第二四・引証部第二にも『旧雜譬喻經』からとして引かれている。『大正新脩大藏經』第五三卷・事彙部上、五二四頁上段、四庫全書本では卷四二）。

○驚悸 驚きおそれ動悸が激しくなる。『太平広記』では、卷一

〇七・報応六・金剛經「李元一」の「李元一、唐元和五年任饒州司馬。有女居別院、中宵忽見神人、驚悸而卒（李元一、唐の元和五年に饒州司馬に任ぜらる。女の別院に居る有るに、中宵忽ち神人を見、驚悸して卒す）」とある（出典は唐・盧求『報応記』など、計十六例）。

○畏悸 おそれて動悸が激しくなる。「驚悸」と同様な意味であるが、唐以前の用例が見当たらず、『太平広記』中にもこの一例のみ。なお唐・孫思邈『備急千金要方』卷四〇の「竹瀝湯」の条には、「治心實熱驚夢喜笑恐懼不安方」の一文が見える。ここは「畏悸」ではなく、「恐懼」「悸懼」の二つの熟語として読まれるべきであろうが、「畏」と「悸」が類義の文字として結び付き易いことを示しているように思われる。

○不合 ……すべきではなかったのに。入矢義高監修・古賀英彦編著『禪語辞典』（思文閣出版、一九九一年）には、「……してはならぬ、という普通の意味とは別に、すべきではないことをしてしまったという意味の場合があり、その場合は『ふとどきにも』『けしからにことに』という意の副詞として読んだ方がよい。宋以後の法制文書にもこの例が多い」とあり、宋・雪竇重顕『雪竇語録』および宋・大慧宗杲『大慧語録』卷一の用例を引く（二九七頁）。示された訳語はここにはびつたりしないが、副詞「不合」のニュアンスを知る上で参考になろう。なお、【校

記」1—④に示した「不分」であれば「はからずも」「思いがけず」、「不忿」であれば「……に不満で」「……に忍びなくて」の意味となろう。江藍生・曹広順『唐五代語言詞典』（上海教育出版社、一九九七年）三二—三三頁参照。

○**遽隔幽明** にわかにあの世とこの世に隔てられる。急に死別する。唐・楊炯「爲薛令祭劉少監文」に「誰言倏忽、遽隔幽明（誰か言はん倏忽として、遽かに幽明を隔つとは）」とある（『全唐文』卷一九六、『盈川集』卷一〇）。「幽明」は、あの世とこの世。生と死。常用の語で『太平広記』にも散見される。うち卷四九二・雜伝記九「靈應傳」には、「乃言曰、幽明有隔、幸不以燈燭見迫（乃ち言ひて曰く、「幽明」には隔たり有れば、幸ひに灯燭を以て迫られざらんことを）」とある（出典記載なし。唐の闕名撰）。同伝にはまた「幽顯事別」の語も見え、こうした四字句を『太平広記』中に求めてみると、「幽明道殊」「幽明異路」「幽明理隔」「幽明隔絶」、「幽顯異路」「幽顯異途」「幽顯路塗」等々数多く、あるいはまた「幽冥爲隔」「幽冥理隔」「幽冥殊塗」といった表現もある。『河東記』には他に「幽明」の用例はないが、07「李敏求」に「幽顯殊途（幽顯途を殊にす）」の語が見える。

○**孤惶** 「惶」は、おどろき慌てる、おそれる。『太平広記』にはこの一例のみ。唐代以前の用例が他に見当たらない。『漢語大

詞典』は、清・蒲松齡『聊齋志異』卷六「菱角」の（胡大）成竄民間、弔影孤惶而已（胡大成は民間に竄れ、弔影孤惶するのみ）とあるのを引き、「孤独惶惑」と説明する（第四卷二二四頁）。

○**依怙** たよる。たよりとすべきもの。『尚書』周書・無逸第一七の「則知小人之依」の漢・孔氏伝に「則知小人之所依怙（則ち小人の依怙する所なるを知る）」。稀見の語ではないが、『太平広記』にはこの一例のみ。漢訳仏典に極めて多くの用例が見える。一例のみを挙げれば、『雜寶藏經』卷二（二二）波斯匿王女善光緣に「窮人答言、我父先舍衛城中、第一長者。父母居家、都以死盡、無所依怙、是以窮乏（窮人答へて言ふ、「我が父先には舍衛城中にて、第一の長者なりき。父母居家、都て死に尽くせるを以て、依怙する所無く、是を以て窮乏す」と）」（『大正新脩大藏經』第四卷・本緣部下、四五八頁中段）。

○**神識** 神魂。靈魂。『太平広記』には計六例、多くは精神、意識の意味で用いられているが、卷二九五・神五「安世高」には「世高神識還生安息國、復爲王作子（世高神識還た安息國に生まれ、復び王と爲りて子を作す）」と見える（出典は南朝宋・劉義慶『幽明録』）。

○**不覺** 思わず知らず、はからずも。意外性をあらわす副詞で、「目が覚めない」「気がつかない」といった通常の意味とは異なる。

る。王鏐・曾明德『詩詞曲語辭集釈』（語文出版社、一九九一年）四一～四二頁、および王鏐『唐宋筆記語辭滙釈（修訂本）』（中華書局、二〇〇一年）一〇頁に詳しい。『河東記』では、「不覺」九例のうち七例（本話および01「黒叟」、02「蕭洞玄」、13「柳漣」、29「辛察」二例、32「盧從事」）がこの意味で、大多数を占める。

○昏絶 氣を失う。昏倒する。「昏」の意味は「くらい、頭が働かずぼんやりしたさま」で、「昏」に通じる。また「昏」は「悶」に通じ（音はモン）、「悶絶（苦しんで氣を失う）」とも同義となる。ただ「昏絶」の語は、他に全く用例が見当たらない。「昏絶」であれば、『太平広記』にも二例、うち卷一一五・報応一四・崇経像「崔義起妻」には、「（崔義起妻蕭氏）欲去又云、我至二十日更來、將素玉看受罪。即如期、素玉便昏絶、三日乃蘇（崔義起の妻蕭氏去らんと欲して又た云ふ、「我二十日に至りて更に來り、素玉を將つて罪を受くるを看しめん」と。即ち期の如くして、素玉 便ち昏絶し、三日にして乃ち蘇る）」とある（出典は唐・盧求『報応記』）。

○明教 立派な教え。相手の言葉を尊敬して言う。漢・劉向『說苑』卷一〇・敬慎に「穰侯曰、善。敬受明教（穰侯曰く、「善きかな。敬みて明教を受けん」と）」の語が見える。また、唐・釈道世『法苑珠林』卷二・士女篇第二二・俗女部第二・姦偽

部第二に「佛言、且聽。男子有狂愚之惡、却觀女妖。王曰、善哉、願受明教（仏言ふ、「且く聽け。男子に狂愚の惡有れども、却つて女妖を觀ん」と。王曰く、「善きかな、願はくば明教を受けん」と）」とある（『大正新脩大藏經』第五三卷・事彙部上、四四四頁下段、四庫全書本では卷三〇）。本話の「侯明教」も「受明教」と同義であるが、他に用例が見当たらない。

○豈敢 どうして無理を押して……しようか。常用される反語で、『河東記』では他に31「申屠澄」に「翁曰、……不期貴客又欲援拾、豈敢惜。願（即）以爲託（翁曰く、「……期せざりき貴客又た援拾せんと欲するとは、豈に敢へて惜しまんや。願はくは以て託するを為さん」と）。「豈敢有……」は唐・白居易「謝官狀」に「自顧庸昧、無裨明聖、塵忝歲久、憂慙日深。況於官祿之間、豈敢有所選擇（自ら顧るに庸昧にして、明聖を裨くる無く、塵忝歳は久しく、憂慙日に深し。況んや官祿の間に、豈に敢へて選択する所有らんや）」（『全唐文』卷六六八、『白氏文集』卷五九）、唐・元昉「天台山記」には「義之既蒙處分、豈敢有違（義之既に処分を蒙れば、豈に敢へて違ふ有らんや）」（『唐文拾遺』卷五〇）。

○死生之期 生死の時間。天から授かった寿命。『抱朴子』内篇・卷五・至理に「人之受命死生之期、未若草木之於寒天也（人の受命死生の期は、未だ草木の寒天に於けるに若かざるなり）」。

○眞宰 天のこと。万物の主催者。『莊子』内篇・齊物論第二に「若有眞宰、而特不得其朕（眞宰有るが若くして、而も特^{ひと}り其の朕^{あし}を得ず）」とある。また唐・杜甫「遣興」五首其一に「性命苟不存、英雄徒自強。吞聲勿復道、眞宰意茫茫（性命苟しくも存せずんば、英雄徒らに自ら強くせん。声を吞みて復た道ふこと勿れ、眞宰意は茫茫たり）」（『全唐詩』卷二一八、『杜詩詳註』卷七）。

○夫婦之道 夫婦の正しい在り方。『周易』第九・序卦伝に「夫婦之道不可以不久也。故受之以恆。恆者久也（夫婦の道は以て久しからざるべからざるなり。故に之を受くるに恆を以てす。恆とは久なり）」とある。唐・陳邈妻鄭氏「進女孝經表」に「妾聞、天地之性、貴剛柔焉、夫婦之道、重禮義焉（妾聞く、天地の性は、剛柔を貴び、夫婦の道は、礼儀を重んず、と）」とある（『全唐文』卷九四五、元・陶宗儀『重校說郛』卷七〇）。

○人倫 君臣・父子・夫婦などの間の秩序。人として守るべき道。『孟子』卷五・滕文公章句上に「人之有道也、飽食煖衣、逸居而無教、則近於禽獸。聖人有憂之、使契爲司徒、教以人倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有敘、朋友有信（人の道有るや、飽食煖衣、逸居して教ふること無ければ、則ち禽獸に近し。聖人有^{また}之を憂ひ、契をして司徒爲らしめ、教ふるに人倫を以てし、父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼叙有り、

朋友信有り）」と見える。前注に引いた唐・陳邈妻鄭氏「進女孝經表」には、また「蓋以夫婦之道、人倫之始、考其得失、非細務也（蓋し夫婦の道は、人倫の始めなるを以て、其の得失を考ふるは、細務に非ざるなり）」とある。

○情義 よしみ。交情。情誼。常見の語で、『河東記』では31「申屠澄」に「夫妻情義益淡（夫妻の情義益ます淡し）」の語が見える。

○他生 来世。もともとは「来世に生まれ変わる」あるいは「過去、未來の現世以外の世」の意味を示す仏教用語。『太平広記』では、他に卷三八八・悟前生三「齊君房」に「僧曰、今日之事、吾無計矣。他生之事、庶有警於吾子（僧曰く、「今日の事、吾には計無し。他生の事、庶はくば吾子に警するところ有らんことを）」（出典は唐・李玫『纂異記』）。

○寛襟抱 心を開いて思いを語る。胸襟を開く。「襟抱」は、心に思っていること。抱負。襟懷。唐・陸贄「奏天論赦書事條狀」に「宣暢鬱埋、不可不洞開襟抱、洗刷疵垢、不可不盪去癥痕、使天下聞之、廓然一變（鬱埋を宣暢せんとすれば、襟抱を洞開せざるべからず、疵垢を洗刷せんとすれば、癥痕を盪去せざるべからず、天下をして之を聞きて、廓然として一変せしめん）」（『全唐文』卷四六九、『翰苑集』卷二三）。『太平広記』中では、この一例のみ。現代中国語訳は、韋齊休自身が襟抱を寛がせる

と取る説（河北教育出版社）と、妻にそうさせてやると取る説（北京燕山出版社本、天津古籍出版社本）に分かれる。西本邦訳は後者（第三冊一三〇頁）。似た表現としては、卷三二・「又俳優人」に「時崔相胤密奏曰、此姦人也、未足爲信。階下宜寬懷待之（時に崔相胤密かに奏して曰く、「此れ姦人なり、未だ信と爲すに足らず。階下宜しく懷を寛^{くろ}がせて之を待て」と）」（出典は五代十国・荆南・孫光憲『北夢瑣言』）。なお時代を降つて宋・文天祥「先君子革齋先生事實」には、「先君子哭子方新、天祥壁復去。左右恐益重哀、出可寬襟抱（先君子子を哭すること方に新たなるに、天祥壁復た去れり。左右は重哀を益さんことを恐れ、襟抱を寛がすべきを出す）」の語が見える（『文山集』卷一六）が、この場合は、心をくつろがせ解き放つの意。あるいはこの意味に取ることも可能か。なお、「寛襟抱」の主語を斉休あるいは妻のいずれかとするのではなく、互いに胸襟を開くと取つても良いのではないだろうか。

○家事 家庭内の仕事、諸事。古くは『春秋左氏伝』襄公二十七年秋七月の伝に「夫子之家事治、言於晉國無隱情、其祝史陳信於鬼神無愧辭（夫子の家事は治まり、晋国に言ひて隠情無く、其の祝・史の陳ぶるも鬼神に信ありて愧辭なし）」と見え、大夫の家族内の事務を指したが、後に広く一般の家庭も指して用いられるようになった。常見の語で『太平広記』にも多数。例え

ば卷三二・神仙三二「王賈」には、「賈母之表妹、死已經年、常於靈帳發言、處置家事。兒女僮妾、不敢爲非。每索飲食衣服、有不應求、即加笞罵（賈母の表妹は、死して已に年を経るに、常に靈帳に於いて発言し、家事を処置す。兒女・僮妾は、敢へて非を爲さず。飲食・衣服を索むる毎に、求めに応ぜざる有れば、即ち笞罵を加ふ）」とある（出典は唐・牛肅『紀聞』）。ただしこの話の場合は、死者本人が現れたのではなく、正体は彼女に化けた老狐。また卷三三・鬼八「王胡」には、「宋王胡者、長安人也。叔死數載、元嘉二十三年、忽形見還家、責胡以修謹有缺、家事不理、罰胡五杖。傍人及隣里、並聞其語及杖聲、又見杖瘢、而不見其形。唯胡獨得親接（宋の王胡なる者は、長安の人なり。叔死して數載、元嘉二十三年に、忽ち形見^{あら}はれて家に還り、胡を責むるに修謹に缺^かくる有り、家事理^{をさ}まらざるを以てし、胡を罰すること五杖なり。傍人及び隣里、並びに其の語及び杖声を聞き、又た杖瘢を見るも、其の形を見ず。唯だ胡独り親しく接するを得るのみ）」とある（底本の中華書局点校本には出典記載なし。孫本は『法苑珠林』、四庫本は『異苑』と記す。『法苑珠林』は唐の釈道世、『異苑』は南朝宋の劉敬叔の撰）。この話では、現れたのは死んだ叔父本人である。他に卷三七・鬼二二「李潛」には「河中少尹李潛、以廣德二年薨。初七日、家人設齋畢、忽於中門見潛獨騎從門而入。奴等再拜、持潛下馬、

入座於西廊。諸子拜謁泣。潸云、生死是命、何用悲耶、只攬亡者心耳。判囑家事久之（河中少尹の李潸、広徳二年を以て薨ず。初めより七日、家人斎を設け畢るに、忽ち中門に於いて潸の独り騎して門從り入るを見る。奴等は再拝し、潸を持して馬より下ろすに、入りて西廊に座す。諸子拜謁して泣く。潸云ふ、「生死は是れ命なり、何を用つてか悲しまんや、只亡者の心を攬すのみ」と。家事を判囑すること之を久しうす」とある（出典は唐・戴孚『広異記』。李潸の座所は西方であり、遺族に向けての言葉も、韋齊休のこのあとの語「不可空爲兒女悲泣、使某幽冥間更憂妻孥也」と似た内容で興味深い。

○商量 相談する。協議する。唐・韓愈『順宗実録』三に「叔文見制書大驚、謂人曰、叔文日時至此商量公事、若不得此院職事、即無因而至矣（叔文制書を見て大いに驚き、人に謂ひて曰く、「叔文日時此に至りて公事を商量するに、若し此の院の職事を得ざれば、即ち因りて至る無し」と）」（『全唐文』卷五八〇、『東雅堂昌黎集註』外集卷八）。常用の語で、『太平広記』には十余例、うち卷二六一・嗤鄙四「梅權衡」には、「權衡乃大言曰、押字須商量、爭應進士舉（權衡乃ち大言して曰く、押字は須らく商量すべし、争でか進士の挙に応ぜん」と）」（出典は唐・温庭筠『乾驥子』。『河東記』では、他に19「成叔弁」に二例。

○兒女悲泣 女子供のように、ただ悲しみ泣く。『晋書』卷九六・

烈女・涼武昭王李玄盛后尹氏伝に「尹氏曰、興滅死生、理之大分。何爲同凡人之事、起兒女之悲。吾一婦人、不能死亡、豈憚斧鉞之禍、求爲臣妾乎。若殺我者、吾之願矣（尹氏曰く、「興滅死生は、理の大方なり。何為れぞ凡人の事と同じうして、兒女の悲しみを起さんや。吾は一婦人にして、死亡すること能はざるも、豈に斧鉞の禍を憚りて、臣妾と爲るを求めんや。若し我を殺さば、吾の願ひなり」と）。また唐・高適「別韋參軍」に「丈夫不作兒女別（一作悲、に悲、に作る）、臨岐涕淚霑衣巾（丈夫は作さず兒女の別に臨んで涕淚して衣巾を霑すを）」（『全唐詩』卷二三、『高常侍集』卷二）。唐・韓愈「北極贈李觀」に「無爲兒女態、憔悴悲賤貧（兒女の態を爲し、憔悴して賤貧を悲しむ無かれ）」（『全唐詩』卷三三七、『東雅堂昌黎集註』卷二）とあるのも似た表現。

○幽冥 あの時。冥界。常用の語で『太平広記』にも多数。「幽冥間」は卷七一・道術一「竇玄徳」に「幽冥間事甚機密、幸勿泄之（幽冥の間の事は甚だ機密なれば、幸ひに之を泄らすこと勿れ）」と見える（出典は唐・闕名『玄門靈妙記』）。

○妻孥 妻と子供。常用の語で、『河東記』では01「黑叟」に「（皇甫）政暇日、率妻孥入寺、至魔母堂（皇甫政暇日に、妻孥を率ゐて寺に入り、魔母の堂に至る）」。

○夜來 昨夜。昨夜から。これも常用の語で、例えば唐・孟浩

然「春曉」に「夜來風雨聲、花落知多少（夜來風雨の聲、花の落つること知る多少ぞ）」（『全唐詩』卷一六〇、『孟浩然集』卷四）。『河東記』では、29「辛察」、32「盧從事」に見える。「……來」は、「今來」「古來」「秋來」などの語と同じく、時間や季節を表す言葉と結びつく性質がある。

○**勞心** 心を働かせる、頭を使う。また、心を疲れさせる、心を憂えさせる。『詩經』国風・齊風「甫田」に「無思遠人、勞心忉忉（遠人を思ふこと無かれ、勞心忉忉たり）」、『春秋左氏伝』襄公九年冬の伝には「君子勞心、小人勞力、先王制也（君子は心を勞し、小人は力を勞するは、先王の制なり）」、『太平広記』には六例。

○**失脱** 不注意で間違いを犯す。『北齊書』卷二・季式伝に「遠戰萬一失脱、豈不招罪（遠戦して万一失脱すれば、豈に罪を招かざらんや）」とある。『太平広記』では、この一例のみ。

○**可助僕喜** 私の喜びを益すことができる。「助……喜」は漢訳仏典に散見され、例えば後秦・鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』卷下・法供養品第二三には、「佛言、善哉、善哉、天帝、如汝所説、吾助爾喜（仏言ふ、「善き哉、善き哉、天帝よ、汝が説く所の如ければ、吾は爾が喜びを助さん）」」（『大正新脩大藏經』第一四卷・經集部一・五五六頁上段）。唐詩では、劉禹錫「歷陽書事七十韻并引」に「助喜杯盤盛、忘機笑語旬（喜びを助して杯

盤盛んに、機を忘れて笑語旬いなり）」（『全唐詩』卷三六三、『劉賓客文集』外集卷八）、盧仝「憶金鵝山沈山人二首」其一に「一片新茶破鼻香、請君速來助我喜（一片の新茶、鼻を破りて香れば、請ふ君が速やかに來りて我が喜びを助さんことを）」（『全唐詩』卷二八八）などがある。また敦煌變文にも用例が見え、蔣礼鴻主編『敦煌文献語言詞典』（杭州大学出版社、一九九四年）は、『廬山遠公話』の「且喜賊軍抽退、助和尚喜（且く賊軍の抽退せるを喜び、和尚の喜びを助さん）」、『太子成道經』の「助大王喜、合生貴子（大王の喜びを助し、合に貴子を生むべし）」などを引く（四一九〜四二〇頁「助」）。同書によれば「助」は「賀（喜）」の意味を持つといい、そうであれば「助……喜」は「……の喜びを祝い喜ぶ」の意となる。「助」は通常の「たすける」でも意味は通じ、判断に迷うが、一先ず「益す」と取っておく。なお、「僕」は謙譲の一人称であるが、何故ここで妻に対して謙辞を用いるのか疑問が残る。待考。

○**湖州** 現在の浙江省湖州市。太湖の南西に位置する。『旧唐書』卷四〇・地理志三・江南東道に「湖州上 隋吳郡之烏程縣。武德四年、平李子通、置湖州、領烏程一縣……（湖州上 隋の吳郡の烏程県なり。武德四年、李子通を平らげ、湖州を置き、烏程一県を領す……）」。

○**庾七** 人名。本話に見えるのみ。「七」は排行。

○買口錢 奴隸を買う金、あるいは奴隸売買の金であろう。唐

以前には他に用例が見当たらず、意味の確定が難しい。「口錢」であれば人頭税をいうが、ここは「買口の錢」が無理のない読み方。管見では唯一の用例として、宋・林希逸『竹溪鬳齋十一藁統集』卷三二「陳判官墓誌銘」に「秋場受納、每石有買口錢。

二楮君笑曰、口可買、心可買乎。擲去之（秋場に受納するに、石毎に買口の錢あり。二楮君笑ひて曰く、「口は買ふべきも、心は買ふべきや」と。擲きて之を去らしむ）。「口」は「生口」

「人口」、すなわち人の意味。「買口」も用例が見当たらないが、「買生口」の用例であれば、『三国志』魏書卷二八・王昶伝の裴松之注が引く任嘏の別伝に「又與人共買生口、各雇八匹（又た人と共に生口を買ふに、各おの八匹を雇ゆ）」とある。仏典にも唐・道宣撰『四分律刪繁補闕行事鈔』に「比丘之法、不得賣買生口等（比丘の法は、生口等を売買するを得ず）」（『大正新脩大藏經』第四〇卷・律疏部、七〇頁中段）。「買人口」「售買人口」の用例は、時代を大きく降るが清代の文献に見える。例えば、『欽定大清會典則例』卷三二・戸部には、「盛京購買馬匹、乘機買人口者、不準放出（盛京に馬匹を購買し、機に乗じて人口を買ふ者は、放出を準さず）」と、陳倫炯『海國聞見錄』卷上・東洋記には「無售買人口、傭工期滿、即歸所統屬國（人口を售買すること無く、傭工は期滿つれば、即ち所統の属國に歸る）」と

ある。

○蒼遑 あわてふためくさま。あわたしいさま。蒼惶、倉遑、倉惶とも表記する。『太平広記』では用例が少なく、「蒼遑」はこの一例のみ。「蒼惶」「倉遑」「倉惶」もそれぞれ二、三例。『河東記』では、29「辛察」に「一家倉惶」。

○不免 まぬがれない。避けられない。この場合のように、後に動詞を伴って「不免……」の句型を取ることも多い。

○專心 一つのことに心を集中させる。專念する。常用の語で、『太平広記』にも十余例。ただ『河東記』ではこの一例のみ。

○部署 物事を都合よく処理する。手配する。配置する。『史記』卷七・項羽本紀に「（項）梁部署吳中豪傑爲校尉・候・司馬（項梁吳中の豪傑を部署して校尉・候・司馬と爲す）。『太平広記』では、例えば卷一四九・定数四「麴思明」の、「却後二年、疾病危篤、差人問之。思明報云、可部署家事。冬曦知其不免、其疾病危困而卒（却きて後二年、疾病危篤なれば、人を差はして之に問ふ。思明報じて云ふ、「家事を部署すべし」と。冬曦其の免れざるを知り、其の疾病困して卒す）」（出典は唐・闕名『會昌解頤（録）』、卷四八六・雜伝記三「無雙傳」の「我以妻女爲念、略歸部署。疾召仙客與我勾當家事（我は妻女を以て念と爲し、略歸りて部署す。疾く仙客を召して我が与に家事を勾当せよ）」（出典の記載なし。撰者は唐・薛調）などが、同義の用例であろう。

○今則 今もし……であれば。「則」は仮定をあらわす。『史記』卷八・高祖本紀に「今則來、沛公恐不得有此（今則し來たらば、沛公恐るらくは此を有つを得ざらん）」。「今則」は常見の語で『太平広記』においても三十数例に登るが、仮定の意味での用例はこの一例のみと意外に少ない。

○足爲慰 なぐさめとするに足る。唐・張說「敕金城公主書」に「比者通好、信使數來、知彼所宜、善足爲慰（比者好を通じ、信使數し來り、彼の宜しとする所を知れば、善く慰めと為すに足れり）」（『全唐文』卷二八七、『曲江集』卷二二）。また『旧唐書』卷一九六上・吐蕃伝上に「……朕以小蕃無知、事須處置、授以奇計、所以行之、獲彼戎心、歸我城守、有足爲慰也（……朕小蕃の無知なるを以て、事須く処置すべしとし、授くるに奇計を以てし、之を行ふ所以は、彼の戎心を獲て、我が城守を歸さしむれば、慰めと為すに足る有ればなり）」と。「足爲……」は常見の語で、『太平広記』にも三十例近く、『河東記』では01「黑叟」に「叟撫掌笑曰、如其不信、田舍老妻、足爲驗耳（叟掌を撫ちて笑ひて曰く、「如し其れ信ぜざれば、田舍老の妻、驗と為すに足るのみ」と）」、04「葉靜能」に「持蒲曰、此不足爲飲也、請移大器中（持蒲曰く、「此れ飲と為すに足らざるなり、請ふ大器中に移さんことを」と）」とある。

○良久 かなりの時間が経って。「良」は、「やや」と訓読する

が、原義は「はなはだ」「非常に」の意。そこで『漢語大詞典』は「良久」を「很久」と説明する（第九卷二八〇頁）。ただ、指示される時間の長さは主観的な感覚も伴ってかなりの幅があり、邦訳では「しばらくして」と訳されることも多い。入矢義高・古賀英彦『禪語辞典』は、「なにほどの時間の経過をいうが、禪語においては、問答あるいは上道説法で暫く沈黙することとを、この語によつて表す」と解説する（四七六頁）。『大漢和辞典』の説明は、「まことに久しい。又、やや久しい。大分しばらくたつて」（第九卷五〇三頁）。常用の語で、『太平広記』は無論のこと、『河東記』にも頻見される。

○營喪事 葬儀を執り行う。『南史』卷一五・徐孝嗣伝に「孝嗣之誅、衆人懼、無敢至者。唯會稽魏溫仁奔赴、以私財營喪事、當時稱之（孝嗣の誅せらるや、衆人懼れ、敢へて至る者無し。唯だ會稽の魏溫仁のみ奔り赴き、私財を以て喪事を営めば、當時之を称す）。唐代以前の用例が稀で、『太平広記』もこの一例のみ。

【原文】 2

纔曙、復聞呼^①。適到張清家。近^②造得三間草堂、前屋^③舍自足。不煩勞他人更借下處矣。其夕、張清似^④夢中忽見齊休、曰、我昨日已死、先令買塋三畝地^⑤、可速支關^⑥布置。一一分明、張

清悉依其命。及將歸。自擇發日。呼喚一如常時。婢僕將有私竊、無不發摘、隨事捶撻。及至京、便之塋所、張清準擬皆畢。

【訓読】 2

纔かに曙くれば、復た呼ぶを聞く。「適たま張清の家に到るに、近ごろ三間の草堂を造り得たり。前の屋舎自ら足れり。他人を勞して更に下処を借るを煩はさず」と。其の夕、張清夢中に忽ち齊休を見るに似たるに、曰く、「我は昨日已に死せり。先に塋の三畝の地を買はしむ。速やかに支開布置すべし」と。一分明なり。張清悉く其の命に依る。將に帰らんとするに及び、自ら發日を択び、呼喚すること一に常時の如し。婢僕の將に私かに窃む有らんとすれば、發摘せざるは無く、隨事に捶撻す。京に至るに及び、便ち塋所に之く。張清準擬して皆畢れり。

【訳】 2

夜が明け初めると、また呼び声が聞こえた。「たまたま張清の家にいったところ、最近、三間の草堂を建造していた。前の家で用は足りる。他人を煩わせてさらに安置所を借りる必要はない」と。その晩、張清は不意に齊休があらわれた夢を見たが、彼は「私は昨日すでに亡くなった。先に墓地として三畝の地を買わせておいたので、速やかに処理してくれ」と言い、逐一はつきりとしていた。そこで張清はすべてその言いつけ通りにした。帰ろうとする時になると、自分で出発の日をえらび、声を

かけることは全く普段そのままであつた。こつそり盗みをたくらむ下女や下男がいると、摘発しない者はなく、思うがままに棒や鞭の処罰を加えた。そして都に着くと、すぐに墓所に赴いた。張清は指示通りに総てを終えたのであつた。

【校記】 2

①「復聞呼」、会校本は「復聞呼曰」に作り、「曰」について校記に「原無此字、現據沈本補」という。伝奇輯校本も「曰」字を補う。これに従うべきかと思われるが、一先ず底本に拠つておく。

②「近」、会校本校記に「沈本無此字」とある。

③「前屋」、会校本は「屋」一字に作り、校記に「原作「前屋」。現據沈本改」という。伝奇輯校本は「前屋」に作り、校記に「前 明鈔本無此字、『會校』據刪」という。

④「似」、会校本校記に「孫本作「自」とある。伝奇輯校本校記も同じ。

⑤「三畝地」、会校本校記に「沈本作「地三畝」とある。

⑥「支開」、会校本校記に「孫本作「交關」。黄本作「支開」とある。筆記本も「支開」に作るが、会校本校記には言及なし。伝奇輯校本は「交關」に作り、校記に「交」原作「支」、據孫校本、『鎮江志』改。按、交關、交易。『筆記小説大觀』本作「支開」、亦誤」という。これに従うべきかとも思われるが、

「支關」の可能性も依然として残るため、底本のままとしておく。

⑦「擬皆」、会校本校記に「沈本作「備方」とある。伝奇輯校本校記にも「準擬皆畢 明鈔本作「準備方畢」とある。

【注】2

○纔曙 夜が明けたばかりの時刻に。「纔」は、たつたいま……したばかり。『太平広記』ではもう一例、卷四四三・畜獸一〇・鹿「王祐」に「祐復再拜、道士乃命酒自酌。纔曙、辭而去（祐復た再拝するに、道士乃ち酒を命じて自ら酌ましむ。纔かに曙くるに、辞して去る）」（出典は唐・柳祥『瀟湘録』。稀見の語で、他に唐代以前の用例が見当たらない。

○張清 人名。本話に見えるのみ。

○間 建物の規模をあらわすため、柱と柱の間を数える単位。

『河東記』では、01「黒叟」に「構堂三間」、07「李敏求」に「院有四合大屋、約六七間（院に四合の大屋の、約六七間なる有り）」、10「板橋三娘子」に「有舍數間（舍の數間なる有り）」、28「崔紹」に「又有一城門、門兩邊各有數十間樓（又た一城門有り、門の両辺には各おの數十間の樓有り）」の用例がある。

○草堂 草葺きの家。「草」は、「粗末な」の意味も持つ。『太平広記』にも散見され、卷二九・神仙二九「李衛公」に「草堂數間」（出典は『原仙記』とあるが未詳。底本注記に「明鈔本作出

『原化記』という。『原化記』は唐・皇甫氏撰、卷七四・道術四「陳生」に「草堂數間」（出典は唐・盧肇『逸史』、卷八三・異人三「張佐」に「草堂三間」（出典は唐・牛僧孺『玄怪録』など）とある。「草堂」といえば、三間ほどの小さな規模がイメージされたようである。『河東記』では、06「呂群」に「見杉松甚茂、臨溪架水、有一草堂（杉松の甚だ茂り、溪に臨み水に架して、一草堂有るを見る）」とある。また30「龔播」には「草廬」、31「申屠澄」には「草舍」の語も見える。

○屋舍 家。住居。家屋。常用の語で『太平広記』にも十例近く見えるが、『河東記』ではこの一例のみ。「前屋舍」の意味が明らかでないが、草堂を新築した張清の旧屋をいうのであろうか。沈本の「屋舍自足」であれば、新築の草堂で用は足りるの意。

○不煩 面倒をかけない。手を煩わさない。「不煩……」の句は、『太平広記』中に散見され、卷九・神仙九「沈建」に「但累屋、不煩飲食也（但だ屋を累はすのみにして、飲食を煩はさざるなり）」（出典は晋・葛洪『神仙伝』、卷五一・神仙五一「宜君王老」に「此瘡不煩以凡藥相療（此の瘡は凡藥を以て相療するを煩はさず）」（出典は五代十国・呉・沈汾『続仙伝（続神仙伝）』）など）とあり、『河東記』では、25「段何」に「自有資從、不煩君財聘（自ら資の從ふ有れば、君が財聘を煩はさず）」と見える。

なお、面倒をかける、煩わすの意味の熟語として「煩勞」があり、例えば東晋・陶淵明『搜神後記』卷六「馮述」の「既蒙恩德、何敢復煩勞（既に恩德を蒙る、何ぞ敢えて復た勞を煩わさんや）」など。ただ、ここは「不煩……」の構文と見做すべきであろう。

○下處 臨時に休む場所。宿泊先。ここでは仮の安置所を言う。『漢語大詞典』は「(1)住所、臨時歇息的地方」と解説し、宋・岳珂『宝真齋法書贊』卷二三「劉武忠書簡帖」の「水路迂濶、想勞神用安。下處已有、俟公到修治也（水路は迂濶なれば、神を勞して用て安んぜんことを想ふ。下處已に有れば、公の到りて修治されんことを俟つなり）」、および『水滸伝』第三回、『紅樓夢』第十五回の一節を引く（第一卷三三二頁）。いずれも宋代以降の用例ということになるが、本話によって唐代すでに使用されていたことが分かる。『太平広記』にはもう一例、卷一九四・豪俠二「僧俠」に「笑云、郎君勿憂。因問左右、夫人下處如法無（笑ひて云ふ、「郎君憂ふること勿れ」と。因りて左右に問ふ、「夫人の下處は法のごときや無や」と）」（出典は宋・王讜『唐語林』とされるが、底本注記によれば明鈔本は『酉陽雜俎』とする）。「僧俠」の話は唐・段成式『酉陽雜俎』卷九・盜俠に見え、当該箇所は字句の異同はない。なおこの「下處」は、夫人を招いて休息してもらう場所の意味で用いられており、遺体の

安置所ではない。

○塋 墓地。はか。

○畝 面積をあらわす単位。唐代の一畝は、約五・八アール。

○支關 未詳。唐代以前の用例が他に見当たらない。ただ、宋・吳自牧『夢梁錄』卷一・二月に「州府自收燈後、例於點檢酒所、開支關、會二十萬貫（州府灯を収めし自り後、例として酒所を点検し、支関を開くに於いて、二十万貫を会む）」とある。「例於……」が読みづらいが、「支關」は、集金あるいは納税用に仮設される役所のようなものである。この用例を参考にすれば、「可速支關布置」は「支関の布置を速かにすべし」と読んで、「役所の処理を早くすませよ」の意味に取ることも可能であろうか。待考。

なお【校記】2―⑥に示したように、孫本は「交關」、黄本・筆記本は「支開」に作る。伝奇輯校本は孫本、『嘉定鎮江志』によつて「交關」に改め、交易の意味に取っている。「交關」は、交際する、行き来する、取引するなど多義であるが、交易の意味では、『太平広記』にも卷一四〇・徵応六・邦国咎徴「汪鳳」の「請以百緡而交關焉（百緡を以てして焉を交関せんことを請ふ）」（出典は唐・薛用弱『集異記』など、複数の用例が見える。これならば意味の通りは良い。次に「支開」は、『大漢和辞典』によれば、支払うの意味（第五卷四五六頁）。ただし、近世以降の言葉として示されており、出典の記載もない。許少峰編『近

代漢語大詞典』(中華書局、二〇〇八年)ほか数種の近代漢語詞典を調査したが、「支開」の語は見えない。現代中国語としては、大東文化大学中国語大辞典編纂室編『中国語大辞典』(角川書店、一九九四年)に「支开」の項目があり、「支えをして開ける」「人払いする」「押し退ける」「張る」「話を はぐらかす」などの説明と用例を載せる(下冊三九八五頁)が、「支払う」は見当たらない。これについても待考。

○布置 処置する。処理する。手配する。『北周書』卷三二・韋孝寬伝に「所有經略、布置之初、人莫之解。見其成事、方乃驚服(有する所の経略は、布置するの初めは、人之を解する莫し)。其の事を成すを見て、方めて乃ち驚服す」とある。常用の語であるが、「並べる、配置する」が原義で、『太平広記』の他の二例、卷七・神仙七「皇初平」の「作飲食百餘斛、羅列布置庭下(飲食百餘斛を作りて、庭下に羅列布置す)」(出典は晋・葛洪『神仙伝』、および卷二六七・酷暴一「來俊臣」の「布置事狀由緒、令其黨告之(事狀由緒を布置して、其の党をして之を告げしむ)」(出典は『御史台記』、唐・韓琬撰および唐・韋述撰の両書があるが、そのいずれか不明)もこの意味。

○分明 はっきりしていること。明らかなこと。常用の語で、『河東記』にも他に28「崔紹」に「紹見文字分明、但不許細讀耳(紹文字の分明なるを見るも、但だ細讀するを許さざるの

み)、29「辛察」に「夜來所夢、不似尋常、分明自君家(夜來の夢むる所は、尋常に似ざるも、分明に自ら君が家なり)」。

○擇發日 出発の日取りを決める。『太平広記』卷二二・報応二〇・冤報「崔尉子」に「遂擇發日、崔與王氏及婢僕列拜堂下、泣別而登舟(遂に発日を択び、崔は王氏及び婢僕と与に列びて堂下に拝し、泣き別れて舟に登る)」(出典は唐・皇甫氏『原化記』)。

○呼喚 呼びかける。また人を使う、働かせる。号令して働かせることを言うのであろう。『漢語大詞典』は、敦煌文書「伍子胥變文」の「治國三年、……三教並興、城門不閉。更無呼喚、無徭[搖]自治(国を治むること三年、……三教並びに興り、城門は閉じず。更に呼喚なく、徭なく自ら治まる)」の一節などを引いて、「召喚(呼びかける、招き寄せる)、差使(派遣する、使いに出す)」の意味があると説明する(第三卷二九〇頁)。ただ項楚『敦煌變文選注』(巴蜀書社、一九九〇年)は、「伍子胥變文」の当該箇所について「呼喚：役使、使喚(人を使う、こきつかう、働かせる)」と注記し、唐・王建「宮詞」と敦煌本王梵志の詩二首を引く(六八頁)。王梵志の詩には「一則無租調、二則絶兵名。閉門無呼喚、耳裏極星星(一には則ち租調無く、二には則ち兵名を絶つ。閉門呼喚無く、耳裏星星を極む)」などとあり、項氏の注がより正確と思われる。言葉としてはさほど

珍しいわけではなく、漢訳仏典を含め幅広い文献中に多数用例が見える。『太平広記』では他に二例、卷三三三・鬼八「張隆」に「日既暝、聞呼喚舉尸置船中（日既に暝れ、呼喚して尸を挙げ船中に置くを聞く）」（出典は南朝宋・劉義慶『幽明録』、卷三九八・石「石響」に「嶽岫嶮峯、有響石。呼喚則應、如人共語、而不可解也（嶽岫嶮峯に、響石有り。呼喚すれば則ち応じ、人の共に語るが如きも、解するべからざるなり）」（出典は唐・鄭常『洽聞記』とある。

○一如常時 全く普段どおりである。唐・杜牧「注孫子序」に「卿大夫行列進退、一如常時（卿大夫の行列進退は、一に常時の如し）」（『全唐文』卷七五三、『樊川文集』卷七）。『太平広記』では同一の四字句ではないが、卷三〇八・神一八「崔龜從」に「既寐、又夢晨起視事如常時、將就便室（既に寐ぬるに、又た晨起して事を視ること常時の如く、將に便室に就かんとするを夢む）」（出典は「龜從自敘」。『全唐文』卷七二九・崔龜從に「宣州昭亭山梓華君神祠記」が載る。『太平広記』の「崔龜從」は、この文章の改作）。

○婢僕 下女と下男。常用の語で『太平広記』には二十数例、ただ『河東記』ではこの一例のみ。

○私竊 こっそり盗む。副詞としても用いられ「ひそかに……する」「無断で……する」などの意味になるが、ここは動詞とし

ての用法。『太平広記』では、他に卷二九六・雨「玉龍子」に「上皇還京、爲小黃門私竊、以遺李輔國、常致櫃中（上皇京に還るに、小黃門の私かに窃み、以て李輔國に遺るところと爲り、常に櫃中に致す）」（出典は闕名『神異録』）。

○發摘 摘発する。「發摘」にも作る。『後漢書』卷三八・法雄伝に「善政事、好發擿姦伏盜賊、稀發吏人、畏愛之（政事を善くし、好んで姦伏盜賊を發擿し、吏人を発すること稀にして、之を畏愛す）。『太平広記』には「發摘」がもう一例、卷三五八・神魂一「齊推女」に「又問何故不爲申理。又皆對曰、獄訟須有其主。此不見人訴、無以發摘（又た問ふ「何故に申理を為さざる」と。又た皆な對へて曰く、「獄訟には須らく其の主有るべし。此れ人の訴ふるを見ざれば、以て發摘する無し」と）」（出典は唐・牛僧孺『玄怪録』）。

○隨事 随意に。勝手に。都合のよいように。唐・白居易「慵不能」に「午後恣情寢、午時隨事餐（午後情に恣^{まか}せて寢ね、午時隨事に餐す）」（『全唐詩』卷四四五、『白氏文集』卷二二）。王鐔『唐宋筆記語辭滙釈（修訂本）』（中華書局、二〇〇一年）は「隨事」を三種に分類し、（二）の双音節形容詞としての用法について、「隨宜」「隨便」の意と説明している（二六四～二六五頁）。王氏が挙げるのは、前掲の白居易「慵不能」と『太平広記』の三例であるが、そこに『河東記』中のもう一話の例が含

まれている。10「板橋三娘子」に「季和曰、明晨發、請隨事點心（季和曰く、「明晨に發すれば、隨事に点心せんことを請ふ」と）」。

○捶撻 棒や鞭で打つ。『晉書』卷三三・樂志下に「中書令王珣與嫂婢有情、愛好甚篤。嫂捶撻婢過苦（中書令王珣嫂の婢と情有り、愛好すること甚だ篤し。嫂婢を捶撻すること過めて苦だし）」。『太平広記』にはもう一例、卷三二・神仙三「許老翁」に「小童往而復來、且囑云、大人藥不佳、欲見捶撻（小童往きて復た來り、且つ囑みて云ふ、「大人藥の佳からざるを怒り、捶撻されんと欲す」と）」（出典は前蜀・杜光庭『仙伝拾遺』）。

○準擬 手本や標準にする。のつとる。なぞらえる。晋・葛洪『抱朴子』外篇卷二五・疾謬に「其有才思者之爲之也、猶善於依因機會、準擬體例、引古喻今、言微理舉、雅而可笑、中而不傷（其れ才思有る者の之を爲すや、猶ほ機會に依因するを善くし、体例に準擬し、古を引きて今に喻へ、言は微にして理は挙がり、雅にして笑ふべく、中りて傷つけず）」。一般的な言葉であるが、『太平広記』中では、この一例のみ。

【原文】 3

十①數日、向三更、忽呼其下曰、速起、報堂前。蕭三郎來相看。可隨事具食、款待如法②、妨他忙也。二人語、歷歷可聽。

蕭三郎者、即職方郎中蕭徹。是日卒於興化里、其夕遂來。俄聞蕭呼③嘆曰、死生之理、僕不敢恨。但可異者、僕數日前、因至少陵別墅、偶題一首詩、今思之、乃是生作鬼詩。因吟曰、新構④茅齋野澗東、松楸交影足悲風。人間歲月如流水、何事頻行此路中。齊休亦悲咤曰、足下此詩、蓋是自識。僕生前忝有科名、粗亦爲人所知。死未數日、便有一無名小鬼贈一篇、殊爲著鈍⑤。然雖⑥細思之、已是落他蕪境⑦。乃詠曰、澗水濺濺⑧流不絕、芳草綿綿野花發。自去自來⑨人不知、黃昏惟有青山月。蕭亦歎羨之曰、韋四公死已多時、猶不甘此事。僕乃適來人也、遽爲遊岱之魂、何以堪處。即聞相別而去。

【訓読】 3

十數日にして、三更に向んとするに、忽ち其の下を呼びて曰く、「速やかに起きて堂前に報ぜよ。蕭三郎來りて相看んとす。隨事に食を具へ、款待すること法の如くし、他の忙を妨げん（や?）」と。二人の語、歴々として聴くべし。蕭三郎なる者は、即ち職方郎中の蕭徹なり。是の日に興化里に卒し、其の夕に遂に来る。俄かに蕭の呼嘆を聞くに曰く、「死生の理は、僕敢へて恨まず。但だ異とすべきは、僕數日前に、少陵の別墅に至るに因りて、偶たま一首の詩を題す。今之を思へば、乃ち是れ生きながらに鬼詩を作れり」と。因りて吟じて曰く、「新たに茅齋を構ふ野澗の東、松楸影を交へて悲風足れり。人間歲月流

水の如し、何事ぞ頻りに此の路中を行くは」と。齊休も亦た悲吒ひたして曰く、「足下の此の詩は、蓋し是れ自識ならん。僕生前に科名有るを忝なくし、粗ぼ亦た人の知る所と為る。死して未だ数日ならざるに、便ち一無名の小鬼の一篇を贈る有りて、殊に著鈍と為す。然雖しかれども之を細思するに、已に是れ他の蕪境かに落つ」と。乃ち詠じて曰く、「澗水濺濺として流れは絶えず、芳草綿綿として野花ひら発く。自ら去り自ら来りて人知らず、黄昏惟だ有り 青山の月」と。蕭も亦た之を歎羨して曰く、「韋四公は死して已に時多きも、猶ほ此の事に甘んぜず。僕は乃ち適来の人にして、遽かに岱に遊ぶ魂と為る。何を以てか処るに堪へんや」と。即ち相別れて去るを聞く。

【訳】 3

十数日が経ち、真夜中になろうとする頃、不意に配下の者を呼んで言った、「速やかに起きて母屋に報告せよ。蕭三郎殿が会いにおいてじや。適宜食事の用意をして、作法に従つて歓待し、粗相がないように」と。その後、二人の会話は、はつきりと聴くことができた。蕭三郎というのは、職方郎中の蕭徹のことである。この日に興化里で亡くなり、その夜にやって来たのであった。にわかには語られる蕭の嘆きを聞いたところ、彼は言った、「死生の道理については、私は敢えて恨もうとは思わない。ただ不思議なのは、数日前に少陵にある別荘に出かけ、偶々詩を

一首作つたのだが、いま思うと、なんと生前に鬼詩を作つていたことになる」と。そこで吟じていうには、

新たに茅斎を構えたのは 野の溪谷の東

松と楸ひさぎは樹影を交え 悲しげに鳴る風が吹きつる

人の世の歳月は 流れる水のように過ぎ去つてゆくが

どうしたことであらう しきりにこの路を行く人影は

と。齊休もまた悲しみ嘆いて言った、「貴君のこの詩は、思うに自作の詩識であらう。私は生前に科挙登第の功名を忝なくし、いささか人に知られる身となった。亡くなって数日と経たないうちに、一人の名もない幽鬼が一篇を贈り届けてきたのだが、殊に拙劣に思われた。しかしながら仔細に思いめぐらしてみると、すでにその荒涼とした意境に陥ってしまったようだ」と。そこで詠じて言った、

谷川の水はさらさらと絶えることなく

香しい草は長く連なり野の花が咲き誇る

自ら流れ去り自ら時を迎えて知る人もなく

黄昏 ただ有るのは 青い山の端の月

と。蕭もまたこれを嘆賞して言った、「韋四公よ、あなたは亡くなってすでに時を経ているのに、それでもこのことに甘んじておられない。私はやって来たばかりの人間で、いきなり泰山に遊ぶ魂となつてしまったのです。どうしてここに居ることに堪

えられましょう」と。そしてすぐに分かれ去ってゆく物音が聞こえた。

【校記】 3

①「十」、会校本校記に「沈本作「後」とある。伝奇輯校本校記も同じ。

②「款待如法」、会校本は「勿得怠緩」に作り、校記に「原作「款待如法」。現據沈本改」という。伝奇輯校本は「款待如法」に作り、校記に「明鈔本作「勿得怠緩」、『會校』據改」という。

③「呼」、会校本は「嗟」に作り、校記に「原作「呼」。現據沈本改」という。伝奇輯校本は「呼」に作り、校記に「明鈔本作「嗟」、『會校』據改」という。

④「搆」、会校本校記に「孫本・沈本作「御名」。本爲避南宋高宗名諱（構）」とある。伝奇輯校本校記には「唐人絶句・別墅偶題」作「作」、當避高宗趙構諱改」とある。

⑤「著鈍」、会校本校記に「鈍 孫本作「純」とある。伝奇輯校本校記には「『太平廣記鈔』卷五七（脱出處）「著」作「真」。孫校本「鈍」作「純」。按、鈍、質樸」とある。

⑥「然雖」、会校本校記に「雖 沈本作「惟」とある。伝奇輯校本校記には「『四庫』本改作「雖然」とあり、按語に「然雖、義同「雖然」として、『晋書』卷三六・衛恒伝および『宋書』卷九三・隱逸・陶潜伝の用例を引く。会校本には四庫本

についての言及なし。

⑦「落他蕪境」、会校本校記に「蕪 孫本作「物」。沈本作「無」とある。伝奇輯校本は孫本に従って「落他物境」に改め、按語に「落他物境、謂詩意超然物外。落、脱離」という。

⑧「濺濺」、会校本は「潺湲」に作り、校記に「原作「濺濺」。現據沈本改」という。伝奇輯校本は「濺濺」に作り、按語に「濺濺、流水聲。「濺」音「尖」として、『樂府詩集』卷二五「木蘭詩」の用例を引く。

⑨「去自來」、会校本校記に「沈本作「來自去」とある。伝奇輯校本校記も同じ。また按語に張説『宣室志』卷六所載の鬼詩との類似を指摘する。

【注】 3

○其下 その部下。配下の者。「下」を部下、手下の意味に用いる例も一般的で、『河東記』では06「呂群」に「其下且欲害之（其の下且に之を害せんと欲す）。また17「韋浦」にも、「某於其下丐茶酒直、遂有言語相及（某は其の下に於いて茶酒の直を丐ひ、遂に言語の相及ぶ有り）」と見える。『河東記』訳注稿（六）（『名古屋大学中国語学文学論集』第三輯、二〇一九年）の「韋浦」では、「私は判官様のもとで酒代をせびり、あげくに口論にまでなつてしまいました」と訳した（四〇頁上）が、この「其下」も部下の意味に取るべきだったかもしれない。

○堂前 母屋の前。表向きの大広間。常用の語で『太平広記』にも頻見されるが、『河東記』ではこの一例のみ。

○蕭三郎 後文に言う蕭徹のこと。「三郎」の「三」は排行、排行のあとの「郎」は、同輩（排行を同じくする世代）の親族ないし同僚や目下の者に対する呼称（李斌城ほか『隋唐五代社会生活史』中国社会科学出版社、一九九八年、五五一頁）。また牛志平・姚兆女『唐人称谓』は、男子に対する尊称と説明する（六九頁）。

○來相看 会いにやってくる。これも一般的な言い方で、『太平広記』では卷三七・神仙三七「楊越公弟」に「吾亦知汝過此、故來相看（吾も亦た汝が此に過るを知り、故に來りて相看る）」（出典は唐・盧肇『逸史』）とあるのを始めとして、他に四例。

○具食 食事を備える。食事の支度をする。常用の語で、『太平広記』にも二十例ほど。

○款待 真心をこめてもてなす。款待。『太平広記』にはもう一例、卷二六六・輕薄二「韋薛輕高氏」に「高氏以貴公子任行軍司馬、常以歌筵酒饌款待數公。日常宴聚、求取無恆、皆優待之（高氏 貴公子を以て行軍司馬に任ぜられ、常に歌筵酒饌を以て數公を款待す。日々常に宴聚し、求取 恒無く、皆之を優待す）」とある（出典は五代十国・荊南・孫光憲『北夢瑣言』）。

○如法 きまり通りである。作法通りである。『太平広記』の卷

八四・異人四「盧鈞」に「會宴處即大如法。此尤不易張陳（會宴の処は即ち大いに法の如くし、此れ尤も張陳し易からず）」（出典は五代・王定保『摭言』、卷三三九・鬼二四「閻敬立」に「良久、盤筵至、食精、敬立與俶同飧、甚飽。畜僕等皆如法（良久、盤筵至、食精、敬立と俶と共に食し、甚だ飽く。畜僕等は皆な法の如し）」、「敬立命駕欲發、俶又具饌、亦如法（敬立駕を命じて發せんと欲するや、俶又た饌を具ふるに、亦た法の如し）」（出典は唐・鄭還古『博異記』）などであるのは、いずれも饗応の場面で、これと似る。

○妨他忙也 未詳。蕭三郎に対する接待に粗相がないように、といった文脈で語られているのであろうが、正確な意味の把握が難しい。「他の忙しきを妨げんや」と訓読し、「彼の多忙な身を妨げるようなことがあるか（そうしないように）」「お忙しい身のお邪魔にならぬように」の意味に取ってみたが、「……也」は通常反語とは見做しにくく、疑問が残る。反語ではなく、「彼の多忙を妨げる」「多忙な身の彼に枉げて接待を受けてもらう」の意味で考えてみてもやはり落ち着かず、「妨忙」「妨……忙」の参考になる用例も見当たらない。現代中国語訳は、いずれも反語とは見做していないようであるが、北京燕山本が「不讓他過于忙碌（彼をせわしなくさせ過ぎないように）」、天津古籍本が「以防彼着急（彼が焦り苛立つのを防げ）」、河北教育本が「免

得忙乱(ごたごたしないで済むように)」と様々で定解を得ない。待考。

なお『太平広記』卷三七・神仙三七「楊越公弟」(出典は唐・盧肇『逸史』)には、「良久曰、且去、妨汝行役」と似た一文が見える。ただこれは「良や久しくして曰く、『且つ去れ、汝が行役を妨げん』と」と読んで、「さあ出かけられよ、(ぐずぐずしていては)あなたの旅を妨げることになるうから」の意味に取るべきと思われ、この「妨他忙」とは用いられ方が異なる。

○**歴歴可聴** はつきりと聞くことができた。「歴歴」は、はつきりしているさま。常用の四字句で、『太平広記』においても他に三例。うち本話と同じ鬼部では、卷三三五・鬼二〇「陳希烈」に「陳希烈爲相、家有鬼焉。或詠詩、或歌呼、聲甚微細激切、而歴歴可聴(陳希烈相と爲るに、家に鬼有り。或いは詩を詠じ、或いは歌ひ呼ばはり、声は甚だ微細激切なるも、歴歴として聴くべし)」(出典は唐・牛肅『紀聞』)。

○**職方郎中** 官名。職方は、唐代には兵部の下に置かれた部局で、天下の地図を掌った。郎中一名を筆頭に、員外郎一名、主事二名で構成される。

○**蕭徹** 『唐五代人物伝記資料総合索引』には、名前が見えない。『唐五代五十二種筆記小説人名索引』は、本話を挙げるのみ。『新旧唐書人名索引』によれば、『旧唐書』卷一七上・敬宗本紀

の宝暦元年(八二五)四月の条に、御史の蕭徹の名が見える。同じ記事が、同書卷一六三・崔元略伝には「蕭徹」として載るが、恐らくこの人物であろう。ただ二つの記事はいずれも、御史であつた彼が京兆尹の崔元略を弾劾したというもので、職方郎中に関わる記載はない。

○**興化里** 長安の皇城の南に位置する坊里。朱雀門街西第二街の街西、北より第三坊。張永祿主編『唐代長安詞典』(西安地方志叢書・陝西人民出版社、一九九〇年)「興化坊」が職方郎中蕭徹の宅があつたと記す(二六八頁)のは、本話に基づくものである。『太平広記』では本話に見えるのみ。

○**呼嘆** 声をあげて嘆く。呼歎。稀見の語であるが、『太平広記』にもう一例。卷六三・女仙人「玉女」に「及其玉女投小石、水芝果出、行達乃攀取。玉女遠在山巖、或棲樹杪。既在採去、則呼歎而還(其の玉女の小石を投ずるに及び、水芝果たして出づれば、行達は乃ち攀取す。玉女は遠く山巖に在り、或いは樹杪に棲む。既に採去するに在れば、則ち呼歎して還る)」(出典は唐・薛用弱『集異記』)。また唐・歐陽詹「大唐故輔國大將軍兼左驍衛將軍御史中丞馬公墓誌銘」に「當時俊傑懷材抱器者、無不驚呼嘆息(当時の俊傑の材を懷き器を抱く者は、驚呼し嘆息せざるは無し)」(『全唐文』卷五九八)とある。この「驚呼嘆息」を二字に縮めたものか。なお【校記】3—③に示したように、

会校本は沈本によつて「嗟嘆」に改めるが、沈本がもとの「呼嘆」を常見の語「嗟嘆」に改めた可能性を考慮していない。あるいはまた魯魚の誤りとすれば、字形の相似からして「吁嘆」の誤記と見るべきではないだろうか。「吁嘆」は、歎息する、悲しみ嘆く。「呼嘆」よりも一般的で、『太平広記』にも卷三四・相四「劉禹錫」の「僧不得已、吁嘆良久（僧已むを得ず、吁嘆すること良や久し）」（出典は唐・張固『幽閑鼓吹』）を始めとして三例が見える。（ただし、『太平広記』諸本の中に本話の「呼嘆」を「吁嘆」に作るものはない。）

○**死生之理** 死と生についての道理。唐・李商隱「代僕射漢陽公遺表」に「省知變化之端、^{（まひ）}羸識死生之理（省らかに知る變化の端、粗ぼ識る死生の理）」（『全唐文』卷七七二、『李義山文集箋註』卷二）。また前蜀・杜光庭「玉函經序」に「醫門廣博、脈理元微。凡稱診脈之流、多昧死生之理（医門は広博にして、脈理は元微なり。凡そ診脈の流と称するは、多く死生の理に昧し）」（『全唐文』卷九三二）。

○**少陵** 地名。唐の長安城（西安市）の東南、杜陵の南に位置する。少陵は、もと漢の宣帝の許后を葬った陵の名。杜陵に比べてやや小さいところから言う。杜少陵、すなわち杜甫がこの地に居を構えたことでも知られる。『太平広記』には他に二例。卷九四・異僧八「儀光禪師」に「開元二十三年六月二十三日、

無疾而終。……遺命葬於少陵原之南面（開元二十三年六月二十三日、疾無くして終はる。……遺命にて少陵原の南面に葬らる）」（出典は唐・牛肅『紀聞』、卷一四三・徵応九・人臣咎徴「楊慎矜」に「唐楊慎矜、隋室之後。其父崇禮、太府卿、葬少陵原（唐の楊慎矜は、隋室の後なり。其の父の崇礼は、太府卿たりて、少陵原に葬らる）」（出典は唐・鄭処誨『明皇雜錄』）とあり、いずれも陵墓の地として描かれている。

○**別墅** 別荘。別宅。『太平広記』中にも頻見される。

○**鬼詩** 幽鬼の制作した詩。『太平広記』にはもう一例、卷三三一・鬼一六「劉洪」に「洪初得鬼詩、思不可解（洪初め鬼の詩を得て、思ひ解すべからず）」（出典は唐・牛肅『紀聞』）。鬼詩については【参考】「鬼詩」を参照。

○**新構茅齋** 新たに茅葺きの家をたてる。「構」は、かまえる、建物を造る。「構」に通じる。「構」に作るのは、【校記】3④に触れたように南宋の高宗の諱を避けたため。宋・洪邁『万首唐人絶句』卷六六は「別墅偶題」と題して本詩を収録するが、起句については、「新作茅齋野澗東」と「作」に作る。王彦坤編著『歷代避諱字彙典』（中華書局、二〇〇九年）に、「構」に関する詳しい解説がある（七〇頁）。「茅齋」は、茅葺きの粗末な部屋。また、その家。『太平広記』中にも散見される。陳・徐陵「山齋詩」に「竹徑蒙籠巧、茅齋結構新（竹徑 蒙籠巧みに、茅

斎結構新たなり」(『先秦漢魏晉南北朝詩』陳詩卷五、『徐孝穆集箋注』卷二)。なお、この詩は『全唐詩』卷八六五・鬼部に、蕭微「題少陵別墅」として収められている。(蕭微は蕭徹の誤りであろう。『万首唐人絶句』も作者名を蕭微とする。)七言近体の絶句で平仄も整っており、押韻は「東」「風」「中」の上平声東第一。

○野澗 野を流れる谷川。意外に用例が少なく、唐代以前には他に見当たらない。『全唐詩』もこの詩に見える一例のみ。時代を降って北宋の馮山に「野澗」と題する五言律詩がある(『安岳集』卷八)。

○松楸 「楸」は、きささげ、ひさぎ。落葉高木。松も楸も墓地に植えられた。『旧唐書』卷一七八・王徽伝に「以父罹非禍、泣守松楸十餘年(父の非禍に罹りしを以て、泣きて松楸を守ること十余年)」。また宋・莊綽『雞肋編』卷中に「雖佳花美竹、墳墓之松楸、歲月之間、盡成赤地(佳花美竹、墳墓の松楸と雖も、歲月の間に、尽く赤地と成る)」。

○交影 影を交差させる。唐・段成式「折楊柳七首」其一に「枝枝交影鎖長門、嫩色曾沾雨露恩(枝枝 影を交へて長門を鎖し、嫩色 曾て沾ふ 雨露の恩)」(『全唐詩』卷五八四、注記に「此編一作王貞白詩」とある。また卷七〇一には王貞白「折楊柳三首」として七首のうちの第一・二・三首を収録、題下に「一作

段成式詩」と注記する)。

○悲風 もの悲しい音を響かせて吹く風。また冷たい秋風。「古詩十九首」其一二に「白楊多悲風、蕭蕭愁殺人(白楊 悲風多く、蕭蕭として人を愁殺す)」(『文選』卷二九)。多用される詩語で、『太平広記』卷三三八・鬼三「武丘寺」に見える鬼詩にも、「高松多悲風、蕭蕭清且哀(高松 悲風多く、蕭蕭として清く且つ哀し)」(出典は唐・陳邵『通幽記』)。

○人間歲月如流水 人の世の歲月は流れる水のように過ぎ去る。「人間」は人間世界、世間。この句は、唐・岑参「客舍悲秋有懷兩省舊遊呈幕中諸公」の「人間歲月如流水、客舍秋風今又起(人間歲月流水のごとく、客舍秋風今又た起る)」の一句をそのまま借りている(『全唐詩』卷一九九、『岑嘉州集』卷二)。

○頻行此路中 この道をしきりに通りゆく人影がある。前注に述べたように、陵墓の地でもある少陵を頻繁に行くということであれば、その人影は墓参の者、あるいは死者自身の魂であろう。

○悲吒 かなしみ嘆く。「悲吒」とも。「吒(吒)」は、慨嘆する。晋・郭璞「遊仙詩七首」其四に「臨川哀年邁、撫心獨悲吒(川に臨みて年の邁くを哀しみ、心を撫ちて独り悲吒するのみ)」とあり(『文選』卷二二)、唐・李善注に「吒、歎聲也。楚辭曰、憂不暇兮寢食、吒增歎兮如雷(吒は、歎聲なり。楚辭に曰く、

「憂ひて寢食に暇あらず、吒なげきて歎ためいきを増すこと雷の如し」という。唐・元結「隴上歎」に「延望戎狄郷、巡廻復悲吒（戎狄の郷を延望し、巡廻し復た悲吒す）」（『全唐詩』卷二四〇、『元次山文集』卷三）。また唐・杜甫「遣興五首」其五に「每望東南雲、令人幾悲吒（東南の雲を望む毎に、人をして幾たびか悲吒せしむ）」とある（『全唐詩』卷二一八、『杜詩詳註』卷七）。『太平広記』ではこの一例のみ。

○自識 自作の詩が図らずも自らの運命の予言となることをいう。「識」は予言。『太平広記』卷一四三・微応九・人臣咎徴「崔曙」に「唐崔曙舉進士、作明堂火珠詩贖帖。曰、夜來雙月滿、曙後一星孤。當時以爲警句、及來年曙卒、唯一女名星星。人始悟其自識也（唐の崔曙進士に挙げられ、明堂火珠の詩を作りて贖帖す。曰く、「夜來双月滿ち、曙後一星孤なり」と。当時以て警句と為すも、來年に及びて曙卒し、唯だ一女のみにして名は星星たり。人始めて其の自識たるを悟る）」（出典は唐・孟棻『本事詩』。なお「識」については、『河東記』訳注稿（六）」（『名古屋大学中国語学文学論集』第三二輯、二〇一九年）の「呂群」の【参考】を参照（一九頁下〜二二頁上）。

○忝有科名 科挙合格者の名譽をかたじけなくする。『太平広記』では、卷一八一・貢挙四「李肱」に「常年宗正寺解送人、恐有浮薄、以忝科名（常年宗正寺の解送の人に、浮薄にして、以て

科名を忝くする有るを恐る）」（出典は唐・范攄『雲溪友議』。「科名」は、科挙合格者としての名譽、名声。『河東記』では他に18「鄭馴」に見える。

○爲人所知 人に知られる。成句的な表現で『太平広記』にも五例。

○小鬼 死者の身分の低い者。つまりぬ幽鬼。『太平広記』中にも二十例近く。

○著鈍 にぶい、拙劣である、の意であろう。入矢・古賀『禪語辞典』は「ぼける。ボサツとしている」と解説し、用例として南唐の靜・筠編『祖堂集』卷八・雲居道膺章の「若向這裏不得、萬劫千生著鈍（若し這裏に向いて得ずんば、万劫千生に著鈍たらん）」を引く（三〇六頁）。『太平広記』中にはこの一例のみ。唐・顧況「杜秀才畫立走水牛歌」に「淺草平田擦過時、大蟲「作」著鈍幾落井（淺草平田擦過の時、大虫は著鈍にして幾んど井に落ちんとす）」の句が見られる（『全唐詩』卷二六五）。

○然雖 雖然に同じ。伝奇輯校本が指摘するように【校記】3

―⑥参照）、『晋書』卷三六・衛恒伝に「河間張超亦有名、然雖與崔氏同州、不如伯英之得其法也（河間の張超も亦た名有り、崔氏と州を同じうすと然雖も、伯英の其の法を得るに如かざるなり）」、『宋書』卷九三・隱逸・陶潛伝に「然雖不同生、當思四海皆弟兄之義（生を同じうせざると然雖も、當に四海は皆な弟

兄の義を思ふべし」。入矢・古賀『禪語辞典』は「……ではあるけれども、『雖然』というのと同じ」と解説し、宋・道原編『景德伝灯録』巻二五の用例を引く。訓読は「……と然雖も」(二六一頁)。「河東記」では04「葉靜能」に「然雖侏儒、亦有過人者(侏儒と然雖も、亦た人に過ぐる者有り)」とある。

○細思 仔細に考える。白居易「論于頔裴均狀」に「臣細思之、有三不可(臣之を細思するに、三つの可ならざる有り)」(『全唐文』卷六六七、『白氏文集』卷五八)。「太平広記」では、この一例のみ。

○蕪境 荒れ果てた場所。あるいは、荒涼とした境地の意か。『太平広記』は、この一例のみ。なお、【校記】3―⑦に指摘したように、伝奇輯校本は孫本に従って「落他物境」に改め、詩の意境が物外に超然としているの意味に取る。拙劣と想っていた一篇が佳作だったことに気付いたという文意になって通りもよいが、些か望文生義の感もある。一先ず諸訳書の解釈に従っておく。ただ、「蕪境」の用例は他に全く見当たらず、不安が残る。待考。

○澗水 谷川の水。唐・劉禹錫「雨二十韻」に「重城肅穆閉、澗水潺湲時(重城 肅穆として閉ざす、澗水 潺湲の時)」(『全唐詩』卷三五五、『劉賓客文集』卷三三)。なお、『太平広記』が「韋齊休」と同じ卷三四八に収める「唐燕士」(出典は『宣室志』

にも、白衣の幽鬼が詠う詩として、次の七言絶句が見える。「澗水潺湲聲不絶、溪壠茫茫野花發。自去自來人不歸、長時唯對空山月(澗水 潺湲として 声は絶へず、溪壠 茫茫として 野花 発く。自ら去り自ら来りて 人は帰らず、長時 唯だ對す 空山の月)」。『全唐詩』卷八六六・鬼部は、九華山白衣の「吟」として、『宣室志』から詩を引き、注に「河東記、無名小鬼贈韋齊休詩、與此正同。云……」と付記して、本話の七絶を紹介している。これについては、錢鍾書「太平広記一二五則」の「二五三卷三四八・唐燕士」にすでに指摘がある『管錐篇』中華書局、一九七九年、第二冊七八八頁)。「宣室志」は唐の張說(八三四～八八六?)の撰。成立は咸通年間(八六〇～八七四)の四年よりも後と推定され、『河東記』より遅いと考えられる。李劍国『唐五代志怪伝奇叙録(増訂本)』(南開大学出版社、二〇一七年)の『宣室志』の項を参照(中冊一〇二三～一〇二四頁)。

また『全唐詩』卷七八四には、華山老人「月夜」と題して、極めてよく似た次のような一首が収められている。「澗水泠泠聲不絶、溪流茫茫野花發。自去自來人不知、歸時常對空山月(澗水 泠泠として 声は絶えず、溪流 茫茫として 野花 発く。自ら去り自ら来りて 人は知らず、歸時 常に對す 空山の月)。作者及び作品の出所いずれも不明であるが、本話および「唐燕士」の七絶と関わりを持つことは明らかであろう。これら類似する三首の

先後関係については、【参考】を参照。

○濺濺 水が速く流れるさま。また水のさらさらと流れる音。

古楽府「木蘭詩二首」其一に「不聞爺嬢喚女聲、但聞黃河流水鳴濺濺（聞かず爺嬢の女を喚ぶの声、但だ聞く黄河の流水の鳴ること濺濺たるを）」（『樂府詩集』卷二五・横吹曲辞五）。また

唐・白居易「引泉」に「誰教明月下、爲我聲濺濺（誰か明月の下をして、我が為に声濺濺たらしめん）」（『全唐詩』卷四四五・『白氏文集』卷二二）。

○芳草綿綿 「芳草」は、香りのよい草花。早く『楚辞』の「離騷」に見える詩語。「綿綿」は、細長くつづく。つらなる。唐・虚中「芳草」に「綿綿芳草緑、何處動深思（綿綿として芳草緑なり、何処にか深思を動かさん）」（『全唐詩』卷八四八）。

○野花 野に咲く花。唐・李冶「寄朱放」に「鬱鬱山木榮、綿綿野花發（鬱鬱として山木榮へ、綿綿として野花発く）」（『全唐詩』卷八〇五）。

○自去自來 水はおのずから流れ去り、時節はおのずから（花咲く春へと）廻り来る。唐・杜甫「江村」に「自去自來堂上燕、相親相近水中鷗（自ら去り自ら来る堂上の燕、相親しみ相近づく水中の鷗）」（『全唐詩』卷二二六・『杜詩詳註』卷七）。また唐・許渾「守風淮陰」に「潭明月萬株柳、自去自來人不知（潭の明月万株の柳、自ら去り自ら来りて人は知らず）」（『全唐

詩』卷五三八）。

○黄昏 たそがれ。唐・劉希夷「代悲白頭翁」の「但看古來歌舞地、惟有黃昏鳥雀悲（但だ看る古來歌舞の地、惟だ黄昏鳥雀の悲しむ有るのみなるを）」（『全唐詩』卷八二）など、常用の語。

○青山月 唐・李白「遊太山六首」其六に「獨抱綠綺琴、夜行青山月（独り抱く緑綺の琴、夜に行く青山の月）」（『李太白文集』卷一六、ただし『全唐詩』卷一七九では「青山間」に作る）。また唐・皎然「酬李司直縱諸公冬日遊妙喜寺題照昱上人房寄長城潘丞述（李司直縱の「諸公冬日に妙喜寺に遊び、照昱上人の房に題して長城の潘丞述に寄す」に酬ゆ）」に「心境寒草花、空門青山月（心境寒草の花、空門青山の月）」（『全唐詩』卷八一五）。

○歎羨 心に感じ羨む。嘆美する。嵇康「聲無哀樂論」に「秦聲則歎羨而慷慨、理齊楚則情一而思專（秦声を奏すれば則ち歎羨して慷慨し、齊楚を理むれば則ち情は一にして思ひは専らなり）」（『全三国文』魏・卷四九・『嵇中散集』卷五）。また唐・白居易「青氈帳二十韻」に「貧僧應歎羨、寒士定留連（貧僧は応に歎羨すべく、寒士は定めて留連せん）」（『全唐詩』卷四五四・『白氏文集』卷三二）。『太平広記』中にも他に二例。

○韋四公 韋齊休をさす。彼の排行が四であったことが分かる。

○適來 たまたまやつて来た、ちょうどやつて来たばかり。「適」は、「まさに、ちょうど、たつた今」あるいは「偶然、たまたま」の意をあらわす副詞。また「適來」二字で副詞として用いられ、今しがた、先ほどの意味にもなるが、ここは一字で動詞「來」にかかる。『河東記』では他に02「蕭洞玄」に「須臾、又見群仙。自稱王喬、安期等、謂曰、適來上帝使左右問爾所謂、何得不對（須臾にして、また群仙を見る。自ら王喬、安期等と称し、謂ひて曰く、「適來、上帝左右をして爾の謂ふ所を問はしむるに、何ぞ對へざるを得んや」と）」とあり、これは二字の副詞としての用法。

○遊岱之魂 死者の魂。「岱」は、泰山の別称。五岳の一つである泰山は、古来山岳信仰の対象であり、秦始皇帝以来、歴代の天子はここで封禪（天地を祭る儀式）を行った。地を祭る儀式は、やがて地下・死霊・冥界の觀念と結びつき、死者の靈が集まる場所と考えられた。またインド仏教の地獄の影響を受けて泰山地獄の説も流布し、泰山府君や東嶽大帝の伝説、信仰を生んだ。シャヴァンヌ著、菊池章太訳『泰山 中国人の信仰』（勉誠出版、二〇〇一年）、澤田瑞穂「泰山信仰」『修訂地獄変』平河出版社、一九九一年に、補篇二として収録／初出は講談社出版研究所編『世界の聖域・別巻1 中国の泰山』講談社、一九八二年）が詳しい。白居易「得。景嫁殤。鄰人告違禁。景不伏（得

たり。景は殤を嫁がしむ。隣人禁に違ふを告ふるも、景は伏さず）」判に「雖有遊岱之魂、焉能事鬼（岱に遊ぶの魂有りと雖も、焉くんぞ能く鬼に事へんや）」（『全唐文』卷六七二、『白氏文集』卷六六）。「遊岱之魂」四字句の用例は少なく、『太平広記』ではこの一例のみ。また全て「遊岱」であつて「遊泰之魂」の例は無い。「遊魂」の語は早く『易』の繫辭伝上に見え、唐詩では例えば杜甫「哀江頭」に「明眸皓齒今何在、血汚遊魂歸不得（明眸皓齒今何くにか在る、血汚の遊魂歸り得ず）」とある（『全唐詩』卷二一六、『杜詩詳註』卷四）。『河東記』においても16「韓弇」に「每至秦隴頭、遊魂自嗚咽（秦隴の頭に至る毎に、遊魂自ら嗚咽す）」と見える。

なお、宋・陸游『老学庵筆記』卷一〇に「楊文公云、豈期遊岱之魂、遂協生桑之夢。世以其年四十八、故稱其用生桑之夢爲切當、不知遊岱之魂出河東記韋齊休事、亦全句也（楊文公云ふ、「豈に期せんや遊岱の魂、遂に生桑の夢に協はんとは」と。世其の年の四十八なるを以て、故に其の「生桑の夢」を用ゐることの切當爲るを称するも、「遊岱の魂」の『河東記』韋齊休の事に出で、亦た全句なるを知らざるなり）」とあつて、この詩を話題にしている。楊文公は宋の楊億をいうが、宋・王銍『四六話』卷下では、王禹偁（字は元之、一〇〇一年没）の臨終の遺表に見える語として紹介されている。（清・藩永因『宋稗類鈔』卷二

一・詞品第三四も同じ。）

【原文】 4

又數日、亭午間、呼曰、裴二十一郎來慰^①、可具食。我自迎去。其日、裴氏昆季果來、至啓夏門外、瘁^②然神聳。又素聞其事、遂不敢行弔而回。裴即長安縣令、名觀、齊休之^③妻兄也。其部曲子弟、動即罪責、不堪其懼。及今未已、不知竟如之何。出河東記^④。

【訓読】 4

又た數日にして、亭午の間に、呼びて曰く、「裴二十一郎來慰せん。食を具ふべし。我は自ら迎去せん」と。其の日、裴氏の昆季 果たして來たる。啓夏門外に至り、瘁^{すいぜん}然として神聳^{おのの}く。又た素と其の事を聞けば、遂に敢へて弔を行はずして回る。裴は即ち長安の県令にして、名は觀、齊休の妻の兄なり。其の部曲・子弟は、動もすれば即ち罪責され、其の懼に堪へず。今に及ぶも未だ已まらずして、竟に之を如何にすべきかを知らず。河東記に出づ。

【訳】 4

また數日して、正午に呼んで言った、「裴二十一郎殿がお越しになる。食事の用意じゃ。私がお出迎えに参ろう」と。その日、裴氏の兄弟が果たしてやって來た。啓夏門の外にまでやって來

ると、何やらぐったりして恐怖に駆られた。また、もともとその事を聞き及んでいたので、敢えて弔問を行わずに踵を返した。裴は長安の県令で名は觀、齊休の妻の兄である。彼の使用人や子弟は、ややもすれば罪責されるので恐懼に堪えず、今になってもまだ止むことがなく、どうしたものやら途方に暮れている。『河東記』に出る。

【校記】 4

①「來慰」、会校本は「來相慰」に作り、校記に「相 原無此字。現據孫本・沈本補」という。伝奇輯校本は「來慰」に作り、校記なし。

②「瘁」、会校本校記に「沈本作「瘁」とある。伝奇輯校本校記も同じ。

③「之」、会校本校記に「孫本・沈本無此字」とある。

④「河東記」、会校本は「河東記志」に作り（底本は談愷第三次印本）、校記に「當作「河東記」という。許本には出典記載なし。黄本・四庫本は「河東記志」、筆記本は「河東記」。

【注】 4

○亭午間 正午の頃。真昼時。「亭午」、「亭」はちょうど、ぴつたりの意で、正午。常用の語で、『太平広記』にも「亭午」「亭午間」「亭午之際」「亭午時」などの用例が見える。

○裴二十一郎 後文に見える裴觀のこと。「二十一」は排行。排

行のあとの「郎」については、【注】3の「蕭三郎」を参照。

○**來慰** 慰問にやってくる。見舞いにやってくる。『太平広記』にはもう一例、卷二七八・夢三・夢休徴下「盧貞猶子」に「一夕、夢爲僧時所奉師來慰（一夕、僧爲りし時に奉ぜし所の師の來慰するを夢む）」（出典は唐・張讀『宣室志』）。

○**迎去** 出迎えて連れて行く。あるいは出迎えに行く。ここは後者の意味で、「去」は動詞の後につく助詞であろう。『太平広記』ではこの一例のみ。漢・劉向『列仙伝』卷下「木羽」に「所探兒生年十五、夜有車馬來迎去（探る所の兒生年十五にして、夜に車馬の来り迎去せんとする有り）」とあるが、これは前者の用例。

○**昆季** 兄弟。「昆」は兄、「季」は末っ子。牛志平・姚兆女『唐人称谓』一四〇頁。常用の語で、『太平広記』にも八例。

○**啓夏門** 長安城南面の三門のうち東側に位置する門。『太平広記』では他に四話に見える。

○**瘁然** 疲れやつれたさま。苦しいさま。『太平広記』にはもう一例、卷三一〇・神二〇「卻元位」に「元位瘁然汗發、髀戰心慄、不覺墮馬（元位瘁然として汗発し、髀戦き心慄れて、覺えず馬より墮つ）」（出典は唐・張讀『宣室志（宣室記）』）。なお、沈本の「猝然」であれば「突然、にわかに」の意。

○**神聳** 心がおののく。「聳」は、そびえる、恐れおののく。こ

こは後者の意味。『太平広記』にはもう一例、卷一九七・神七「丹丘子」に「然而道德玄遠、貌若氷壺。睹其儀而心駭神聳、至則伏謁於苦宇之下（然れども道德玄遠にして、貌は氷壺の若し。其の儀を睹ては心駭き神聳れ、至れば則ち伏して苦宇の下に謁す）」（出典は闕名『陸用神告録』）。

○**行弔** 弔いにでかける。弔問する。『礼記』檀弓下に「行弔之日、不飲酒食肉焉（弔ひを行ふの日には、飲酒食肉せず）」とある。『太平広記』にはもう一例、卷一七三・俊弁一「朱淹」に「李彪行弔之時、齊之君臣、皆以鳴玉盈廷、朱紫照日（李彪弔ひを行ふの時、齊の君臣は、皆な鳴玉を以て廷に盈ち、朱紫日に照る）」とある（出典は隋・楊松玠『談藪』）。

○**裴即長安縣令、名觀** 裴は長安の県令で、名は觀という。「縣令」は、県の長官。裴觀について『唐五代人物伝記資料総合索引』が示す資料は、『新唐書』卷七一上・宰相世系表、『唐郎官石柱題名考』卷一一、『唐御史台精舍題名考』の三件。また『新唐書人名索引』は、『新唐書』宰相世系表の他に同書卷二二八・許景先伝を挙げる。しかし、この裴觀は玄宗開元の頃の人物で、別人。『唐五代五十二種筆記小説人名索引』は、本話を挙げるのみ。

○**部曲** 家僕、使用人。『漢語大詞典』によれば、もとは『史記』卷一一七・司馬相如列伝などに見えるように軍隊の編制單位の

ことであり、転じて軍隊を指し、さらに豪族私人の軍隊、あるいは部下の意味に用いられた(第一〇巻六五二頁)。牛志平・姚兆女『唐人称谓』は、『唐律疏議』卷一七に「奴婢、部曲身系於主(奴婢、部曲の身は主に系^かかる)」、卷二三(卷二〇とするのは誤記)に「部曲、奴婢、是爲家僕(部曲、奴婢は、是れ家僕爲り)」とあるのを引き、「部曲本爲軍隊編制及私兵之称、後又爲家僕之称。唐以後無此称」と解説する(一〇五頁)。唐代では、軍隊の編制単位あるいは私兵の意味から、さらに家僕の呼称として用いられていたことが分かる。唐代の部曲については、松

丸道雄・池田温ほか編『中国史2「三国」唐』(世界歴史大系・山川出版社、一九九六年)の第五章に詳しい。それによれば、隋唐時代には良民・賤民から成る身分制があり、賤民は私家に属する私賤民と官に属する官賤民に別れていた。前者には奴婢(私奴婢)・部曲・客女があつて主人に隷属した。このうち部曲と客女は財産権も一部認められ、最も隷属度の高い私奴婢に対して上級の位置にあつた(2 唐代前期の国制と社会経済、「良賤制」一九七〜一九九頁)。『太平広記』では計一〇話に見えるが、六朝以前の話が多く、隋唐期のものは本話の他には三話のみ。うち「古鏡記」として知られる卷二三〇・器玩二「王度」には「度家有奴曰豹生年七十矣。本蘇氏部曲、頗涉史傳、略解屬文(度の家に奴の豹生と曰ふ有りて年は七十なり。本と蘇氏

の部曲にして、頗^{いさ}か史伝に涉り、略^はぼ文を属^{つづ}るを解^よくす)」とある(出典は唐・陳翰『異聞集』。読み書きの知識を持つこうした部曲もいたようである。なお『河東記』訳注稿(一)、『名古屋大学中国語学文学論集』第二七輯、二〇一四年)において本話のこの一節を引用した際、「部曲」を「部下」としたのは誤りであつた(二四頁)。再度訂正する。

○子弟 子や甥の世代の若者。牛志平・姚兆女『唐人称谓』は『唐語林』卷一の用例を引いて、「子弟、指年輕の一輩、又猶言子侄、或弟子・学生」と解説する(二二〇頁)。常用の語で、『河東記』では他に二例、27「許琛」に「琛即訴曰、某父兄弟、少小皆在使院、執行文案。實不業取鴉(琛即ち訴へて曰く、「某の父兄弟は、少小より皆な使院に在り、文案を執行すれば、実に鴉を取るを業とせず」と)、28「崔紹」に「大王問紹、公是誰家子弟(大王紹に問ふ、「公は是れ誰^{いづれ}家の子弟ぞ」と)。

○罪責 刑罰。罪を犯した責任。ここは動詞として用いられており、刑罰を加え責める。常用の語であるが、『太平広記』では他に二例のみ。うち卷三四八・鬼三三「沈恭禮」には、恭礼の前に現れた女鬼の言葉に「如何罪責、羈囚如此耶(如何ぞ罪責せられ、羈囚さること此の如からんや)」とある(出典は唐・鄭還古『博異志』)。

○不堪其懼 その恐懼にたえない。似た表現が『太平広記』卷

三三一・鬼一六の「李霸」に見られる。任地で急死した県令の李霸は、部下を脅して絹帛や車馬を出資させ、帰葬の準備を整えるが、都の自宅に棺が到着すると次のような事態となる。「及至都、親族聞其異、競來吊慰、朝夕謁請。霸棺中皆酬對、莫不踏蹶。觀聽聚喧、家人不堪其煩（都に至るに及び、親族は其の異を聞き、競ひ来りて吊慰し、朝夕に謁請す。霸は棺中に皆な酬對し、踏蹶せざるは莫し。觀聽聚まり喧しく、家人は其の煩に堪へず）」（出典は唐・戴孚『広異記』。「家人不堪其……」は、本話のこの箇所と似ていて面白い。

○及今未已 今になってもまだ止むことがない。【注】1「太和八年」で述べたように、『河東記』中の紀年の記載では、大和八年（八三四）が最も遅い。李劍国『唐五代志怪傳奇叙録（増訂本）』は、大和八年に起こった本話の事件が「今になってもまだ止まない」と記述されることに注目する。李氏はこの「今」を、常識的に考えて怪異発生からそれほど年月を経ていない時期と考え、本話の執筆すなわち『河東記』の成立を開成年間（八三六〜八四〇）と推定している（中冊八三五頁）。なお成立年の下限については、『河東記』の26「蘊都師」に見える寺名「經行寺」も傍証となろう。宋・宋敏求『長安志』卷一〇「次南崇化坊」の記事によれば、經行寺は大和六年（八五二）に龍興寺と改められている。とすれば『河東記』の成立は、大和六年より

以前、あるいは遅くとも寺の改名からさほど年月を経過していなかった時期ということになる。

【参考】

○死者の霊が現れ、家事や公務を処理する話

死者の霊が現れて依頼事をする話は数多い。そうした中で本話のように家事を差配する、あるいは自分で残した仕事を処理する話も複数存在する。『太平広記』の鬼部から拾い上げれば、六朝志怪としては卷三三二・鬼七の「王志都」（出典は南朝宋・劉義慶『幽明録』、卷三三三・鬼八の「朱泰」（出典は南朝齊・祖冲之『述異記』）がこれに該当しよう。前者は、死んだ馬仲叔が王志都の独り身を氣遣つて結婚の世話をする。後者は、死んだ朱泰が自らの葬儀を準備し執り行ふ。唐代では、卷三三〇・鬼一五の「郭知運」、卷三三一・鬼一六の「李霸」、卷三三七・鬼二二の「薛萬石」「李潞」「蕭審」、卷三三八・鬼二三の「李載」（いずれも出典は唐・戴孚『広異記』）などが挙げられる。「郭知運」は、急死した郭知運が庁舎に帰り、公私の諸事を処理した後、自らの葬儀にも立ち会う。【注】4「不堪其懼」にも引いた「李霸」は、役所の部下から脅し取った絹帛や車馬で、自身の帰葬の準備を整える。また遺体を都の自宅に運ぶ道中では、盗まれた馬の所在を教え、都に到着すると、弔問に駆けつけた

親族に棺中から応対する。「薛萬石」は、自身の死を予知して急逝した薛萬石が、棺中から部下を呼びつけ、家族のために米を調達するように命じる。また山賊の襲来を予言して家族に逃亡を促し、逃避行で危難に遭った際も、香を焚いて相談すれば必ず答えてくれる。「李澣」は、【注】1「家事」に指摘したとおり、死後七日して西廊に現れ「家事を判囑」しているところが本話と類似する。彼は自分を後妻と合葬するように、子供達に命じている。「蕭審」は、蕭審が死後、自分の出資を受けながら逃亡を謀る胡人を捕らえ、正しく事後処理をするよう弟に命じる。また「李載」は、南地で病没したこの人物が一時的に蘇生し、残務整理を終え、家事を済ませる。厳密には死者ではないが、この話型のヴァリエーションと見るべきであろう。

鬼部以外は未調査であるが、例えばこれも【注】1「家事」に挙げた卷三三三の「王胡」がある。この話では、王胡の叔父が死後数年して家に現れ、胡の素行に問題があり、家事を治めないとして、彼を杖で打っている。ただ続く展開は、冥府巡りの話が中心となる。なお底本とした中華書局点校本『太平広記』（談愷本に基づく）は「王胡」の出典を記していないが、『法苑珠林』卷六・六道篇第四之二・鬼神部・舍宅部第一・感應縁に見える話である（『大正新脩大藏經』第五三卷・事彙部上、三一四頁下段、四庫全書本では卷一〇）。また同書卷三一・潜遁篇

第三三・感應縁の釈曇始の話にも、節録引用されている（『大正新脩大藏經』同卷、五一八頁上段、四庫全書本では卷四一）。

○鬼詩

鬼が詩を詠ずる話も多く、その作品は「鬼詩」と称される。『全唐詩』には、卷八六五、八六六の二卷にわたって約百三十首の鬼詩が収録されている。宋の蘇軾は、「鬼詩に佳なる者有り」と言い、友人達との話題にしたと伝えられるが（宋・趙令時『侯鯖録』卷二の「東坡言鬼詩」および「東坡與魯直等錄鬼詩」、明の胡應麟は『少室山房筆叢』卷三七・己部・二西綴遺下において、「鬼詩極有佳者。余嘗徧蒐諸小説彙爲一集、不下數百篇、時用以資談噓。聊撮其尤（鬼詩には極めて佳なる者有り。余嘗て徧く諸小説を蒐ね、彙めて一集と爲すに、數百篇を下らず、時に用ひて以て談噓に資す。聊か其の尤を撮る）」として、多くの作品を紹介している（明清筆記叢刊本・中華書局、一九六四年第三次印刷本による。初版は一九五八年。四庫全書本では卷二一）。その七言絶句の項には、『宣室志』から「澗水潺潺……」の詩も引かれている。

なお、「澗水」の注に指摘した、『太平広記』卷三四八の「唐燕士」の全文は次の通り。

晉昌唐燕士、好讀書、隱于九華山。常日晚、天雨霽、燕士步

月上山。夜既深、有羣狼擁其道、不得歸、懼既甚、遂匿於深林中。俄有白衣丈夫、戴紗巾、貌孤俊、年近五十。循澗而來、吟步自若、佇立且久。乃吟曰、澗水潺潺聲不絕、溪壠茫茫野花發。自去自來人不歸、長時唯對空山月。燕士常好爲七言詩、頗稱于時人、聞此驚歎、將與之言、未及而沒。明日、燕士歸、以貌問里人、有識者曰、是吳氏子。舉進士、善爲詩、卒數年矣。出宣室志

晉昌の唐燕士は、読書を好み、九華山に隠る。常て日の晩るに、天雨霽れ、燕士月に歩みて山に上る。夜既に深く、群狼の其の道を擁する有りて、帰るを得ず、懼れ既に甚だしく、遂に深林中に匿る。俄に白衣の丈夫有り、紗巾を戴き、貌は孤俊にして、年は五十に近し。澗を循りて来り、吟歩すること自若たりて、佇立すること且く久し。乃ち吟じて曰く、「澗水潺潺として声は絶へず、溪壠茫茫として野花発く。自ら去り自ら来りて人は帰らず、長時唯だ対す空山の月」と。燕士常に好んで七言詩を爲り、頗る時人に称せらるるも、此を聞きて驚歎す。将に之と言はんとするも、未だ及ばずして没す。明日、燕士帰りて、貌を以て里人に問ふに、識る者有りて曰ふ、「是れ吳氏の子なり。進士に挙げられ、善く詩を爲るも、卒して数年なり」と。『宣室志』に出づ

現行『宣室志』卷六の同話も、字体の相違を除いて異同はない（稗海本、四庫全書本による）。ただ、この話は『類説』卷二三に「白衣吟」と題して節録されており、詩の第三句の「人不歸」を「人不知」に、第四句「長時唯」を「歸時常」に作る。他に『詩話総龜』前集・卷四八・鬼部にも節録が見られ、こちらが第一句の「潺潺」を「潺湲」、第三句を「自來自去人不知」、第四句「長時唯」を「歸時長」に作る。（いずれも四庫全書本による。）

○「澗水……」の詩三首について

本話および『宣室志』の「唐燕士」、『全唐詩』の華山老人「月夜」の類似する三首を、平仄を付して並べてみると次のようになる。（「唐燕士」の吳某の詩については、『太平広記』および『宣室志』の原文による。）七言四句の形式を取ってはいるが、平仄は近体の絶句と全く異なり、押韻も「絶」（入声第十七薛）・「發」（入声第十月）・「月」（入声第十月）と、古詩の真部入声の通押となっている。

A 『河東記』韋齊休 2 4 6

澗水濺濺流不絶 ●○○○○●●押韻

芳草綿綿野花發 ○●○○○●●押韻

自去自來人不知 ●●●○○○
 黃昏惟有青山月 ○○○●○○●押韻

B 『宣室志』唐燕士

澗水潺潺聲不絕 ●●○○○○●押韻
 溪流茫茫野花發 ○●○○●○○押韻
 自去自來人不歸 ●●●○○○
 長時唯對空山月 ○○○●○○●押韻

C 『全唐詩』華山老人「月夜」

澗水泠泠聲不絕 ●●○○○○●押韻
 溪流茫茫野花發 ○○○●○○●押韻
 自去自來人不知 ●●●○○○
 歸時常對空山月 ○○○●○○●押韻

先ずAとBについて。B第二句の「溪流茫茫」には、Aの「芳草綿綿」に比して、「澗水」の流れる情景の寂しさが漂う。またBの後半第三句の「人不歸」、第四句の「長時唯對空山月」も、Aの後半が叙景句的であるのに対し、現世に永遠の別れを告げた死者の心情を詠う句としての性格を強めている。総じて、幽鬼の嘆きの詩に相応しい内容・表現となっているのが、Aと比

較したBの特徴と言える。(仮にBが『類説』の引く「自去自來人不知、歸時常對空山月」であった場合、この特徴は薄らぐものの依然として残ろう。)先に述べたように『河東記』の成立は『宣室志』よりも早い。Bは恐らくAの改作と考えてよいであろう。なお平仄を見ておくと、構成は両詩とも全く同じで、前半二句の二、四字目は平仄を揃え(第二句の六字目が平となっているのは、五、六、七字目に仄字が並ぶ近体の所謂「下三連」を避けたものか)、後半二句の二、四、六字目は反法を取っている。

次にCについては、作者、作詩の背景、成立時期のいずれもが不明で、作品以外に手懸かりがない。ただ第一句「聲不絶」、第二句「溪流茫茫」、第四句「歸時常對空山月」は、Bと同一あるいは類似する。第三句「自去自來人不知」はAと重なるが、Bの第三句が『類説』に引かれる「人不歸」であれば、これも同一となる。成立が先立つAではなく、Aをもとに改作されたBと似るということであれば、Cの華山老人「月夜」は、Bをもとに(あるいはAをも参照して)作成された可能性が高いと思われる。無論、A—C—BまたはC—A—Bの成立順序も想定しなければならないが、前者の場合は、鬼詩として結びつきの強いA—Bの間に隱者の詩Cが割り込む点が不自然に感じられる。後者の場合は、これもAの改作であるはずのBが逆に遡

つてCに類似してしまう点が腑に落ちない。あくまでも推測の域を出ないが、成立はやはりA—B—Cの順ではないだろうか。なおこの詩は、既に述べたように幾つもの文献に記載が見える。左にA・B・C以外のものを改めて列挙しておく。（いずれも四庫全書本による。）

宋・曾慥『類説』卷三三・宣室志「白衣吟」

華山月夜有白衣丈夫、循澗水吟曰、澗水潺潺聲不絶、溪壟茫茫野花發。自去自來人不知、歸時常對空山月。

宋・阮閱『詩話總龜』前集卷四八・鬼神門

唐燕士晉昌人、隱于九華。晚步山下、見一白衣少年閒步自若、曰、澗水潺潺聲不絶、溪壟茫茫野花發。自來自去人不知、歸時長對空山月。歸問里人曰、是吳氏子、善詩、卒僅數年矣。

この『詩話總龜』の記事について、郭紹虞校輯『宋詩話輯佚』（哈仏燕京学社出版、一九三七年／文泉閣出版社、一九七二年再版／中華書局、一九八〇年九月）の考証は、宋・李頎『古今詩話』からの引用とする。文泉閣本卷上三〇四頁、439「吳氏鬼詩」／中華書局本上冊二八七頁、438「吳氏鬼詩」。なお郭氏の引用では第四句の「長對」を「常對」に作る。

宋・洪邁『万首唐詩絶句』卷六六・九華山白衣「示唐燕士」

澗水潺潺聲不絶、溪壟茫茫野花發。自去自來人不知、歸時唯對空山月。

明・胡應麟『少室山房筆叢』卷三七・己部・二西綴遺下・鬼詩・七言絶

澗水潺潺聲不絶、溪壟茫茫野花發。自去自來人不知、長時唯對空山月。

明・高攀龍『高子遺書』卷六「水居題壁」

澗水泠泠聲不絶、溪流茫茫野花發。自去自來人不知、歸時常對空山月。

清・康熙四十六年御定『全唐詩』卷八六六・鬼部・九華山白衣「吟」

晉昌唐燕士隱九華山、夜步林中、有白衣丈夫、戴紗巾、貌孤俊、年近五十。循澗而來、吟步自若。將與之言、未及而沒。明日燕士問里人、有識者曰、是吳氏子。舉進士、善爲詩、卒數年矣。

澗水潺潺聲不絶、溪壟茫茫野花發。自去自來人不知、歸時唯對空山月。

河東記無名小鬼贈韋齊休詩 與此正同。云、澗水濺濺流不絶、芳草綿綿野花發。自去自來人不知、黃昏惟有青山月。

（岡田充博）

第三十一話 申屠澄（卷四百二十九・虎四）

【全文】

申屠澄者。貞元九年。自布衣調補漢（明鈔本漢作漢。）州什邡（明鈔本邠作邠。）尉。之官。至眞符縣東十里許遇風雪大寒。馬不能進。路旁茅舍中有烟火甚溫煦。澄往就之。有老父嫗及處女環火而坐。其女年方十四五。雖蓬髮垢衣。而雪膚花臉。舉止妍媚。父嫗見澄來。遽起曰。客衝雪寒甚。請前就火。澄坐良久。天色已晚。風雪不止。澄曰。西去縣尚遠。請宿於此。父嫗曰。苟不以蓬室爲陋。敢不承命。澄遂解鞍。施衾幃焉。其女見客。更修容靚飾。自帷箔間復出。而閑麗之態。尤倍昔時。有頃。嫗自外挈酒壺至。於火前煖飲。謂澄曰。以君冒寒。且進一杯。以禦凝冽。因揖讓曰。始自主人。翁卽巡行。澄當焚尾。澄因曰。座上尚欠小娘子。父嫗皆笑曰。田舍家所有。豈可備賓主。女子卽回眸斜睨曰。酒豈足貴。謂人不宜預飲也。母卽牽裙。使坐於側。澄始欲探其所能。乃舉令以觀其意。澄執盞曰。請徵書語。意屬目前事。澄曰。厭厭夜飲。不醉無歸。女低鬟微笑曰。天色如此。歸亦何往哉。俄然巡至女。女復令曰。風雨如晦。雞鳴不已。澄愕然歎曰。小娘子明慧若此。某幸未昏。敢請自媒如何。翁曰。某雖寒賤。亦嘗嬌保之。頗有過客。以金帛爲問。某先不

忍別。未許。不期貴客又欲援拾。豈敢惜。卽以爲託。澄遂修子壻之禮。祛囊以遺之。嫗悉無所取。曰。但不棄寒賤。焉事資貨。明日。又謂澄曰。此孤遠無鄰。又復湫隘。不足以久留。女旣事人。便可行矣。又一日。咨嗟而別。澄乃以所乘馬載之而行。旣至官。俸祿甚薄。妻力以成其家。交結賓客。旬日之內。大獲名譽。而夫妻情義益淡。其於厚親族、撫甥姪、泊僮僕廝養。無不歡心。後秩滿將歸。已生一男一女。亦甚明慧。澄尤加敬焉。常作贈內詩一篇曰。一官慙梅福。三年愧孟光。此情何所喻。川上有鴛鴦。其妻終日唵諷。似默有和者。然未嘗出口。每謂澄曰。爲婦之道。不可不知書。倘更作詩。反似嫗妾耳。澄罷官。卽罄室歸秦。過利州。至嘉陵（陵字原闕。據明鈔本補。）江畔。臨泉藉草憩息。其妻忽悵然謂澄曰。前者見贈一篇。尋卽有和。初不擬奉示。今遇此景物。不能終默之。乃吟曰。琴瑟情雖重。山林志自深。常憂時節變。辜負百年心。吟罷。潛然良久。若有慕焉。澄曰。詩則麗矣。然山林非弱質所思。倘憶賢尊。今則至矣。何用悲泣乎。人生因緣業相之事。皆由前定。後二十餘日。復（復原作後。據明鈔本改。）至妻本（本字原闕。據明鈔本補。）家。草舍依然。但不復有人矣。澄與其妻卽止其舍。妻思慕之深。盡日涕泣。於壁角故衣之下。見一虎皮。塵埃積滿。妻見之。忽大笑曰。不知此物尚在耶。披之。卽變爲虎。哮吼拏攫。突門而去。澄驚走避之。攜二子尋其路。望林大哭數日。竟不知所之。出河東記

【原文】 1

申屠澄者、貞①元九年、自布衣②調補漢〔潯〕州什邡〔邠〕③尉。之官、至眞符縣東十里許遇風雪大寒、馬不能進。路旁④茅舍中有煙火甚溫煦、澄往就之。有老父嫗及處女環火而坐。其女年方十四五、雖蓬髮垢衣、而雪膚花臉、舉止妍媚。父嫗見澄來、遽起曰、客衝雪寒甚⑤、請前就火。澄⑥坐良久、天色已晚⑦、風雪不止。澄曰、西去縣尚遠、請⑧宿於此⑨。父嫗曰、苟不以蓬室爲陋、敢不承命。澄遂解鞍、施衾幬焉。其女見客⑩、更⑪修容靚飾、自帷箔間復出。而閑麗之態、尤倍昔時⑫。

【訓読】 1

申屠澄なる者、貞元九年、布衣より漢州什邡の尉に調補せらる。官に之くに、眞符県の東十里許に至り風雪大寒に遇ひ、馬進む能はず。路旁の茅舎中に煙火の甚だ温煦なる有り、澄往きて之に就く。老父嫗及び処女火を環りて坐する有り。其の女年方に十四五、蓬髮垢衣なりと雖も、雪のごとき膚花のごとき臉にして、举止妍媚たり。父嫗澄の來たるを見、遽かに起ちて曰く、「客雪を衝きて寒きこと甚だしからん、請ふ前みて火に就かんことを」と。澄坐すること良久しく、天色已に晩れ、風雪止まず。澄曰く、「西のかた県を去ること尚ほ遠ければ、此に宿らんことを請ふ」と。父嫗曰く、「苟も蓬室を以て陋と爲さざれば、敢へて命を承けざらんや」と。澄遂に鞍を解き、衾幬を施く。

其の女客を見、更に修容靚飾し、帷箔の間より復た出づ。而して閑麗の態、尤も昔時に倍す。

【訳】 1

申屠澄は、貞元九年に無官の士人から漢州什邡県の尉に採用された。赴任の途中、眞符県の東方十里ほどに差し掛かったとき、吹雪に遭いひどい寒さで、馬も進むことが出来なかった。路傍の草ぶきの小屋から煙が立ち、とても暖かそうだったので、そちらへ馬を進めた。小屋の中には老夫婦と若い娘が火をかこんで坐っていた。娘は十四、五歳に見え、髪はよもぎのように乱れ、垢のついた着物を着ているが、雪のような白い肌と花のような美しい顔立ちで、立ち居振る舞いは垢抜けていた。老夫婦は澄が入って来るのを見ると急いで立ち上がり、「この大雪の中を、さぞ寒かったことでしょう。どうぞ火のそばへお進みください」と言う。澄はしばらく火にあたっていたが、空の色はもう暮れがかつているのに、吹雪は一向に止む気配がない。そこで「西の県まで行くにはまだ距離があります。ここに泊めてもらえないでしょうか」と言うと、老夫婦は「こんなあばら家でよろしければ、どうしてお泊めできないことがありますよ。どうか」と承知した。そして澄は鞍を解き、寝具を用意した。娘は客を見ると、容儀を整え、着飾ってとばりの奥から出て来たが、その上品で美しい容姿は、はじめに会ったときよりもひときわ

美しく見えた。

【校記】 1

- ② 「貞」、談愷本は誤って「眞」に作る。
- ② 「布衣」、伝奇輯校本は「黄衣」に作り、校記に「黄衣」原作「布衣」、據『太平廣記詳節』卷三七・明陳繼儒『虎薈』卷四（無出處）・曹學佺『蜀中廣記』卷八〇・詹詹外史『情史類略』卷二一「虎精」改」という。会校本には言及なし。
- ③ 「漢」漢州什邡「邠」、底本は「漢」を「濮」に作り、「明鈔本濮作漢」と注記する。四庫本も「漢」に作る。会校本校記には「濮 沈本作「漢」とある。また底本は「邠」を「邠」に作り、「明鈔本邠作邠」と注記する。会校本校記には「邠」沈本・陳本作「邠」とある。伝奇輯校本は明鈔本・『太平廣記詳節』・『情史類略』・『蜀中廣記』に拠って「漢州什邡」に改め、按語に「漢州、治雒縣（今四川廣漢市）。什邡、漢州屬縣、今爲市、屬四川德陽市」という。他に『全唐五代小説』（李時人編校、中華書局、二〇一四年。最初の版は一九九八年、陝西人民出版社刊）も「漢州什邡」、底本作「濮州什邡」、據野竹齋沈氏鈔本『廣記』改。按 古無以「什邡」名縣者、什邡在蜀、而唐漢州在今山東鄆城、故「濮州什邡」爲「漢州什邡」之誤」という（第三冊一三二九頁）。これに従って「漢州什邡」に改める。
- ④ 「旁」、会校本校記に「沈本作「旁有」とある。伝奇輯校本は「有」字を補い、校記に「有」字原無、據明鈔本・『廣記詳節』・『三國遺事』・『蜀中廣記』補。『情史』作「見路旁有茅舍」という。
- ⑤ 「衝雪寒甚」、伝奇輯校本校記に『廣記詳節』・『三國遺事』・『蜀中廣記』・『虎薈』・『情史』作「甚衝寒雪」とある。会校本には言及なし。
- ⑥ 「澄」、伝奇輯校本は「澄」の下に「欣謝之」を補い、校記に「此三字原無、據『蜀中廣記』・『情史』補」という。
- ⑦ 「晚」、会校本校記に「孫本作「暝」とある。伝奇輯校本校記には、「孫校本、『三國遺事』・『虎薈』・『情史』・『蜀中廣記』作「暝」。『廣記詳節』作「暝」、通「暝」とある。
- ⑧ 「請」、許本は「乞」に作る。会校本、伝奇輯校本には言及なし。
- ⑨ 「宿於此」、伝奇輯校本は「此」の下に「可乎」を補い、校記に「此二字原無、據『蜀中廣記』・『情史』補」という。
- ⑩ 「其女見客」、伝奇輯校本は「客」の下に「方止」を補い、校記に「此二字原無、據陳校本・『廣記詳節』・『三國遺事』・『虎薈』補。『蜀中廣記』・『情史』作「方」、脱「止」字。按、方止、將要留下」という。
- ⑪ 「更」、会校本校記に「陳本作「方止」。屬上句」とある。伝

奇輯校本は「更」字を削除し、校記に「修容靚飾 前原有「更」字、據『廣記詳節』刪。『三國遺事』作「修容艷妝」、『虎齋』作「修華飾翠」、『蜀中廣記』・『情史』作「修華靚飾」、皆亦無「更」字」という（「飾」は「飾」の異体字）。

⑫尤倍昔時 伝奇輯校本は「猶過初時」に作り、校記に「原作「尤倍昔時」、據『廣記詳節』・『三國遺事』改。『虎齋』作「尤過留時」、『蜀中廣記』・『情史』作「尤過向時」という。会校本には言及なし。

【注】 1

○申屠澄 人名。「申屠」は復姓。この人名は、『唐五代人物伝記資料総合索引』（傅璇琮・張忱石・許逸民編撰、中華書局、一九八七年）、『唐五代五十二種筆記小説人名索引』（方積六・呉冬秀編撰、中華書局、一九九二年）を調べても、本話だけにしか見えない。

○貞元九年 唐の年号。西暦七九三年。貞元は元年（七八五）から二十二年（八〇五）まで。徳宗朝。貞元二十二年八月辛丑順宗が即位し、永貞と改元している。『河東記』中、貞元の年号の見える話は、他に02「蕭洞玄」、03「獨孤遐叔」、09「胡媚兒」、11「盧佩」、16「韓弇」、18「鄭馴」、32「盧從事」、34「李自良」などがあり、比較的多い。

○布衣 庶人の服。昔、庶人は耄老に至らなければ帛を被られ

なかったから言う。転じて官位の無い庶民を指す。布衣から官吏になると言うことは、地方における使職の場合には可能であったと思われるが、この場合どのような経緯で仕官できたかは不明。なお、『四庫全書』『蜀中廣記』にはこの部分、「黄衣」とある。とすれば、この場合は一考の余地が有る。ただし、一般的に言って「黄衣」は、唐代小説の場合、冥土からの使者、皇帝の衣服、宦官の着る衣服、僧侶の着る衣服などと区分できるが、どれもふさわしくないように見える。

○調補 選び任ずる。他の同等の官に移し任ずる。『太平広記』には散見できる。多くは官途における官の異動を言うようである。『太平広記』卷二六・一・嗤鄙四「李據」には、「唐李據、宰相絳之姪。生綺紈間、曾不知書、門蔭調補澠池丞。因歲節、索魚不得、怒追漁師。云、緣獺暴、不敢打魚（唐の李抛、宰相絳の姪なり。綺紈の間に生まれ、曾て書を知らず、門蔭もて澠池の丞に調補せらる。歳節に因りて、魚を索むるも得ず、怒りて漁師を追ふ。云ふ、「獺の暴に縁り、敢へて打魚せず」と）」（出典は唐・盧言『盧氏雜説』、同卷二八・一・夢六・鬼神下「侯生」には、「上谷侯生者、家于荊門。以明經入仕、調補宋州虞城縣初娶南陽韓氏女、五年矣（上谷の侯生なる者、荊門に家す。明経を以て入仕し、宋州虞城縣に調補せらる。初め南陽の韓氏の女を娶りて、五年なりき）」（出典は唐・張説『宣室志（宣室記）』）。

「調補」は、『河東記』では18「鄭馴」に一例ある。

○漢州 州名。唐置く。現在の四川省広漢市。清・顧祖禹『讀史方輿紀要』（卷六七・四川・成都府）には、「漢州、秦蜀郡地、漢爲廣漢郡、後漢因之。唐初仍屬益州、垂拱二年、置漢州、天寶初、改德陽郡、乾元初復爲漢州（漢州、秦は蜀郡の地にして、漢は広漢郡と爲し、後漢は之に因る。唐初仍ほ益州に属し、垂拱二年、漢州を置く、天寶の初、德陽郡に改め、乾元初復た漢州と爲す）。」底本は「濮州」に作っている。「濮州」であるとするれば、現在の山東省鄆城^{けんじょう}県であり、他の関連する地名及び話柄の内容と齟齬することになる。

○什邡 県名。漢置く。四川省成都県の北、現在の四川省什邡市。また、「什方」「汧方」「汧邠」とも表記する。

○尉 県尉。官名。軍事・警察・刑罰をつかさどる官。通常、県尉は任官の初期に勤めることが多い。礪波護『唐代政治社会史研究』（同朋舎、一九八六年）所収第Ⅱ部「行政機構と官僚社会」第一章「唐代の県尉」参照。

○眞符縣 県名。唐置く。現在の陝西省洋県北、華陽鎮。『旧唐書』卷三九・地理志二および『新唐書』卷四〇・地理志四に見える洋州の「眞符縣」であるとすれば、申屠澄は長安を出て整屋県で南下し、駱谷道を経て眞符県に差し掛かる手前で雪に降りこめられたことになる。嚴耕望『唐代交通図考』（台湾商務印

書館、一九八五年）第十八「駱谷驛道」（六九二頁以下）及び図十三参照。なお今村与志雄訳『唐宋伝奇集』（岩波文庫、一九八八年）は、『元和郡県図志』卷三二・劍南道中・眞州の記事をもとに眞府県を「劍南道眞州に属する。（略）いまの四川省茂汶羌族自治県」（下冊三〇一頁、注五）とし、通常のコースから余りに外れすぎることから、「眞」は「貞」の誤りではないかと指摘する。今村氏によれば「貞符県は、唐代、山南西道の洋州に属する県の一つ。いまの陝西省洋陽県の北、黄陽鎮にあり、ここなら、（略）つじつまがあう」ということであるが、これは恐らく『元和郡県図志』卷三二・山南道三・洋州の条に見える「貞符縣」の記載に基づくもので、両唐書の地理志という「眞符縣」の位置と合致する。つまり唐代には、劍南道の眞府県と山南西道の眞（貞）府県があったことになる。

○大寒 極寒。『呂氏春秋』卷三「盡數」に「大寒、大熱、大燥、大濕、大風、大霖、大霧七者、動精則生害矣（大寒、大熱、大燥、大濕、大風、大霖、大霧の七者、精を動かせば則ち害を生ずるなり）」。

○溫煦 和いであたたか。南朝梁・簡文帝「六根讖文」に「所以象簾清潤、邀遊於夏室、重衾狐白、溫煦於冬房（象簾清潤なれば、夏室に邀遊し、衾の狐白を重ぬれば、冬房より溫煦なる所以なり）」（梁・僧祐『広弘明集』卷二八下）。

○老父嫗 年老いた父母。

○處女 結婚前の少女。『太平広記』卷三二・神二「蕭曠」に「俄有一青衣、引一女曰、織綃娘子至矣。神女曰、洛浦龍王之處女、善織綃于水府、適令召之爾（俄かに一青衣有り、一女を引きて曰く、「織綃娘子至れり」と。神女曰く、「洛浦龍王の処女なり。善く綃を水府に織る。適たま之を召さしむるのみ」と）（出典は唐・裴鉞『伝記（底本注記に「明鈔本作出傳奇」）』。

○環火而坐 火を囲んで座る。『太平広記』卷三八・鬼二「陸餘慶」に「餘慶緩轡躡之。寒甚。會群鬼環火而坐、慶以爲人、馳而遽下就火（余慶轡を緩めて之に躡ふ。寒さ甚だし。群鬼火を環りて坐するに會ひ、慶は人ならんと以為ひ、馳せ遽かに下りて火に就く）」（出典は唐・韓琬『御史台記』。

○其女年方十四五 その女性の年はちょうど十四五歳。年齢十四五の結婚適齢期の女性（美女）という描写は、『太平広記』にもしばしば見られる。『太平広記』卷二二〇・医三・異疾「王布」の「有女年十四五、艶麗聰悟（女年十四五なる有り、艶麗聰悟なり）」（出典は唐・段成式『酉陽雜俎』、卷二八一・夢六・夢遊上「櫻桃青衣」の「其妻年可十四五、容色美麗。宛若神仙（其の妻年十四五可りにして、容色美麗なり。宛も神仙の若し）」（出典の記載なし）、卷三三四・鬼一九「鄭德懋」の「女年十四五、姿色甚艶。目所未見（女年十四五にして、姿色甚だ艶なり。

目に未だ見ざる所なり）」（唐・張說『宣室志』）など。

○蓬髮 蓬のように乱れた髪。鬢を結っていないざんばら髪。『太平広記』卷五三・神仙五三「維楊十友」に「引入其下、有丐者數輩在焉。皆是蓬髮鶉衣、形狀穢陋（其の下に引き入るれば、丐者數輩の焉に在る有り。皆是れ蓬髮鶉衣にして、形狀穢陋たり）」（出典は前蜀・杜光庭『神仙感遇伝』。

○垢衣 垢のついた衣服。汚れた衣服。

○雪膚花臉 雪のような白い膚と花のように美しい顔。美人の形容。唐・白居易「長恨歌」に「樓閣玲瓏五雲起、其中綽約多仙子。中有一人字太眞、雪膚花貌參差是（樓閣は玲瓏として五雲起り、其の中 綽約として仙子多し。中に一人有り字は太眞、雪のごとき膚花のごとき貌參差としてはなり）」（『全唐詩』卷四三五、「白氏文集」卷二二）。

○舉止 立ち居振る舞い。挙動。東晋・陶淵明「閑情賦」に「神儀嫵媚、舉止詳研（神儀嫵媚たり、舉止詳妍なり）」（『陶淵明集』卷六）。『河東記』には02「蕭洞玄」に「舉止雍雍、可爲人表（舉止は雍雍として、人表と爲るべし）」。

○妍媚 美しく愛らしい。綺麗。『太平広記』卷二九二・神二「黃原」に「原隨犬入門、列房可有數十間、皆女子。姿容妍媚、衣裳鮮麗、或撫琴瑟、或執博棋（原犬に随ひ門に入れば、房を列ね可ば數十間有り、皆女子なり。姿容妍媚にして、衣裳鮮麗な

り、或いは琴瑟を撫し、或いは博棋を執る」(出典は唐・釈道世『法苑珠林』)。

○蓬室 陋屋。粗末な家。よもぎで屋根を葺いた家。『太平広記』卷三〇一・神一一「汝陰人」に「許問曰、鄆夫固陋、蓬室湫隘、不意乃能見顧之深。歡忭交并、未知所措(許問ひて曰く、「鄆夫固陋にして、蓬室湫隘たり、意はざりき乃ち能く顧みらるるの深きとは。歡忭交^{くわんぺん}並^{あは}せて、未だ措^おく所を知らず」と)」(出典は唐・戴孚『広異記』)。

○解鞍 馬から鞍を外す。旅装を解く。『太平広記』卷四六三・禽鳥四「韋氏子」に「汧陽郡有張女郎廟。上元中、有韋氏子客於汧陽、途至其廟、遂解鞍以憩(汧陽郡に張女郎の廟有り。上元中、韋氏子の汧陽に客する有り、途に其の廟に至り、遂に鞍を解き以て憩ふ)(出典は唐・張讀『宣室志』。『河東記』では14「王琦」に「天興丞王錡、寶曆中、嘗遊隴州。道憩于大樹下、解鞍籍地而寢(天興の丞王錡、宝曆中、嘗て隴州に遊ぶ。道に大樹の下に憩^いひ、鞍を解きて地に籍^しきて寝^いぬ)」。

○衾幬 夜具と蚊帳。広く寝具を指す。「幬」は、とばり。蔽う。三国魏・曹植「贈白馬王彪」に「何必同衾幬、然後展慇懃(何ぞ必ずしも衾幬を同じくして、然る後に慇懃^{いんじん}を展^のべんや)」(『文選』卷二四)、西晋・潘岳「寡婦賦」に「歸空館而自憐兮、撫衾幬以歎息(空館に歸りて自ら憐み、衾幬を撫して以て歎息す)」

(『文選』卷二六)とあり、六臣注張銑の注には「衾被。幬帳也(衾は、被なり。幬は、帳なり)」。『河東記』にはもう一例08「獨孤遐叔」に「夜深、施衾幬於西窓下(夜深くして、衾幬を西窓の下に施く)」。

○修容 容儀を整え慎む。

○靚飾 美しく飾る。『後漢書』卷一九「南匈奴伝」に「昭君豐容靚飾、光明漢宮。顧景裴回、竦動左右、帝見大驚、意欲留之(昭君豐容にして靚飾し、漢宮に光明あり。景を顧みて裴回すれば、左右を竦動せしめ、帝見て大いに驚き、意は之を留めんと欲す)」。

○帷箔 とばりとすだれ。

○閑麗 みやびやかでうるわしい。閑は「嫺」と同じ。宋本『広韻』(上平二十八山)に「嫺は雅なり」。『太平広記』卷三六四・妖怪六「謝翱」に「頃之、有金車至門、見一美人、年十六七、風貌閑麗、代所未識(之を頃^{しほち}くして、金車の門に至る有り、一美人の年十六七なるを見る、風貌閑麗にして、代に未だ識^しらざる所なり)」(出典は唐・張讀『宣室志』)。

○昔時 本来は、むかし、いにしえという意味であるが、ここでは不適。時間的に「ちよつと前」あるいは「以前」の意。『太平広記』の用例は、ほとんど本来の用法。

【原文】 2

有頃、嫗自外挈酒壺至、於火前煖飲、謂澄曰、以君冒寒、且進一杯、以禦凝冽。因①揖讓曰、始自主人。翁即巡行。澄②當婪尾。澄因曰、座上尚欠小娘子。父嫗皆笑曰、田舍家所育、豈可備賓主。女子即回眸斜睨曰、酒豈足貴、謂人不宜預飲也。母即牽裙③、使坐於側。澄始欲探④其所能、乃舉令以觀其意。澄執盞曰、請徵書語、意屬目前事。澄曰、厭厭夜飲、不醉無歸。女低鬟微笑曰、天色如此、歸亦何往哉。俄然巡至女。女復令⑤曰、風雨如晦、雞鳴不已。澄愕然歎曰、小娘子明慧若此、某幸未昏⑥、敢請自媒如何。翁曰、某⑦雖寒賤、亦嘗⑧嬌保之。頗有過客、以金帛爲問、某先不忍別、未許。不期貴客又欲援拾⑨、豈敢惜。願「即」以爲託⑩、澄遂修子婿之禮、祛囊以遺之、嫗悉無所取。曰、但不棄寒賤、焉事資貨。明日、又謂澄曰、此孤遠無鄰、又復湫隘「隘」⑪、不足以久留。女既事人⑫、便可行矣。又一日、咨嗟而別⑬。澄乃以所乘馬載之而行。

【訓読】 2

頃く有りて、嫗外より酒壺を挈^さげて至り、火の前に於いて煖^{あたた}め飲ましめ、澄に謂ひて曰く、「君寒を冒^{をか}すを以てすれば、且く一杯を進め、以て凝冽^{ぎょうれつ}を禦^{ふせ}がん」と。因りて揖讓^{いふじやう}して曰く、「始むるに主人よりせよ」と。翁即ち巡行す。澄は婪尾^{らんび}に当たる。澄因りて曰く、「座上に尚ほ小娘子を欠く」と。父嫗皆笑ひて

曰く、「田舎家の育つる所、豈に賓主に備ふべけんや」と。女子即ち眸^{ひとみ}を回らし斜睨^{しやげい}して曰く、「酒豈に貴ぶに足らんや、謂へらく人宜しく飲に預^{あづ}かるべからず」と。母即ち裙^{すそ}を牽き、側に坐せしむ。澄始めて其の能くする所を探らんとして、乃ち令を挙げて以て其の意を觀んと欲す。澄盞^{さん}を執りて曰く、「書語に徵^ささんことを請ひ、目前の事を属^{つづ}らんこと意^{おも}ふ」と。澄曰く、「厭厭^{えんえん}として夜飲し、酔^よはずんば帰ること無し」と。女鬟^{わげ}を低らし微笑して曰く、「天色此くの如くんば、帰るも亦た何^{いづ}くにか往^ゆかん」と。俄然として巡りて女に至るに、女復た令して曰く、「風雨晦の如く、鶏鳴已ます」と。澄愕然として嘆じて曰く、「小娘子明慧なること此くの若し、某幸ひにして未だ昏せず、敢へて請ふ自ら媒するは如何」と。翁曰く、「某寒賤なりと雖も、亦た嘗^{つね}に之を嬌保^{けうほ}せり。頗る過客の金帛を以て問を為すもの有るも、某先には別るるに忍びざれば、未だ許さず。期せざりき貴客又た援拾^{えんしつ}せんと欲するとは、豈に敢へて惜しまんや。願はくは以て託と為さん」と。澄遂に子婿の礼を修し、囊^{ひら}を祛^{はら}きて以て之に遺らんとするも、嫗悉く取る所無し。曰く、「但だ寒賤を棄てざるのみにして、焉^{いづ}くんぞ資貨を事とせん」と。明日、又た澄に謂ひて曰く、「此は孤遠にして隣無く、又た復た湫隘^{せうあい}なれば、以て久しく留まるに足りず。女既に人に事ふれば、便ち行くべし」と。又た一日ありて、咨嗟して別れ、澄は乃ち乗る

所の馬を以て之を載せて行く。

【訳】 2

しばらくすると老婆が外から酒壺をもつてきて、火のそばにおいて温め、澄にすすめた。「寒い中を旅していらつしやったのですから、一杯召しあがり寒さを凌いでください」と。澄は丁寧に挨拶して言った。「始めは主人からどうぞ」老人から杯をまわし、澄が最後になった。澄は「この席には、お嬢さんがいらつしやいませんね」と言ったが、両親は笑い出し、「田舎育ちでお客様をもてなす席にお出しするわけには参りません」と言う。すると娘はこちらを横目に見ながら、「どうして酒席がそんなに大事なもんですか。ただ私は宴に参加する資格がないと思っただけです」と言った。母親はすぐさま娘の裾を引き、側に座らせた。申屠澄は娘の知識を測ろうとし、酒令を設けて、娘の気持ちを窺おうとした。澄は盃を取って言った。「酒令は古典の語句を引用して、目の前のことを歌うことにしましょう」澄は言った。『夜に飲んで良い気持ちになり、酔わなければ、帰ることは無い』と。娘は頭をたれ、一考して微笑みながら言った。『空もようはご覧の通りです。お帰りになるとおっしゃってどこに帰るといふのでしょうか』と。酒令は、すぐに娘の番になり、娘はまた言った。『風雨は月のない闇夜のようにで、鶏は鳴きやむことがない』澄は驚き、嘆息して言った。「娘さんはこ

んなに、明朗で賢いです。私は幸いにまだ結婚していません。自らが申し出て、お嬢さんと一緒にになりたいと思いますが、いかがでしょうか。」父親は言った。「私は貧しくて卑しい身分ですが、この娘を大事に育ててきました。多くの旅人が、金品をもつて求婚してきましたが、私はそもそも娘と別れることに耐えられず、許しませんでした。思いがけず、あなた様のような貴い人が求婚して下さいますならば、どうしてお断りすることがありましょうか。できれば娘をあなたに託すことにしたい」と。澄は遂に婿の礼を修め、荷物を開け、ありったけの物を結納として贈ろうとしたが、母親は何も受け取らずに言った。「私どもは、ただただあなたが貧しく卑しい事を嫌わずにいて下さることだけが願いです。結納なんて要らないのです」と。明日また、澄に言った。「ここは、ぼつんと離れた一軒家、隣家もなく、家も狭いので、長く留まることはありません。娘はすでにあなたの妻になったのですから、一刻も早く娘を連れて旅立ちなさい」と。それから一日経ち、ため息をついて別れを告げた。澄は乗って来た馬に娘を載せ旅立った。

【校記】 2

①「因」、伝奇輯校本は「因」の上に「澄起」を補い、校記に「此二字原無、據『蜀中廣記』補。『廣記詳節』作「澄」といふ。会校本には言及なし。

②「澄」、伝奇輯校本校記に『蜀中廣記』作「某」。按「始自主人翁、即巡行、澄當婪尾」、乃申屠澄語、『蜀中廣記』「澄」作「某」、語意尤明」とあり、会校本が「始自主人」四字を澄の言葉と取るのを誤りとする。

③「裾」、伝奇輯校本校記に『廣記詳節』作「裾」とある。会校本には言及なし。

④「探」、会校本校記に「陳本作「偵」とある。伝奇輯校本校記には「陳校本・『廣記詳節』・『虎薈』作「偵」とある。

⑤「女復令」、伝奇輯校本校記に『廣記詳節』「令」作「晒」。『蜀中廣記』・『情史』作「晒」、無「女復」二字」とある。会校本には言及なし。

⑥「昏」、底本・談愷本「昏」に作る。会校本は「婚」に作り、校記に「原作『昏』。現據沈本改」という。許本も「婚」に作る。伝奇輯校本は「昏」に作り、按語に「昏、同「婚」。『詩經・邶風・谷風』、「宴爾新昏、不我屑以。」という。

⑦「某」、伝奇輯校本校記に『廣記詳節』・『虎薈』・『蜀中廣記』・『情史』作「是」とある。会校本には言及なし。

⑧「嘗」、会校本は「常」に作り、校記に「原作「嘗」。現據沈本改」という。伝奇輯校本は「嘗」に作り、校記なし。

⑨「援拾」、伝奇輯校本校記に『廣記詳節』・『三國遺事』作「採拾」、『虎薈』作「受拾」とある。会校本校記には指摘なし。

⑩「豈敢惜、願(即)以爲託」、会校本校記に「惜 陳本作「惜也」とある。また会校本は「即」を「願」に作り、校記に「原作「即」。現據陳本改」という。伝奇輯校本校記には『廣記詳節』作「豈定分耶、願以爲託」、『蜀中廣記』・『情史』「定」作「是」、『虎薈』譌作「足」、餘同」とある。

⑪「湫隘(溢)」、伝奇輯校本は「湫隘」に作り、校記に「「隘」原譌作「溢」、據『廣記詳節』・『虎薈』・『蜀中廣記』・『情史』改。按、『左傳』昭公三年杜預注、「湫、下。隘、小。」という。これに従う。会校本には言及なし。

⑫「人」、伝奇輯校本校記に「黄本・『四庫』本・『筆記小説大觀』本・『廣艷異編』卷一八「申屠澄傳」・『續艷異編』卷一二「申屠澄傳」作「君」とある。会校本には言及なし。

⑬「咨嗟而別」、伝奇輯校本校記に『廣記詳節』・『虎薈』・『情史』・『蜀中廣記』作「從容爲別」とある。会校本には言及なし。

【注】 2

○凝冽 きびしい寒さ。極めて冷たいこと。『旧唐書』卷八〇・褚遂良伝に「高昌途路沙磧千里、冬風凝冽、夏風如焚。行人去來遇之多死(高昌の途路沙磧千里、冬風は凝冽にして、夏風は焚くが如し。行人去來して之に遇はば多く死す)」。

○揖讓 拱手の礼を行ってへりくだる。会釈して譲る。賓主相

見の礼。ここでは通常の挨拶と見てよいだろう。散見する語である。『太平広記』卷一五〇・定数五「喬琳」に「來客雖知名之士、未嘗與之揖讓（來客 知名の士と雖も、未だ嘗て之と揖讓せず）」（出典は唐・鐘輅『前定錄』、同卷三四一・鬼二六「李赤」に「宵分、忽有一婦人入庭中。赤於睡中蹶起下階、與之揖讓（宵分、忽ち一婦人の庭中に入る有り。赤睡中に蹶起し階を下りて、之と揖讓す）」（出典は唐・李冗『獨異志』）。

○巡行 席順に酒を酌む。『太平広記』卷三四五・鬼三〇「張庚」に「於是一人執樽 一人糾司。酒既巡行、絲竹合奏、般饌芳珍、音曲清亮（是に於いて一人樽を執り、一人糾司たり。酒既に巡行し、糸竹合奏し、般饌芳珍にして、音曲清亮たり）」（出典は唐・李復言『続玄怪錄』）。

○婪尾 坐客の最後まで酒をつぎ渡ること。また、「藍尾」とも称する。唐・蘇鶚『蘇氏演義』卷下に「今人以酒巡匝爲婪尾。又云婪貪也。謂處於座末得酒爲貪婪（今人酒の巡匝するを以て婪尾と爲す。又た婪貪と云ふなり。座末に処りて酒を得るを謂ひて貪婪と爲す）」また、『唐音癸籤』卷二〇に「此酒巡匝到末連飲三杯以慰之亦名婪尾。唐人河東記載申屠澄遇老翁嫗留飲澄讓曰始自主人、翁即巡澄當婪尾。則知婪爲自謙之辭。如俗云貪杯、然與藍又另一解矣。並方言而各有其義（此れ酒の巡匝して末に到り連飲すること三杯にして以て之を慰むるを亦た婪尾と

名づく。唐人の河東記に載す申屠澄に、老翁嫗と遇ひ澄に留飲して譲りて曰く「始むるに主人よりせよ」と。翁即ち澄に巡りて婪尾に當つ。則ち知る婪とは自謙の辞たり。俗に云ふ貪杯の如し、然らば藍とは又た另の一解なり。並びに方言にして各おの其の義有り」。なお、南宋・洪邁『容齋四筆』卷九「藍尾酒」には詳しい考証がある。

○小娘子 娘さん。お嬢さん。『太平広記』には頻出の語である。牛志平・姚兆女編著『唐人称谓』（三秦出版社、一九八七年）には、他人や自分の娘（少女）に対する呼称で、南北朝から唐宋にかけて使用されたと言う。

○田舍家 自らの家柄を謙遜するときに使う語。娘への求婚を辞退する際の常套句としても使われたようである。『太平広記』卷三二八・鬼一三「閻庚」にも、「仁亶乃云、閻侯是己外弟、盛年志學、未結婚姻。主人辭以田舍家、然有喜色。仁亶固求、方許焉（仁亶乃ち云ふ、「閻侯は是れ己の外弟なり、盛年にして學に志し、未だ婚姻を結ばず」と。主人辞するに田舎の家を以てす、然れども喜色有り。仁亶固く求むれば、方に許す）」（出典は唐・戴孚『広異記』）とある。

○回眸 眸をめぐらす。一瞥をくれる。振り返り見る。『太平広記』卷四八四・雜伝記一「李娃伝」に「徘徊不能去、乃詐墜鞭于地、候其従者、勅取之、累眄于娃。娃回眸凝睇、情甚相慕、

竟不敢措辭而去（徘徊して去る能はず、乃ち詐りて鞭を地に墜し、其の従者を候ち、勅して之を取らしめ、累りに娃を眇る。娃眸を回らし睇を凝らし、情甚だ相慕ふ、竟に敢へて辞を措かずして去る）、唐・白居易「長恨歌」に「天生麗質難自棄、一朝選在君王側。回眸一笑百媚生、六宮粉黛無顏色（天生の麗質自ら棄て難く、一朝選ばれて君王の側に在り。眸を回らして一笑すれば百媚生じ、六宮の粉黛顏色無し）」（『全唐詩』卷四三五、『白氏文集』卷一一）。

○斜睨 直視せずに、横目でちらつと見る。『太平広記』卷三四二・鬼二七「華州參軍」に「女之容色絶代、斜睨柳生良久。柳生鞭馬從之、即見車子入永崇里（女の容色絶代にして、柳生を斜睨すること良や久し。柳生馬に鞭うち之に従ひ、即ち見る車子の永崇里に入るを）」（出典は唐・温庭筠『乾驥子』）。

○酒豈足貴、謂人不宜預飲也 この句の解釈は大きく二つに分かれるようである。一つは、酒を囲む申屠澄らに対して飲酒自体を非難する口吻としてとらえる立場で、以下の訳がある。「お酒がどれほど大切で、ひとには飲ませられないなど言うのでしようねえ」（前野直彬編訳、中国古典文学大系24『六朝・唐・宋小説選』、平凡社、一九六八年）。「酒有什麼珍貴、人家是說不應該先喝（酒にどんな取り柄があると云うのですか、呑んではならぬと人は言うではないですか）」（『文白対照全訳太平広記』

天津古籍出版社、一九九四年）、「酒豈足貴、謂人不能多飲耶（酒がどうして貴重なものですか、飲み過ぎてはいけないうてはないですか）」（『白話太平広記』北京燕山出版社、一九九五年）。もう一つは、酒宴に加われぬ少女の立場から、その不満を表白する。以下の訳がある。「お酒って大層なものかしら。人が席に加わることもいけないなんて」（今村与志雄訳『唐宋傳奇集』下、岩波文庫、一九八八年）。また、「お酒がどれほど高価なもので、人には飲ませられないなんていうのでしょうか」（溝部良恵訳、中国古典小説選六、唐代Ⅲ『広異記・玄怪録・宣室志他』明治書院、二〇〇八年）。

○擧令 酒令を行う。「酒令」は、宴会などで行う一種の遊戲。その由来は古く、分韻の賦得詩、聯句などもその一環で發達した。宴会における参加者が一人命令者になり、韻字もしくは内容を指定し、その内容で詩歌を競作する。その酒令に従って詩を作成できない場合、罰として酒を飲むことになる。その遊戲性は奥深く、種々のものがある。詳しくは、赤井の「中国における寄り合いの文学」（『アジア遊学』九五、和漢聯句の世界、二〇〇七年一月）、さらに詳しくは、王小盾『唐代酒令藝術』（文津出版社、一九九三年）を参照されたい。

○徵書語 古典籍の言葉に照らして。他に用例はない。「書語」は、古典籍中の言葉や話。『隋書』卷六六・榮毗伝に「上笑曰、

朕雖不解書語、亦知卿此言不遜也（上笑ひて曰く、「朕書語を解せざると雖も、亦た卿の此の言は不遜なるを知るなり」と）。

○厭厭 物憂く、けだるいさま。うつらうつらと良い気持ちになるさま。なお、この句は古典籍を引用して酒令とするのであるから、当然出典がある。『詩経』小雅「湛露」第一章に「湛湛露斯、匪陽不晞。厭厭夜飲、不醉無歸（湛湛たる露は、陽に匪ずんば晞かず。厭厭たる夜飲は、酔はずんば帰ること無かれ）。この場合の「厭厭」は、毛伝によれば、「厭厭は安なり」とあり、くつろぎ安んずるさま。『詩集伝』では、「厭は厭安なり。亦た久しきなり。足るなり」とある。

○低鬟微笑 鬟を垂らして微笑む。『太平広記』卷四八七・雑伝記四「霍小玉傳」に「玉乃低鬟微笑（玉乃ち鬟を低れて微笑す）」。

○天色 空の様子。天氣の様子。

○俄然 急に。にわかに。突然。

○風雨如晦 これも『詩経』に出典がある。国風・鄭風「風雨」篇の第三章「風雨如晦、雞鳴不已。既見君子、云胡不喜（風雨晦の如し、鶏鳴已まず。既に君子を見れば、云胡ぞ喜ばざらんや）」。

『詩経』の詩篇に対して、『詩経』をもつて返した点に賢明さを見とめたのである。

○愕然 おどろくさま。

○明慧 賢明なこと。明らかで聡い。漢・劉向『説苑』卷一六

「談叢」に「辯智明慧、不如遇世（弁智明慧、遇世に如かず）」。

『宋書』卷二・武帝本紀中に「以法興、聡敏明慧、必爲民望所歸（法を以て興し、聡敏明慧、必ず民望の帰する所と爲る）」、

唐・陳鴻「長恨歌傳」に「非徒殊艷尤態致是、蓋才智明慧、善巧便佞、先意希旨、有不可形容者（徒だに殊艷尤態是を致せるのみに非ず、蓋し才智明慧、善巧便佞にして、意に先んじて旨を希ひ、形容すべからざる者有ればなり）」（『白氏文集』卷一

二、『太平広記』卷四八六・雑伝記二）。

○自媒 正式な仲人を立てずに自ら結婚の申し出をする。『漢語大詞典』は、「女子自擇配偶、自薦」と注釈するが、ここでは、正式な婚礼の制度である「六礼」を行わずに、即ち仲人を立てずに、独自に当事者が結婚の申込をする事を指すと思われる。

『梁書』卷二四・蕭景伝「夫自媒自衒誠哉、可鄙。自譽自伐實在可羞（夫れ自媒自衒するは誠なる哉、鄙しむべし。自譽自伐實に在れば羞べし）」、『太平広記』には散見される。一例を挙げれば、卷四四六・畜獸一三・猩猩「焦封」に「妾今寡居、幸見托于君子、無以妾自媒爲過。當念卓王孫家、文君慕相如、曾若此也。封復聞是語、轉深眷戀（妾今寡居し、幸ひに君子に托せらる、妾の自ら媒するを以て過ちと爲す無かれ。當に卓王孫家を念へば、文君の相如を慕ふこと、曾て此くの若きなり。封復た是の語を聞き、転た深く眷戀す）」（出典は唐・柳祥『瀟湘

録』。

○寒賤 貧しくいやしい。また、其の身分。寒微。『晋書』卷三四・羊祜伝に「雖歷位外内之寵、不異寒賤之家。而猶未蒙此選（位は外内の寵を歴ると雖も、寒賤の家と異ならず。而して猶ほ未だ此の選を蒙らず）」、『南史』卷四六・周山図伝に「周山圖、字季寂、義興義鄉人也。家世寒賤。年十五六氣力絶衆、食噉恒兼數人（周山圖、字は季寂、義興義郷の人なり。家は世よ寒賤なり。年十五六にして氣力衆に絶し、食は噉ふに恒に數人を兼ね）」。『太平広記』にも散見される。

○嬌保 可愛がつて育てる。慈しみ保育する。『太平広記』には、他に例を見ない。

○過客 通行する人。旅人。旅客。南朝梁・何遜「擬輕薄篇」に「鳥飛過客盡、雀聚行龍匿（鳥飛び過客尽き、雀聚りて行龍匿る）」（『何水部集』）。『太平広記』卷九一・異僧六「明達師」「明達師者、不知其所自。於闐郷縣住萬廻故寺。往來過客、皆謁明達、以問休咎。明達不答、但見其旨趣而已（明達師なる者、其の自る所を知らず。闐郷縣に於いて万廻故寺に住す。往來の過客、皆明達に謁せんとし、以て休咎を問ふ。明達答へず、但だ其の旨趣を見るのみ）」（出典は唐・牛肅『紀聞』）。

○金帛 黄金と絹帛。金繒。財物。『史記』卷五三・蕭相国世家に「沛公至咸陽、諸將皆爭走金帛財物之府分之（沛公咸陽に至

り、諸將皆争ひて金帛財物の府に走きて之を分つ）」。

○貴客 貴い賓客。貴賓。

○援拾 婚約なつたときに女性側から結婚を同意する謙辞。日本風に言えば「拾ってもらう」「片付く」などという類か。用例を見ない。「援」字について一言すれば、19「成叔弁」に「元和十三年、江陵編戸成叔弁有女曰興娘。年十七。忽有媒氏詣門云、有田家郎君。願結姻媛（元和十三年、江陵の編戸、成叔弁に女有りて興娘と曰ふ。年十七なり。忽ち媒氏有りて門に詣りて云ふ、「田家に郎君有り。願はくは姻媛を結ばん」と）とあり、この「姻媛」は姻戚關係を結ぶこと、「姻援」に同じ。『漢語大詞典』（第四冊三四二頁）には、「姻援」の項に「姻媛、亦作「姻媛」として、『宋書』卷九五・索虜伝に「至此非唯欲爲功名、實是貪結姻援（此に至りては唯に功名を爲さんと欲するのみに非ず、實は是れ姻援を結ばんことを貪るなり）」とあるのを引いている。

○子壻之禮 娘婿としての礼儀。『太平広記』卷二八・鬼三「王恭伯」に「恭伯懼、因述其言。我亦贈其玉簪、惠基令檢。果於亡女頭上獲之、惠基乃慟哭。因呼恭伯以子壻之禮（恭伯懼れ、因りて其の言を述ぶ。「我も亦た其の玉簪を贈れり」と。惠基檢せしむるに、果して亡女の頭上に之を獲、惠基乃ち慟哭す。因りて恭伯を呼ぶに子壻の礼を以てす）」（出典は「邢子才山河別

記)。

○資貨 資産・財産をいう。ここでは結納金。

○孤遠 ぼつんと一つだけ遠く離れている。唐・張九齡「晨出郡舍林下」に「片雲自孤遠、叢篠亦清深(片雲自ら孤遠、叢篠亦た清深)」(『全唐詩』卷四人)。

○湫隘 土地や建物が低くて狭いさま。『太平広記』卷七四・道術四「兪叟」に「於是延入一室、湫隘卑陋、摧簷壞垣、無牀榻茵褥、致敝席於地、與呂生坐(是に於いて一室に延き入るれば、湫隘卑陋にして、摧簷壞垣、床榻には茵褥無く、敝席を地に致し、呂生と坐す)」(出典は唐・張讀『宣室志』、同卷三〇一・神一一「汝陰人」に「許問曰、鄙夫固陋、蓬室湫隘、不意乃能見顧之深、歡忭交并、未知所措(許問ひて曰く、「鄙夫固陋にして、蓬室湫隘たり、意はざりき乃ち能く顧みらるることの深きとは、歡忭交も并さり、未だ措く所を知らず」と)」(出典は唐・戴孚『広異記』)。

○咨嗟 ため息をついて嘆く。咨嘆。『太平広記』にも散見され、例えば卷一五六・定数一一「舒元謙」には「翌日、辦裝出長安。咨嗟蹇分、惆悵自失。即駐馬廻望、涕泗漣如(翌日、弁装して長安を出づ。蹇分を咨嗟し、惆悵自失す。即ち馬を駐めて廻望すれば、涕泗漣如たり)」(出典は唐・蘇鶚『杜陽雜編』)。

【原文】3

既至官、俸祿甚薄。妻竭力①以成其家、交結賓客。旬日之内、大獲名譽。而夫妻情義益浹②、其③於厚親族、撫甥姪、洎僮僕廝養。無不歡心。後秩滿將歸、已生一男一女、亦甚明慧、澄尤加敬焉。常④作贈内詩一篇曰、一宦⑤(官)⑤慙梅福、三年愧孟光。此情何所喻、川⑥上有鴛鴦。其妻終日喟諷、似默有和者、然未嘗出口。每謂澄曰、爲婦之道、不可不知書。倘更作詩、反似姪(嬀)⑦妾耳。

【訓読】3

既に官に至るも、俸祿甚だ薄し。妻力を竭くし以て其の家を成し、交はりを賓客と結ぶ。旬日の内、大いに名譽を獲得たり。而して夫妻の情義益ます浹し、其の親族を厚くし、甥姪を撫し、洎僮僕廝養に於いて、心を歓ばしめざるは無し。後に秩滿ち將に帰らんとす、已に一男一女を生み、亦た甚だ明慧なり、澄尤も敬を加ふ。常て「贈内詩」一篇を作りて曰く、「一宦梅福に慙ち、三年孟光に愧づ。此の情何の喩ふる所ぞ、川上に鴛鴦有り」と。其の妻 終日喟諷し、黙して和すること有るに似たり。然れども未だ嘗て口に出ださず。毎に澄に謂ひて曰く、「婦爲るの道は、書を知らざるべからず、倘し更に詩を作らば、反て姪妾に似たるのみ」と。

【訳】3

ようやく任地に着いた。俸禄は少なかったが、妻は懸命に一家を切り盛りし、人付き合いもそつなくこなし、十日のうちに周囲の評判を得た。夫妻の情愛はますます深くなった。妻の夫の親族に対する思いは厚く、甥や姪をかわいがり、下僕や召使に至るまで、愛情が行き届かないことはなかった。役人の任期が満了となり、故郷に帰ることになった。すでに男の子と女の子が一人ずつ生まれ、子供らも明朗で賢かった。澄の妻への敬愛はますます深まっていた。以前、妻に贈る詩を作った。その一篇には次のようにある。

私の役人としての立場は、漢の梅福にかなわず

君は、賢妻で知られる後漢の梁鴻の妻が恥じ入るほどのはたらき

君の私にかけてくれた愛情はなんと喻えたらよいものか
そう、これこそ詩経の「関関たる雉鳩、河の洲に在り」というものだ

妻は一日中この詩を口ずさみ、黙って唱和の作を作っているように見えたが、一度も口には出さなかった。妻は常に澄にこう言っていた。「妻の道というものは、書物を知っていなければいけません。なおさらに詩まで作っては、かえって妾のようになつてしまいます」と。

【校記】 3

①「竭力」、底本及び黄本・四庫本・筆記本並びに「竭」字無し。許本、「力」字上、「竭」字あり。許本に従う。会校本、伝奇輯校本には言及無なし。

②「浹」、伝奇輯校本校記に『廣記詳節』・『虎齋』・『情史』作「洽」、義同」とある。会校本には言及なし。

③「其」、伝奇輯校本校記に『廣記詳節』・『虎齋』・『蜀中廣記』・『情史』作「至」とある。会校本には言及なし。

④「常」、伝奇輯校本校記に『廣記詳節』・『三國遺事』・『蜀中廣記』作「嘗」。常、通「嘗」とある。会校本には言及なし。

⑤「宦」「官」、底本は「官」に作る。伝奇輯校本は「宦」に作り、校記に「原作「官」、據『廣記詳節』・洪邁『萬首唐人絕句』卷二「申屠澄贈内」改『蜀中廣記』・『情史』・『全唐詩』卷八六七「眞符女與申屠澄贈和詩」作「尉」。按、此句用漢梅福典、……此詩爲五絶、依律此處當用仄字、「官」乃平聲、失律」という。これに従う。会校本には言及なし。

⑥「川」、会校本は「洲」に作り、校記に「原作「川」。現據陳本改」という。伝奇輯校本は「川」に作り、校記に「陳校本作「洲」、『會校』據改」という。談愷本は「川」に作る。

⑦「姬」「嫗」、底本は「嫗」に作る。伝奇輯校本は「姬」に作り、校記に「原作「嫗」、當誤、據『廣記詳節』改」という。これに従う。会校本には言及なし。

【注】3

○俸祿 役人に対する給料。職務に対する報酬の米または金銭。

『晋書』卷九〇・良吏伝に「質曰、是吾俸祿之餘、以爲汝糧耳。

威受之辭歸（質曰く、「是れ吾が俸祿の余なり、以て汝が糧と爲すのみ」と。威は之を受けて辞歸す）」、『太平広記』三八二・再

生八「任義方」に「送人云、但尋唄聲、當即到舍。見一坑當道、意欲跳過、遂落坑中、應時即起。論說地獄、畫地成圖。其所得

俸祿、皆造經像、曾寫金剛・般若千餘部（送る人云ふ、「但だ唄声を尋ぬれば、當に即ち舍に到るべし」と。一坑の道に当た

を見れば、意に跳過せんと欲し、遂に坑中に落ち、時に応じて即ち起つ。地獄を論說し、地に画きて図と成す。其の得る所の

俸祿もて皆經像を造り、曾て金剛・般若千余部を写す」（出典は唐・釈道世『法苑珠林』）。

○交結 まじわる。交際してよしみを結ぶ。連なり結ぶ。『太平

広記』には十例、うち卷二五二・詼諧八「吳堯卿」には、「權貴無不以賄賂交結之、故不離淮泗、僭竊朱紫、塵汚官省。三數年

間、盜用鹽鐵錢六十萬緡（權貴賄賂を以て之と交結せざるは無し、故に淮泗を離れず、朱紫を僭竊し、官省を塵汚す。三數年

の間、塩鉄の錢六十萬緡を盜用せり）」（出典は唐・羅隱『妖乱志』。また『河東記』では02「蕭洞玄」に「問其姓名、則曰、

終無爲。因與交結、話道欣然、遂不相捨、即俱之王屋（其の姓

名を問へば、則ち曰く、「終無爲なり」と。因りて与に交結し、道を話して欣然たり、遂に相捨てず、即ち俱に王屋に之く」。

○賓客 お客。まろうど。門下の食客。

○旬日 十日。十日間。又、十日ばかり。又、比較的短期間を指す場合もある。

○情義 よしみ。交情。常見の語である。『河東記』では24「章齊休」に「夫婦之道、重在人倫。某與娘子、情義至深、他生亦

未相捨（夫婦の道は人倫に在るを重んず。某は娘子と情義至つて深ければ、他生も亦た未だ相捨てず）」。

○甥姪 おいとめい。

○僮僕 しもべ。めしつかい。僮奴。従来は歴史上に存在しても、ほとんど注目を浴びなかつたこの種の存在が、唐代伝奇に至ると多くの役割を演じるようになる。唐・元稹「鶯鶯伝」に

おける崔鶯々と張生の仲を取り持つのが婢女「紅娘」であり、唐・薛調「無双伝」において劉無双と王仙客との間にあつて重

要な役回りを下僕の「塞鴻」と婢「採蘋」とが演じている。『河東記』にも06「呂群」では主人を殺す下僕が登場する。『太平

広記』卷二四・報応「三」「王簡易」に「其妻問、小奴何人也。簡易曰、某舊使僮僕、年在妙齡、偶因約束、遂致斃。今腹中塊

物、乃小奴爲祟也。適見前任吉州牧鍾初、荷大鐵枷、着黃布衫、手足械繫。冥司勘非理殺人事、款問甚急（其の妻小奴とは何人

なるかを問ふ。簡易曰く、「某が旧使の僮僕なり、年は妙齡に在り、偶たま約束に因りて、遂に致斃せしむ。今腹中の塊物は、乃ち小奴の崇りを為すなり。適たま前任の吉州の牧鍾初、大鉄枷を荷ひ、黄布の衫を着、手足械繫せらるるを見る。冥司は非理の殺人の事を勘し、款問甚だ急なり」と」（出典は後唐・王穀『報応録』）。

○廐養 卑しい小者。薪を取り馬を養うしもべ。廐役。頻出の語であり、『河東記』には、他に06「呂群」、17「韋浦」に用例がある。

○秩滿 官吏の任期が満了すること。『晋書』卷八一・王遜伝に「私牛馬在郡生駒犢者、秩滿悉以付官、云是郡中所産（牛馬の郡に在りて駒犢を生む者を私するも、秩滿つれば悉く以て官に付す、云へらく「是れ郡中の産む所なればなり」と）」、『太平広記』にも頻見され、卷一〇五・報応四「李惟燕」に「建德縣令李惟燕、少持金剛經。唐天寶末、惟燕爲餘姚郡參軍、秩滿北歸、過五丈店（建德縣令李惟燕、少くして金剛經を持す。唐は天寶の末、惟燕余姚郡の參軍と爲る、秩滿ち北歸するに、五丈店を過る）」（出典は唐・戴孚『広異記』、また卷二二七・鬼一二「唐儉」には、「今秩滿將歸、不忍棄去（今秩滿ち將に帰らんとするも、棄去するに忍びず）」（出典は唐・李復言『続玄怪録』）の語が見える。

○加敬 慈しみを与える。尊敬する。敬愛する。『後漢書』卷一

○下・梁皇后紀に「使小妾得免罪謗之累、由是帝加敬焉（小妾をして罪謗の累を免るるを得しむ、是に由り帝敬を加ふ）。『太平広記』にも頻見され、一例を挙げれば、卷一五八・定数二三「顧彦朗」に「東川顧彦朗、以蔡叔向爲副使。感微時之恩、惟爲戎倅而嘗加敬（東川の顧彦朗、蔡叔向を以て副使と爲す。微時の恩に感じ、惟だ戎倅と爲して嘗に敬を加ふ）」（出典は五代十国・荆南・孫光憲『北夢瑣言』）。

○贈内詩 妻に贈る詩。唐代における代表作は、元稹の作品が有名。研究には、羌若冰氏の「贈内詩の流れと元稹」（『中国文学報』第五九冊、平成一一年一〇月）がある。他に唐詩には同題作が李白、白居易らに認められる。

○梅福 人名。漢代、寿春の人。字は子真。少くして長安に学び、尚書・穀梁春秋に精通する。郡文学となり、南昌尉に補せられる。後、官を棄て家居す。元始中、王莽が政を篡奪するや妻子を棄てて去り、九江に行き、仙人になったと伝える。江南に成仙の伝説が多く伝わり、遺跡もある。『漢書』卷六七・梅福伝に「梅福、字子真、九江人也。少學長安、明尚書穀梁春秋、爲郡文學。補南昌尉。後去官歸壽春、數因縣道上言變事（梅福、字は子真、九江の人なり。少くして長安に学び、尚書・穀梁春秋に明るく、郡文学と爲る。南昌の尉に補せらる。後官を去り

寿春に帰り、数しば県道に因り上りて変事を言ふ」。『全唐詩典故辞典』上下（范之麟・呉庚舜編、湖北辞書出版社、一九八九年）によれば、「梅福」「梅生」「梅仙」「梅尉」「梅少府」「梅真」「梅子真」「梅家鶴」などが詩語として使用されており、脱俗、昇仙を意味することが多く、また県尉となることを表す。

○**孟光** 人名。後漢の人。隠士梁鴻の妻。字は德耀。肥えて醜いうえに色が黒く、男勝りの力持ちであった。年三十にして梁鴻に嫁ぎ、装飾甚だ盛であつたが、七日に至るも鴻は見向きもしなかった。光が髪を束ねて椎の如くし、布衣をまとい、炊吸の具を執つてすすむと鴻は喜んで、これこそ真に梁鴻の妻なりと言つた。古代における賢妻の典型例として扱われることが多い。『後漢書』卷八三・逸民伝・梁鴻に見える。

○**鴛鴦** 鳥の名。おし。おしどり。鴛は雄、鴦は雌。その仲は極めて睦まじい。夫婦仲の良いことを象徴する。『詩経』小雅「鴛鴦」に「鴛鴦于飛、畢之羅之（鴛鴦于に飛び、之を畢し之を羅す）」とあり、毛伝には「鴛鴦は匹鳥なり」とある。西晋・崔豹『古今注』卷中・鳥獸に「鴛鴦、水鳥、鳬類也。雌雄未嘗相離、人得其一、則一思而死、故曰足鳥（鴛鴦は、水鳥にして、鳬の類なり。雌雄未だ嘗て相離れず、人其の一を得れば、則ち一は思ひて死す、故に足鳥と曰ふ）」。

○**吟諷** 「吟」は吟に同じ。口ずさむの意味。口に誦んずること。

と。『文心雕龍』卷一・原道に「中巧者獵其艷辭、吟諷者銜其山川、童蒙者拾其香草（中巧なる者は其の艷辭を獵し、吟諷する者は其の山川を銜み、童蒙なる者は其の香草を拾ふ）」、『太平広記』卷一七五・幼敏「李百藥」に「名臣之子、才行相繼、四海名流、莫不宗仰。藻思沉鬱、尤長五言。雖樵童牧豎、亦皆吟諷（名臣の子、才行相繼ぎ、四海に名は流れ、宗仰せざるは莫し。藻思沉鬱、尤も五言に長ず。樵童牧豎と雖も、亦た皆吟諷す）（出典は唐・胡璩『譚賓録』。『河東記』には06「呂群」に「題訖、吟諷久之、數行淚下（題し訖り、吟諷之を久しくす、數行淚下る）」という用例がある。

○**爲婦之道** 妻としての生き方。『太平広記』には他に二例がある。一例を挙げれば、卷四七五・昆虫「淳于禁」に「爲婦之道、貴乎柔順。爾善事之、吾無憂矣（婦爲るの道は、柔順を貴ぶ。爾善く之に事ふれば、吾は憂ひ無し）」（出典は唐・李玫『異聞録』）。

○**姬妾** 妾のこと。婦道として書物に通じていることが大事で、その上、詩を作るようならば、それは却って娼婦のような立場になってしまう。妻としては、似つかわしくないという意味。

【原文】4

澄罷官、即①磬室歸秦。過利州、至嘉陵②江畔、臨泉③藉草憩

息④。其妻忽悵然謂澄曰、前者見贈一篇、尋卽有和。初不擬奉示、今遇此景物、不能終默之。乃吟曰、琴瑟情雖重、山林志自深。常憂時節變、辜負⑤百年心。吟罷、潸然良久、若有慕焉。澄曰、詩則麗矣。然山林非弱質所思、倘憶賢尊、今則至矣。何用⑥悲泣乎。人生因緣業相之事、皆由前定⑦。後二十餘日、復⑧至妻本⑨家。草舍依然、但不復有人矣。澄與其妻卽止其舍。妻思慕之深、盡日涕泣。於⑩壁角故衣之下、見一虎皮、塵埃積⑪滿。妻見之、忽大笑曰、不知此物尚在耶。披⑫之、卽變爲虎、哮吼拏攫⑬〔攫〕⑭、突門而去。澄驚走避之、攜二子尋其路、望林⑮大哭數日、竟不知所之。出河東記。

【訓読】 4

澄官を罷めて、即ち室を罄くして秦に帰る。利州を過ぎ、嘉陵江の畔に至り、泉に臨み草を藉き憩息す。其の妻忽ち悵然として澄に謂ひて曰く、「前に一篇を贈らるるに、尋いで即ち和する有るも、初め奉示せんことを擬せず、今此の景物に遇ひ、終に之を黙する能はず」と。乃ち吟じて曰く、「琴瑟の情重しと雖も、山林の志自ら深し。常に憂ふるは時節變じ、百年の心に辜負せんことを」と。吟じ罷りて、潸然として良や久しく、慕ふもの有るが若し。澄曰く、「詩は則ち麗なり。然れども山林は弱質の思ふ所に非ず、倘し賢尊を憶はば、今則ち至らん、何を用てか悲泣せるや。人生の因緣業相の事は、皆前定に由る」と。後

二十余日、復た妻の本家に至る。草舍依然たるも、但だ復た人有らず。澄と其の妻とは即ち其の舍に止まる。妻の思慕の深きこと、尽日涕泣す。壁角の故衣の下に、一虎皮の、塵埃積滿するを見る。妻之を見て、忽ち大いに笑ひて曰く、「知らず此の物尚ほ在らんとは」と。之を披れば、即ち變じて虎と爲り、哮吼拏攫して、門を突きて去る。澄驚き走げて之を避け、二子を携へて其の路を尋ぬ。林に望みて大哭すること数日、竟に之く所を知らず。河東記に出づ。

【訳】 4

澄は官を辞したあと、すぐに家をあげて都に帰ろうとした。利州をよぎり、嘉陵江のほとりに出て、泉のそばで草をしいて休憩していると、妻が急に嘆いて澄に言った。「前にあなたから一篇の詩をいただいたとき、すぐに唱和の詩を作ったのですが、その時はあなたにお見せしようとは思いませんでした。でも、いまこの景色を見えていますと、どうしても黙っていられなくなりました」と。そして吟じ始めた。

夫婦の情愛は深く重いけれど

山林を慕う気持ちは深いもの

心配するのは年月が移り変わって

私の心が変わるのではないかということ

吟じ終わると、しばらくはさめざめと涙を流し、いかにも何

かを慕っているかのようだった。澄は言った。「お前の詩は確かにすばらしい。しかし山林はかわいい女の身で慕うべき場所ではない。もしご両親のことを思っているのなら、もうすぐ家に着く。どうしても悲しんで泣くことがあるか。人生の因縁や業というものは、みな前世から決まっていることなのだから」。

それから二十日あまりして、妻の実家まで帰って来た。草ぶきの家は依然としてもとのままであったが、人影は見えなかった。澄は妻とともに、その小屋に泊まることにした。妻は両親を慕い、一日中泣き続けていたが、壁の隅にあった昔の着物の下から、塵にまみれた虎の皮を一枚見つけた。妻はそれを見るなり急に大声で笑い出し、「これがまだここにあったのね」と言つて、その皮を着ると、たちまちに虎に変わり、そして咆哮し、爪を立てて地面を蹴つて扉を突き破り走り去った。澄は驚いて逃げ出し、二人の子供を連れて虎の去ったあとを追った。林を望みながら何日も大声で泣いた。その行方はとうとう分からなかった。『河東記』に出る。

【校記】 4

- ①「即」、許本なし。会校本・伝奇輯校本には言及なし。
 ②「陵」、底本注記に「陵字原闕。據明鈔本補」とある。会校本も「陵」字を補い、校記に「原無此字。現據沈本・陳本補」という。伝奇輯校本も「陵」字を補い、校記なし。談愷本・

許本「陵」字なし。

- ③「泉」、会校本校記に「沈本作「泉石」とある。伝奇輯校本は「泉石」に作り、校記に「石」字原無、據明鈔本・『廣記詳節』・『虎薈』・『蜀中廣記』・『情史』補」という。

- ④「憩息」、許本「憩思」に作る。会校本・伝奇輯校本には言及なし。

- ⑤「辜負」、許本「孤負」に作る。会校本・伝奇輯校本には言及なし。

- ⑥「用」、伝奇輯校本校記に『廣記詳節』・『虎薈』・『蜀中廣記』・『情史』作「忽」とある。会校本には言及なし。

- ⑦「皆由前定」、会校本校記に「皆由前 沈本・陳本作「何又可」とある。伝奇輯校本は「何由可定」に作り、校記に「原作「皆由前定」、據『廣記詳節』・『虎薈』改。按 細玩文意 此處無命運前定之意、「何由可定」者 謂無從確定也。明鈔本・陳校本作「何又可定」という。これに従うべきかとも思われるが、ひとまず底本による。

- ⑧「復」、底本注記に「復原作後。據明鈔本改」という。会校本は「復」に作り、校記に「原作「後」。現據沈本・陳本改」という。伝奇輯校本も「復」字を補い、校記なし。許本は「後至」に作る。

- ⑨「本」、底本注記に「本字原闕。據明鈔本補」とあり、許本は

「至以」に作る。会校本、伝奇輯校本には言及なし。

- ⑩「於」、伝奇輯校本は「忽於」に作り、校記に「忽 此字原無、據『廣記詳節』・『三國遺事』・『虎齋』・『蜀中廣記』・『情史』補」という。会校本には言及なし。

- ⑪「積」、伝奇輯校本校記に「『廣記詳節』・『虎齋』・『蜀中廣記』・『情史』作「盡」とある。会校本には言及なし。

- ⑫「披」、伝奇輯校本は「披」字の上に「遂取」を補い、校記に「此二字原無、據『廣記詳節』・『三國遺事』補」という。会校本には言及なし。

- ⑬「拏攫」「攫」、伝奇輯校本校記に「拏攫」「攫」原作「攫」、據黄本・『四庫』本・『筆記小説大觀』本・『廣記詳節』・『三國遺事』・『虎齋』・『蜀中廣記』・『情史』・『廣艷異編』・『續艷異編』改」とあり、按語に張衡「西京賦」の用例と『文選』李善注を引く。これに従う。なお会校本には言及なく、原文を「拏攫」に作る。

- ⑭「林」、伝奇輯校本は「林」字の上に「山」を補い、校記に「此字原無、據『廣記詳節』・『三國遺事』補」という。会校本には言及なし。

【注】4

○**罄室** 本来は「家を空けて」、ここでは「家を挙げて」の意。「全家」という意味で採りたい。即ち、家を挙げて残らず。「罄」

は、むなしい、から、うつろにする、の意。唐・陸贄「東郊朝日賦」に「家有罄室、巷無居人(家に罄室有り、巷に居人無し)」(『文苑英華』卷五五)。韋莊「秦婦吟」に「入門下馬若旋風、罄室傾囊如捲土(門に入り馬を下りること旋風の若く、室を罄くし囊を傾くこと捲土の如し)」とあり、李誼校注『韋莊集校注』(四川省社会科学院出版社、一九八六年)四九〇頁の注に「罄室とは、猶ほ尽室のごとし。『爾雅』釈詁に罄とは尽なり」とある。

○**歸秦** 都長安へ帰る。「秦」は、現在の陝西省付近を指す。この話の舞台は当初主人公が、漢州什邡(現在の四川省広漢市)県尉に赴任するところから始まる。途中、真符県(現在の陝西省洋県)で後に妻となる家族の居る茅屋に投宿する。任期が満ち、利州から嘉陵江に至る経路を取っている。

○**利州** 西魏、置く。現在の四川省広元市と旺蒼県に相当する。

○**嘉陵江** 川の名。西漢水と白水江とが合流して成る。白水とも言う。源は陝西省鳳凰の東北の嘉陵谷から出て、西漢水と合流し、白水江と合し、更に渠江をあわせ、江北県の南に至って長江に合流する。四川省境内の巨川。重慶の高台に立つと、嘉陵江と長江が合流する絶景が一望の間にある。

○**藉草** 草を敷く。草を敷物の代わりにする。ここは何でもない描写のように見えるが、注意したい。というのも、妻がじつ

は虎の化身であつたという結末に導く契機をこのシーンが担っていると考えられるからだ。人身に変身している異類が現形する場面、すなわち虎に戻るシーン（または人から虎に変身する場面）を類話で見ると、類似例を指摘できる。たとえば、『太平広記』巻四二九・虎四「張逢」には、「南陽張逢、貞元末、薄遊嶺表、行次福州福唐縣橫山店。時初霽、日將暮、山色鮮媚、烟嵐靄然。策杖尋勝、不覺極遠。忽有一段細草、縱廣百餘步、碧藹可愛。其旁有一小樹、遂脫衣挂樹、以杖倚之。投身草上、左右翻轉。既而酣睡、若獸蹶然。意足而起、其身已成虎也、文彩爛然。自視其爪牙之利、胸膂之力、天下無敵。遂騰躍而起、越山超壑、其疾如電（南陽の張逢、貞元末、嶺表に薄遊し、行きて福州の福唐縣橫山店に次る。時に初めて霽れ、日將に暮れんとし、山色鮮媚にして、煙嵐靄然たり。杖を策つきて勝を尋ね、覺えず遠きを極む。忽ち一段の細草有り、縦と広さ百余歩、碧藹愛すべし。其の旁に一小樹有り、遂に衣を脱ぎて樹に掛け、杖を以て之に倚る。身を草上に投じ、左右翻轉す。既にして酣睡し、獸の若く蹶然たり。意足りて起てば、其の身は已に虎と成り、文彩爛然たり。自ら其の爪牙の利きことと、胸膂の力とを視るに、天下無敵なり。遂に騰躍して起き、山を越え壑を超え、其の疾きこと電の如し」とある（出典は唐・李復言『続玄怪録』）。

○憩息 休息する。いこう。『北齊書』卷五〇・韓宝業伝に「神獸門外有朝貴憩息之所、時人號爲解卸廳（神獸門外に朝貴の憩息の所有り、時人号して解卸^{かいしゃやう}と爲す）」、『太平広記』卷四八七・雜伝記四「霍小玉傳」に「酒闌及暝。鮑引生就西院憩息。閒庭邃宇、簾幕甚華。鮑令侍兒桂子、浣沙、與生脱靴解帶（酒闌にして暝に及ぶ。鮑は生を引き西院に就き憩息せしむ。閒庭邃宇、簾幕甚だ華やかなり。鮑は侍兒の桂子・浣沙をして、生の与に靴を脱ぎ帶を解かしむ）」。

○悵然 なげくさま。いたむさま。失意のさま。『史記』卷二二七・日者列伝に「賈誼忽而自失芒乎無色、悵然噤口不能言（賈誼忽ちにして自失芒乎として色無し、悵然として口を噤^{つぐ}みて言ふ能はず）」。『太平広記』卷三三六・奢侈一「石崇」に「晉乃命左右、悉取珊瑚樹、有高三尺、條幹絕俗、光彩溢目者六七枚、如愷比者甚衆。愷悵然自失（晉乃ち左右に命じ、悉く珊瑚樹を取らしむ、高さ三尺有り、条幹俗に絶し、光彩目に溢るる者六七枚、愷の比の如き者甚だ衆し。愷悵然自失す）」（出典は南朝宋・劉義慶『世説新語』。『河東記』では、08「獨孤遐叔」、11「盧佩」に見える。

○不擬 くしようと思わなかった。「擬」は「欲」と同じ。

○琴瑟情 調和する。和合する。夫婦和合する喩え。夫婦の情愛。『詩経』周南「關雎」に「窈窕淑女、琴瑟友之（窈窕たる淑

女は、琴瑟之を友とせん」とあり、南宋・朱熹『詩集伝』に「此窈窕之淑女、既得之、則當親愛而娛樂之矣。蓋此人此德、世不常有、幸而得之、則有以配君子而成内治、故其喜樂尊奉之意、不能自己（此の窈窕たる淑女、既に之を得れば、則ち当に親愛して之を娛樂すべし。蓋し此の人此の徳、世に常には有らず、幸ひにして之を得れば、則ち以て君子に配し内治を成し、故に其の喜樂尊奉の意、自ら已む能はず）」という。『樂府詩集』卷三十六、齊・王融「秋胡行」に「且協金蘭好、方愉琴瑟情（且く金蘭の好みに協ひ、方に琴瑟の情を愉しむ）」。

○山林志 山林を慕う気持ち。山林に隠棲する希望。唐・杜甫「奉贈蕭十二使君」に「巢許山林志、夔龍廊廟珍（巢許山林の志、夔龍廊廟の珍）」（『全唐詩』卷三三三、『杜詩詳注』卷二三）、唐・王維「請施莊爲寺表」に「三十餘歲、褐衣蔬食、持戒安禪、樂住山林、志求寂靜。臣遂於藍田縣營山居一所（三十餘歳にして、褐衣蔬食、戒を持し禪に安んじ、山林に住まふを樂しみ、寂靜を求むるを志す。臣遂に藍田県に於いて山居一所を営む）」（『王右丞箋注』卷一七）。ここでは「本身」が虎である妻が、その住まいであつた山林を恋い慕うことを暗示している。

○時節變 季節が移り変わる。唐・白居易「思歸」に「坐惜時節變、蟬鳴槐花枝（坐して惜しむ時節の變するを、蟬は鳴く槐花の枝）」（『全唐詩』卷四三三、『白氏文集』卷九）。

○辜負 そむく。違背する。相手の意にそむく。孤負。『陳書』卷二八・世祖九王に「其日又下令曰、伯茂輕薄、爰自弱齡辜負嚴訓、彌肆凶狡（其の日に又た令を下して曰く、「伯茂は輕薄にして、爰に弱齡より嚴訓に辜負し、弥いよ凶狡を肆にす）」。許自昌本が作る「孤負」であつても意味は変わらない。

○百年心 ここでは、変わらぬ夫婦の愛情。一生変わらぬ心という意味。「百年」で人間の一生という概数を表す例には、「古詩十九首」其の一四に「生年不滿百、常懷千歲憂（生年百に滿たず、常に懷く千歳の憂ひ）」（『文選』卷二九）、東晋・陶淵明「擬古（九首）其の二に「生有高世名、既沒傳無窮。不學狂騁子、直在百年中（生きては世に高き名有り、既に没しては無窮に伝はる。学ばざるかな狂騁子、直だ百年の中に在るのみなるを）」（『陶淵明集』卷四）、唐・杜甫「登高」に「萬里悲秋常作客、百年多病獨登臺（万里悲秋常に客と作り、百年多病独り台に登る）」（『全唐詩』卷二二七、『杜詩詳注』卷二〇）などがある。『太平広記』卷三三一・鬼二七「唐晁」に「感懷而贈詩曰、嶧陽桐半死、延津劍一沈。如何宿昔内、空負百年心（懷ひに感じて詩を贈りて曰く、「嶧陽桐は半ば死れ、延津劍は一たび沈む。如何ぞ宿昔の内、空しく負く百年の心」と）」（出典は唐・陳邵『通幽記』）。

○弱質 よわい體質。よわいからだ。蒲柳の質。とくにここで

は弱々しい女性の体を意味する。『太平広記』にも散見され、卷一三〇・報応二九「綠翹」に「而風月賞翫之佳句、往往播於士林。然蕙蘭弱質、不能自持。復爲豪俠所調、乃從游處焉（而して風月賞翫の佳句、往往にして士林に播く。然れども蕙蘭弱質、自ら持する能はず。復た豪俠の調する所と爲り、乃ち遊処に従ふ）」（出典は唐・皇甫枚『三水小牘』、同卷三八八・悟前生二

「劉立」に「劉立者、爲長葛尉。其妻楊氏、忽一日泣謂立曰、我以弱質、託附君子、深蒙愛重。將謂琴瑟之和、終以偕老、何期一旦捨君長逝。哽咽涕泗、不能自勝（劉立なる者、長葛の尉と爲る。其の妻楊氏忽ち一日泣きて立に謂ひて曰く、「我弱質を以て君子に託附し、深く愛重を蒙る。琴瑟の和して、終に以て偕老せんと將謂ひしに、何ぞ期せん一旦君を捨てて長逝するとは」と。哽咽涕泗して、自ら勝ふ能はず）」（出典は唐・佚名氏『會昌解頤錄』。『河東記』の21「臧夏」にも「弱質纖腰、如霧濛花（弱質纖腰にして、霧濛の花の如し）」。

○賢尊 他人の父親の尊称。ここでは妻の両親のこと。牛志平・姚兆女『唐人稱謂』六八頁には、「他人の父母に対する敬称」とある。『太平広記』卷四七五・昆虫三「淳于禁」に「王曰、前奉賢尊命、不棄小國、許令次女瑤芳奉事君子。生但俯伏而已、不敢致詞（王曰く、「前に賢尊の命、小國を棄てず、次女の瑤芳をして君子に奉事せしむることを許せるを奉ず」と。生は但だ俯

伏するのみにして、敢へて詞を致さず）」（出典は唐・李玫『異聞錄』。

○業相 現在の所業には、原因があるとする考え方。『漢語大詞典』には、金・董解元「西廂記諸宮調」を典故に「可恨（いまましい）」や「該死（くたばれ）」のような「呪詛」の言葉としてのみ立項しているが、ここでは不適。『大漢和辞典』は、「佛三細相の一。妄心の始めて動くこと」とある。また、『新版禅学大辞典』（大修館書店、一九八五年）では「起信論に説く三細の一。根本無明により、真心が始めて起動した所」と言う。ここでは、連用される「因縁」と同義として考え、「業」（カルマ）と同じような意味として理解した。「業」は『岩波仏教辞典』（中村元・福永光司・田村芳朗・今野達編、岩波書店、一九八九年）によれば「サンスクリット原語の基本的意味は、〈なすこと〉〈なすもの〉〈なす力〉などで、〈作用〉〈行為〉〈祭祀〉などを表す語としてインド思想一般で広く用いられ、特に輪廻説と結びついてからは、輪廻転生をあらしめる一種の力として、前々から存在して働く潜在的な〈行為の余力〉を積極的に示すようになった」とある。

○前定 全ての運命は予め決められている。前世からの因縁。『太平広記』卷三三・神仙三三「崔生」に「明日謂生曰、此非人世、乃仙府也。驢走益遠、予之奉邀。某惟一女、願事君子。

此亦冥數前定、不可免也（明日生に謂ひて曰く、「此れ人の世に非ざるなり、乃ち仙府なり。驢走りて益ます遠ければ、予奉邀せん。某惟だ一女なれば、願はくは君子に事へん。此れも亦た冥數の前定なれば、免るるべからず」と）（出典は唐・盧肇『逸史』、同卷一〇一・釈証「鎮州鐵塔」に「上刻三千人姓名、悉是見在常山將校親軍。唯任友義一人無名、乃知冥數前定。刻斯塔者、何神異哉（上に三千人の姓名を刻す、悉くは是れ見に常山の將校の親軍に在り。唯だ任友義一人のみ名無し、乃ち知る冥數の前定なるを。斯の塔に刻する者、何ぞ神異なるかな）」（出典は五代十国・荆南・孫光憲『北夢瑣言』。『太平広記』中では「冥數前定」「運數前定」「事固已前定」「命固前定」などの言い方で散見できる。唐代小説集には、唐・鍾銘（一名、鍾籙）に『前定錄』一卷があつたと『新唐書』（芸文志）は伝えている。『太平広記』には『前定錄』を出典としている話が二十一話所収されている。

○壁角 壁の隅。壁の一角。

○故衣 常に身に著けて居る衣。ふるぎ。着古した衣服。ここでは、もと身に着けていた衣服。

○虎皮 虎の毛皮。虎の皮の着脱が虎への変身の契機となることについては【参考】「虎の皮」を参照されたい。

○哮吼 虎のほえる声。多くの変虎譚の最後に、虎に変身した

主人公が咆哮跳躍して姿を消す場面が印象的に描かれている。○拏攫 つかみ合う。ここでは虎に変身した妻が大地を掴むようにして疾駆するさま。『太平広記』には、卷二六・神仙一六「杜子春」に「俄而猛虎毒龍。狡狴獅子。蝮蝎萬計。哮吼拏攫而爭前欲搏噬。或跳過其上（俄かにして猛虎・毒龍・狡狴・獅子・蝮蝎万をもつて計ふ。哮吼拏攫して争ひて前み搏噬せんと欲す。或ひは其の上を跳過す）」（出典は唐・李復言『続玄怪録』）。

○走避 はしり避ける。身をかわすように危険を避けること。『太平広記』卷二一八・医一「郝公景」に「郝公景於泰山採藥、經市過。有見鬼者、怪群鬼見公景、皆走避之。遂取藥和爲殺鬼丸。有病患者、服之差（郝公景泰山に於いて藥を採り、市を経て過ぐ。鬼を見る者有り、群鬼の公景を見るを怪しめば皆走げて之を避く。遂に藥を取り和して殺鬼丸と爲す。病患有る者、之を服せば差ゆ）」（出典は唐・張鷟『朝野僉載』、同卷三四五・鬼三〇「張庚」に「遂引少女七八人、容色皆艷絶、服飾華麗、宛若豪貴家人。庚走避堂中、垂簾望之（遂に少女七八人を引き、容色皆艷絶にして、服飾華麗なり、宛も豪貴の家人の若し。庚走げて堂中に避け、簾を垂れて之を望む）」（出典は唐・李復言『続玄怪録』）。

○竟不 否定の強調形。結局（とうとう）しない。『河東記』では、23「盧燕」に「竟不知是何物也（竟に是れ何物なるかを

知らざるなり」の語がある。

○**不知所之** 行方知れずになった。話の末尾にあつて主人公の行方が不明であることを告げる常套句。頻出の句である。唐代小説には、六朝時代の神仙譚を踏まえ、信憑性を増し現実性を加味するさまざまな試みがなされているが、一方で話の虚構性を薄めて曖昧化し、ぼやかす工夫もある。それ自体が六朝の志怪小説から唐代伝奇小説の進展の一つであると思われる。例を挙げれば枚挙にいとまないが、一二を挙げておく。『太平広記』二二〇・医三「廣陵木工」に「後有婦人久疾、亦遇一道士、與藥而差。言其容貌、亦木工所見也。廣陵尋亂、木工竟不知所之（後に婦人の久しく疾む有り、亦た一道士に遇ひ、藥を与ふれば差ゆ。其の容貌を言へば、亦た木工の見る所なり。広陵尋いで乱あり、木工竟に之く所を知らず）」（出典は五代・徐鉉『稽神録』、卷三五二・鬼三七「牟穎」に「穎乃攜此婦人逃、不知所之（穎は乃ち此の婦人を携へて逃れ、之く所を知らず）」（出典は唐・柳祥『瀟湘録』。『河東記』では、10「板橋三娘子」、20「送書使者」の結びが「不知所之」になっている。

【参考】

○「酒令」について

主人公申屠澄が吹雪の中、真符県東十里ばかりのところ馬

を止め、一軒の茅屋を見つける。火を囲んで寒さをしのぎ、酒のやりとりが一巡する。申屠澄は娘を試してみようと、「酒令」をもちかける。そのルールは、「古典の言葉を使って、今の気持ちを表現する」というものである。申屠澄が「厭厭夜飲、不醉無歸」（『詩経』小雅「湛露」）と歌うと、娘は「風雨如晦、雞鳴不已」（国風・鄭風「風雨」）と詠じた。申屠澄は『詩経』に対して『詩経』の詩句で応じた娘がただならぬ者であると気づかされる。この『詩経』を酒令としてやりとりすることで直ちに思い起こすことは、唐・張文成『遊仙窟』におけるやりとりとの類似性である。

仙山にまごう妓楼を訪れた張郎、思いをかける十娘と仲介役の五嫂（ごそう）を相手に、詩歌のやりとりを中心に物語は進む。埒もないやりとりにしびれを切らした十娘は、五嫂に「酒令」を作れと催促する（原文は「請五嫂爲作酒章」）。そこで五嫂は「いにしえよりの詩歌に自分の気持ちを伝える」（原文は「不是賦古詩云『斷章取意、唯須得情』」ことを提案する。十娘は『詩経』周南「関雎」篇「関関たる雎鳩は、河の洲に在り。窈窕たる淑女は、君子の好逑」を歌って、良き配偶者を求める気持ちを表し、張郎は同じ『詩経』周南「漢廣」篇「南に喬木あり、休息ふべからず。漢に遊女あり、求むべからず」によって応酬し、愛する人に近づけぬ嘆きを表白している。これをうけた五嫂は、『詩

『經』齊風「南山」篇「薪を折ること之を如何、斧に非ざれば剋はす。妻を娶ること之を如何、媒に匪ざれば得ず」と言つて、両者に必要な仲人の周旋を歌う。一巡して、再び五嫂の番になり、衛風「氓」から「復関を見ざれば、泣涕漣漣たり、既に復関を見れば、載ち笑ひ載ち言ふ」を引いて、愛する男性への思いと喜びを歌う。十娘、おなじ「氓」から一節「女や爽はず、士は其の行を貳にす。士や罔極、其の徳を二三にす」を引き、女性の一途さと男性の気まぐれを訴える。張郎は王風「大車」「穀きては則ち室を異にするも、死しては則ち穴を同じうせん。予を信ならずと謂はば、曠日の如き有らん」と、我に不実無し、偕老同穴せんとの思いを訴え、太陽の下で愛情を誓うのである。『詩経』は、いわば古典中の古典であり、「酒令」のルールに使用されても不思議はないが、『詩経』各篇の意味を踏まえながら、現在の心情を歌うという、即興の当座性はあるいはこの両者の間において影響関係があるのかもしれない。

○「虎の皮」

主人公の申屠澄は、結婚後妻の実家を訪れる。草屋は昔と変わらずに依然としてあった。妻はその壁の片隅に、古着に紛れて「一虎皮」を見つける。これを契機に妻は虎に変身して山中に身を隠すことになる。翻ってみれば、申屠澄の妻はじつは虎

の化身であり、妻は仮の姿、虎の姿こそが「本身」であった。いわゆる虎に関する変身譚の中で、「虎皮」は重要な構成要素である。『太平広記』巻四二六から巻四三三までが「虎」の部門ですべて八〇話が収録されている。なかには中島敦「山月記」の粉本となった「李徴」（巻四二七・虎一、出典は唐・張説『宣室志』、類話の「張逢」（巻四二九・虎四、出典は唐・李復言『続玄怪録』、「南陽士人」（巻四三一・虎七、出典は唐・皇甫氏『原化記』）なども収録されている。「虎皮」の例は「虎」部門に集中して認められ本話以外に、「峽口道士」（巻四二六・虎一、出典は『解頤録』、「天寶選人」（巻四二七・虎一、出典は唐・皇甫氏『原化記』、「王居貞」（巻四三〇・虎五、出典は唐・裴鉞『伝奇』、「僧虎」（巻四三三・虎八、出典は『高僧伝』、「崔韜」（巻四三三・虎八、出典は唐・薛用弱『集異記』）などに登場する。例を二つほど見てみよう。「峽口道士」の梗概は左のようである。

開元年間、峽口には虎の被害が多く、往来の船が峽を下るときには生け贄を差し出した。そうでないと船中の被害が増大した。ある時、船中の客は皆富裕であり、一人の貧乏人が生け贄に選ばれた。別れるに際して、その貧乏人は皆の代わりに死ぬのであるから、わが言うことを聞けと言う。その男の言うには、陸に上がり、虎の足跡を追う、そこで一計があるので、流れの

難所で私の帰りを待つていてくれと言う。約束の日の正午を過ぎても戻ってこなければ船を出せとのこと。男は岸に上がって虎の足跡を追う。暫く行くと石洞があり、中に石床があつて道士が寝ており、傍らに「虎の皮」が掛かつていた。男はそれを取り上げ、斧を手に道士に臨む。目を覚ました道士は虎の皮の奪われたことを知り、男を食い殺すと脅す。男の方も負けじとけんかを仕掛ける。言い負けた道士は、事実を男に告げる。じつは道士は天帝に罪を得てこの地に流され、虎となつて千人を食い殺さねばならない。あと一人を欠くだけとなつた。男に虎の皮を奪われた以上、再び別の虎となつて千人の命を奪う必要があると。道士は一計を案じ、提案する。男には虎の皮を持つて船に戻り、髪の毛とひげを若干、指の爪、頭から足に及ぶ体から血液二三升を抜き取り、古着に包んで持つて来いと伝える。男は船に戻り、道士の到着を待つている。先ず虎の皮を道士に渡すと道士は虎に変身し、つぎに古着の包みを渡すと、虎はそれを喰らつた。このことがあつてからは、この地では虎の被害はなくなった。人々は口々に虎の食べた人数が千人に上り、虎は天上に帰つて行つたのであらうと噂しあつた。

「崔韜」のあらすじは次のようである。

蒲州の人である崔韜は、滁州を遊歴する途中「仁義館」に投宿する。駅の役人がここは不吉であり止めた方が良いと言う。

崔韜はこれを聞かずに宿泊する。夜半、寝に就くと正門から一匹の虎が入ってくる。中庭で虎の皮を脱ぐと妙齡の女性になり、崔韜の寝室にやつてくる。娘の言うには、父と兄は猟に従事しているが家は貧しく、自らは良き伴侶を求め、夜になると密かに虎の皮を着て君子を訪れているとのこと。これまでここを訪れた賓客は、自ら驚いて命を落とした者ばかりだった、今日は優れた君子に会えて幸いであり、わが意を察してくれと言う。崔韜は娘の来ていた虎の皮を古井戸の中に投じてしまう。娘と結婚し、明経に合格した崔韜は、妻と子を伴い宣城に赴任することになる。途中ふたたび「仁義館」に投宿する。崔韜が古井戸を覗いてみると、虎の皮は昔のまま残つていた。崔韜は妻に、ここは君と始めてあつた場所、虎の皮も昔のままだと言う。妻は虎の皮を着てみたいと言い、「虎皮」を身に纏うと忽ち虎に変身し、跳躍咆哮したかと思うと子供と崔韜を喰らつて去つて行った。

両者の話柄における「虎の皮」は、異類と人との境界を越境するアイテムとして登場する。その着脱は瞬時にして異世界に行くことができ、その扱いも通常の衣服と同様に簡便であり、人間が異類に変身するという非合理性を合理的解釈に引き寄せることができる。この点について、岡田充博『唐代小説「板橋三娘子」考―西と東の変驢変馬譚のなかで―』（知泉書館、二〇

一二年) 第三章「中国の変身譚のなかで」に次のような指摘がある。「中国の場合も、虎への変身に獣皮と衣服が登場する。しかし先に述べたように、起源として古く基本的なのは虎皮の方であり、以後もこの方法が受け継がれる。(そこから派生したと考えられる衣服の着脱には、虎皮の併用は見られない。)この衣服重視と虎皮重視の相違には、変身の能動・受動の性格が深く関わっている。自らの意思によって変身するヨーロッパの人は、衣服(文明)をかなぐり捨てて野生を露わにするのであり、罰によって変身する中国の場合は、虎皮(野生)に包まれて文明から拉致されるのである。」(二五三頁)。

○「申屠澄」と「白鳥処女説話」

本話は、明・曹学佺『蜀中広記』(巻八〇、四庫全書) 神仙記第十「附録鬼怪」に、『太平広記』を典拠に全文が所収されているのははじめ、明・陳繼儒の『虎薈』(巻四、叢書集成初編)、高麗僧・一然『三国遺事』(巻五・感通第七・金現感虎)、明・馮夢龍の編輯と考えられる『情史』(あるいは『情史類略』)、清・葆光子輯『物妖志』(虎)(香艷叢書第十集)などに所収されている。六朝志怪以降における話柄の進展として唐代小説の変虎譚に関心が持たれたのは、一つは人が虎に変身する(あるいは虎が人に変身する)「変虎譚」であり、もう一つはいわゆる「異

類婚姻譚」の一種としてである。本話は後者に属し、恋愛物語りの様相を呈しているところが、多くの関心を引いた。とくに見目麗しい美女が婚姻して良妻賢母として暮らしながら、のち「虎皮」を纏うことによって、野生を露わにした虎に戻るという衝撃は、読む者の心をとらえる。ここに「変虎譚」における神性と獣性との顕著に見ることが出来る。異類婚姻譚においては、獣夫と人妻、また男子と獣妻とのパターンがあり、「申屠澄」はむしろ後者の代表である。

この「申屠澄」は、世界的に分布する「白鳥処女説話」(中国に於いては「天鷲処女」説話とも言う)に属すると見なす学者もいる。李艷茹は『唐宋伝奇品読辞典』上巻(李劍国主編、新世界出版社、二〇〇七年)所収「申屠澄」において、以下のよう論評している。「この物語は全体のプロットや題材から見て、さらに深刻なテーマすなわち『白鳥処女説話』を含意している。物語のプロットは〈虎皮の脱皮〉→〈女性へ変身〉→〈虎皮を秘匿される〉→〈男性と結婚〉→〈虎皮の発見〉→〈変虎して去る〉に区分され、白鳥処女説話の変形である。現代の学者である李道和は白鳥処女説話の由来を、殷周期の被褻習俗にみとめ、漢代に至ると上巳の節句と結びつき、晋代に至って基本的な構成を形成した(『歳時民俗与古小説研究』天津古籍出版社、二〇〇四年)と指摘している。」(五六三頁)

「白鳥処女説話」は、普通以下のようなプロットを持つ。わが国に伝わる『近江国風土記』に従えば、①水源地（湖、池など）に白鳥が飛来して羽衣を脱ぎ、人間の女性の姿を現す ②天女が水浴びをしている間に女性に心を奪われた男が羽衣を隠す ③天女は天に帰れなくなってしまう という内容である。「虎皮」と「羽衣」という差はあれ、彼此の境を超越するアイテムの存在とプロット上の類似は注意してよいであろう。しかし、物語に占める「獣性」の比重は変虎譚においては重く、決定的な要素として機能している。参考「虎の皮」で指摘した類話の中に「申屠澄」の最も類似する作品に、「天寶選人」（巻四二七・虎二、出典は唐・皇甫氏『原化記』）がある。その梗概は、以下のようである。

天宝年間、科挙に推薦された男が都に上ろうとした。途中日暮れになり、ある村の僧房に投宿する。翌早朝に出発しようと院内を歩いていると、破屋中に十七八の美女が虎の皮を布団替わりに寝ている。男は密かに近づき虎皮を隠してしまう。少女は目が覚め、びっくりし恐れて男の妻となった。その理由を尋ねると、逃れるのは難しいからとのこと。虎の皮を隠したことは秘密にした。妻を連れて科挙に応じ、登第して任地に赴いた。数年で任期が満ち、二人の間には数人の子供があった。一家で旅をしているときに、以前に投宿した僧院に再び宿ることにな

った。男は妻に向かっていった。ここは君と始めて出逢った場所である、覚えているかと。すると妻は急に怒り出し、私は本来人間ではなく、偶々男にとらわれ、子供までもうけ、嫌いやでたまらなかった。仕方が無く付き従っていただけ、今また辱めを受けようとは思わなかった、虎の皮を返せと迫る。男は詫びたが、妻の怒りはいよいよ激しくなり、虎皮のありかを言ってしまう。北屋に隠してあった虎皮を手に入れた女は、怒り益々激しく目は稲妻のように輝き、跳躍したかと思うと大きな虎に変身し、振り返り咆哮し山中に消えていった。男は子らを連れて去って行った。

この点につき、小澤俊夫は『昔話のコスモロジー——ひとと動物との婚姻譚——』（講談社学術文庫、一九九四年）において以下のように述べている。「ここにいたって、この話はじつは『天人女房』のあの、「羽衣」をめぐるモチーフとひじょうに近いことがはっきりした。『天人女房』では、天人の衣を取った男自身が天人を妻としている。（略）『虎女房』は人物が複雑化されているが、構造としては『天人女房』と同じと考えてよいだろう」（二五一頁）。

（赤井益久）